人魚になったヤンキー

向原メグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人魚になったヤンキー

【Ｎコード】
Ｎ９７０８Ｇ

【作者名】
向原メグル

【あらすじ】
今や絶滅危惧種たるヤンキーの、普通じゃない女子高生の深海ルリ。何故か、全く所縁も無い異世界に来てしまい様々な事に戸惑うも「異世界だからしょうがねぇ」と納得し、携帯で妹と連絡を取りつつ観光がてら異世界生活を満喫することに。ヤンキーの癖に真面目だが、口が悪くて手も足も早い、おまけに嘘や誤魔化しが得意なルリのちょっと下品な異世界生活。残念ながら、主人公に恋愛する気は全く無いようです。

プロローグ・あたしが何をした（前書き）

初めまして。この物語は、残念な事に、女子高生ながら少々言葉が下品であったり、普通に他者に暴力を加える表現が多々あります。稀に流血表現もあります。苦手な方は、閲覧の際にご注意いただけますようお願い申し上げます。

プロローグ・あたしが何をした

「ヒトにはさ、何事も向き不向きってあるんだよね……」
ルリは無数の星が瞬く空を見つめながら呟いた。
周りは、紺色に揺蕩う海。海だと断定できるのは塩気があるから。口に何度か入ったので確認できた。
「……ふぅ」
見たことの無い程大きく白い月が柔らかく輝いている。首を左右に動かし周りを見渡すと、大陸の影はなく、船影すら見当たらない。ルリはもう一度ため息を付き、呟いた。
「あー、どーしよ」
背中に学校指定の皮鞄とスポーツブランドのミニボストンを当て、浮力の足しにしているが水分を含んだ服は重く、夜の為か徐々に体温が下がってゆく。視界が徐々に霞んでゆくのを感じた。
「……でも、単車で事故って死ぬんじゃなくて……海で死ねんなら……いっか……」
ルリはそう言い、目を閉じた。

ある高校の下駄箱で、根元が茶色の金髪の女子生徒――深海ルリが履き物を履いていた。但し、女子高生らしいローファーではなく、土木作業員が履くような安全靴をきっちりと履き、スカートは異常に長く改造してある。
素早く安全靴の紐を結んだルリは、早足で歩き出す。周りの挨拶に適度に答えながら。
校門を出ると、ルリは走る速度をあげてゆく。
「深海さんさよならー」

「ルリー、また明日ー」
通り過ぎるクラスメイトに手を振りながら、右に勢い良く曲がる。速度を落とさないまま走り続けると、目の前はゴミ捨て場。
しかし、ルリは躊躇せず速度を上げてゴミ捨て場に飛び乗り、更に塀の上に登る。塀の上で器用にバランスを取り直し、幅十五センチの塀を走りだした。何度か右左と曲がった後、塀に接している街頭の前で止まった。
「……おし、いねぇな」
人がいない事を何度も確認してから、街頭に両手と右足をかけ、三メートルの高さを滑り降りる。左腿は右腿に乗せつつ、街頭の脇を押さえている。
特注改造のロングスカートがふわり、と円状に広がった。下からはパンツ丸見せだったろう。着地後にもう一度辺りを見回して、無人な事を確認する。
依然、一度、小学生にパンツ丸見せで降りて来た所を見られ、「緑パンツ！」と叫ばれた事は苦い思い出だ。
確認後に、ルリは再び走り出し、竹林の中に入って行った。途中にあった一メートル程の柵を両手を着いて飛び越え、玉砂利を敷き詰めた道を避け、舗装されていない土の道を走る。暫く走ると、石造りの鳥居が見えたので、ルリは速度を落とした。鳥居の前で一度礼をし、徒歩で鳥居をくぐる。
くぐった先に、狐の石像があった。五穀豊穣を稲荷神社である。掃除中の巫女さんに会釈しながら手水舎に向かい、右手で柄杓を持ち、左手、右手、口、左手の順番で清め、最後に柄杓を清めた。左手に持っていたスポーツブランドのロゴが入ったミニボストンからタオルを取出し、丁寧に拭った後、本殿に向かった。
賽銭箱に百円玉を投げ入れ、二礼二拍手一礼をし祈った後、玉砂利の道を離れ社務所の裏側へ向かう。
裏側の山茶花の生け垣の隙間を通り、低く跳躍し駐車場へ降り立った。ルリは腕時計を一度見た後、勢い良く走る。駐車場を通り

抜け、左に周り、狭く急な階段を三段飛ばしで降りてゆく。階段を跳ね続けて十七回目に左に曲がり、アパートの通路を走り抜けると、築地壁が見えてきた。ルリは不敵に笑い、更に走る速度を上げた。
築地壁の手前で高く跳び、壁を蹴って身軽に体を持ち上げ、勢いを殺さずに壁の内側に着地すると、目の前にストップウオッチを持った作務衣姿の白髪の男が現れる。広い日本家屋が目の前にあり、家の前後に大きな蔵があった。
「二十一分五十三秒一九……遅いか？」
ルリは何度か深呼吸し、息を整えた後応えた。
「違う。今日図書室に本返して来たから八分遅れ。新記録だ！」
腰に手を当てふんぞり帰るルリを見て、白髪の男は半眼で呻いた。
「ヤンキーが図書室で本借りるなよ……」
“ヤンキー”じゃなく“日本伝統を継ぐ者”と言って欲しい。あたしはな。ちゃんと授業に真面目に出て提出物も出す。遅刻早退だって、許可貰ってる」
ルリは縁側に向かい、安全靴の紐を解いて行く。
「着替えたら店来いよー」
「了っ解ー」
白髪の男が声をかけると、ルリは安全靴を持ったまま縁側に登り、障子を開けて室内に入って行った。
「オレも、鯉に餌やったら行くかね」
ストップウオッチを作務衣の中に押し込みながら、白髪の男は等間隔に並べられた石の上を歩いて言った。

家の前方の土蔵を改造した骨董屋、時鳥。時鳥と書いてホトトギスと読む。ルリのバイト先である。
「で、栄蔵さん。今日は何やる？」
ルリは手早く着替え、店の奥から出てきた。
金髪は頭の上で纏め和柄のシュシュでお団子にし、改造ロンスカセーラー服から藤の花柄の青い浴衣に着替えている。浴衣の上には

“骨董屋　時鳥”と黒の刺繍が入った割烹着を着ていた。顔には変装のつもりか、赤紫のファッションメガネをかけている。
「早かったな。じゃ着物の汚れとほつれ見てくれ。その後は花器磨きな」
「はーい」
作務衣の白髪男――栄蔵は店の隅でノートパソコンを弄っている。ルリは栄蔵の後ろに置かれている段ボールから“着物”と書かれているものを取出し、隣の和室中央の黒檀のテーブルの上に起いた。龍を模した照明を付け、一枚ずつたとう紙から取出し、付箋紙に柄・種類・ほつれ汚れ具合等特徴を書いてゆく。書き終わると着物を丁寧に畳み、たとう紙へ入れた後、上から付箋紙を貼り、汚れ具合でまとめる。
順調に作業が進み、一つの段ボールが終わった後にルリは栄蔵に話し掛けた。
「……ずいぶん汚れた振り袖多いけど？」
「ああ、まとめて買い叩いてやった」
栄蔵はパソコンを操作しながらさらりと応えた。
「このへんじゃ売れんが外国なら売れるかんな」
「ああ、タキさん行きか……」
栄蔵の奥さん、タキは息子のパリ赴任に着いてゆき優雅な外国生活を送っている。小遣い稼ぎ程度に、中古の浴衣や着物を蚤の市に出したらバカ売れしたので、定期的に栄蔵が着物等を送っている。勿論、向こうでタキさんが仕入れた（買い叩いた）ものも店に並ぶ。店名は和風だが、売っているものは和洋折衷。混沌。
「あ、ルリ。これ掘り出し物じゃね？」
栄蔵は隣の桐の箱から黒いビロードに包まれた面を取り出した。眼には金泥が塗られ、何とも寒気を感じる様な女性の面である。
「呪いの……能面？お祓いして貰ったら？なんか沸きそう」
「タダ同然で貰って来た。裏っかわ、すげえぞ」
ニヤリと栄蔵は笑い、ゆっくり裏面にすると――一面、茶色に近

い、鈍い赤色だった。
「おぉぉおおおぉぉおおぉぉ！」
「骨董やっててても中々こーゆーのには巡り合えねぇからな！貴重だ！」
ルリが色気の無い声を抑えながらも仰け反っていると、鳴子の鈴の様な音がした。栄蔵が仕事に熱中しやすい為、仕掛けを作ってもらったウインドチャイムを改造した鳴子だ。
「こんにちは、花器を見せて頂きたいのだけど」
品の良さそうな着物の老婦人が戸（自動ドア）の前で声をかけていた。押すタイプの自動ドアは分かりにくいと中高年に評判である。
「はい！どうも、いらっしゃい」
栄蔵は素早く能面を仕舞い自動ドアのボタンを内側から押した。客が来たので、ルリはお茶を淹れに水場に向かった。

「ルリ、もうそろそろ締めるぞ」
会社帰りのサラリーマンが青磁の壺を買ったのを見送った後、栄蔵はルリに言った。
「はいはいはーい」
ルリは四角い花器を布で磨きながら応えた。
「気になるのあったか？」
「今日は特にねぇ（能面以外）……でも」
綿の手袋で器を持ち、綺麗になったか隅々まで確認する。汚れが無いのを確認すると、白いサラシの上に置き、布で包み“値付け前”の付箋紙を張る。
「裏の蔵にしまってある江戸切子、もう出してもいいんじゃねーの？」
「そうか？」
栄蔵は壺と皿の棚の鍵を締めながら応える。
「まだ梅雨前、カラッと暑い時には涼しげだし、売れんじゃない？」

「そーだな。じゃ明日辺り割れ物に入れ替えるか」
棚の鍵を締め、間接照明を消してゆく。
「後、明日から中間だから三日は来れないよ」
ルリはサラシで包んだ花器を慎重に紫檀の棚に置いた。
「三日？」
「中間開けに集会あんの」
「……捕まったり、怪我したりすんなよ」
栄蔵が苦笑しながら言うと、ルリは少し考えてから
「おけー」
と気の抜けた声で話した。
「これから勉強か？」
「や、市民プールで泳いで来る」
メガネと割烹着、手袋を外して、ルリは花器を拭いた布を藤の籠に放り込んだ。
「頭スッキリさせた方が記憶出来るしな～」
「……成績良いヤンキーって微妙だろ？」
「へへ、教師も学生達もあたしをどう扱っていいか困ってるんだぜ。じゃ栄蔵さん、お先」
軽く言いながら、ルリは母屋に向かう通路のドアを開けた。

骨董屋・時鳥から市民プールまでは歩いて三十分、ルリなりにショートカットして十八分。
クロールで二百五十メートルプールを四往復した後、平泳ぎ、背泳ぎで二往復ずつ。ゴム製の水泳キャップで髪を纏めている為あまり目立たないのが良い、とルリは潜水しながら思っていた。たまに「勝負しない？」と言ってくる人もいるが。
隣接の市民浴場でプール成分を流した後、携帯を見ると九時半を越えていたので市民センターを出る。ついでに妹のアイから“バニラアイス二つ”とメールが来ていた。ヤンキーの姉をパシリに使う

とは、根性の据わった妹である。
プールと浴場がある市民センターからルリの家まで二十五分。ルリ流ショートカット十三分強。
ロングスカートを翻しながら公園の柵を飛び越えると、暗い公園を走り抜ける。“痴漢注意！”と書かれたポスターを何度か目にした後、公園から運動場へと続く柵を飛び越えた後――

ばしゃん、と大きな水音が響いた。
「何で！？」
ルリの声は浮き沈む気泡の音に混じり、本人ですら聞こえなかった。

プロローグ・あたしが何をした（後書き）

始まりました。何事も『はじまり』は突然です。

一話・人情が身に沁みるお年頃

瞼の裏が、黒から赤く染まる。
感覚が冷たい海水から布の様な感覚に変わっているのに気付き、ルリは勢い良く跳ね起きた。水死が回避できた事に一度嘆息する。
木の床に着地したルリが見たのは、銅色に近い髪と緑の目を見開いた恰幅の良いおばさん。
一瞬で外国の方と理解したルリは、正座をし、額を床に付けた。
構え……ジャパニーズ土下座スタイル。
「アイキャンネバーサンクユーイナフフォー、セイビングミーフロムドラウニング。マイネームイズルリ、フカミ」
日本人らしい棒読みの英語で土下座を続けたまま、更に“ところで、ここはどこですか？”と続けようとしたが、おばさんは困った様な顔をして部屋を出ていってしまった。
ルリは「発音間違った？まさかスペイン語か？いやイタリア語？やっぱりフランス語！？」と酷く混乱していたが、行動には出さず、体が軋むのを感じながらベッドに座った。
今さらだが服を確認すると、おばさんが着替えさせたのか生成りの七分丈ブラウスに厚手の黒いワンピース。サイドテーブルから水差しを取り、木のコップに注ぐと一気に飲み干し、呟く。
「あー、……水がうめぇ……」
横の丸窓を見ると、波の飛沫が光輝いていた。

「副船長！」
黒い髪の副船長――ブラックバーンは第一航海士と航路の相談中だったが、入って来た銅色髪の恰幅の良い女性に目を向けた。
「ベレニケ…では目覚めたか？」
「はい、でも……」

ベレニケと言われた恰幅の良い女性は気まずそうに押し黙った。
「聞いた事の無い言葉を…使っていました」
「そうか」
ブラックバーンは左手を顎に当てた。
「やはり、“人魚の海域”に浮かんでただけあって魔物なのでは？」
茶色のつり目の航海士がブラックバーンに尋ねた。ベレニケは両手を握りしめ、航海士に怒鳴る。
「イオシフ！あの娘は違う！疑うのも程々にしなさい！」
航海士――イオシフはびくりと体を竦めた。ベレニケはふん、と鼻を鳴らした後、目を伏せて話し出す。
「着替えさせた時、あの子の体に幾つもの殴られた様な跡がありました……どこかの船で虐待を受け、海に逃げ出した……もしくは故意に落とされたのか」
ベレニケは唇を噛み、続ける。
「服も下着も縫製がしっかりしたものですし、この周辺で見たことの無い形状です。貴重なラピスの耳飾りもしていました……見たことのない腕輪も。もしかすると……どこかの王女さま、貴族さまかも知れません」
三人は押し黙った後、ブラックバーンが立ち上がった。
「私が話してみよう。北か西大陸の言葉ならば一応理解は出来る。娘は落ちついているか？」
ベレニケは首を横に振った。
「いきなり跳ね起きて床に座り、頭を下げていました……恐らく命乞いかと思われます」
ブラックバーンはため息を付き、ベレニケに言った。
「食事を用意してやれば落ちつくかもしれん。ベレニケ、頼む」
「わかりました」
ベレニケは素早く出ていく。ブラックバーンも部屋を出ようとしたが、顔だけをイオシフに向けた。
「イオ、次の港に寄ろう。何か情報があるかもしれないからな」

「……わかりました」
イオシフが頷くのを確認した後、ブラックバーンはルリがいる船室に向かった。

「う、五ヶ所目……」
ルリはやることが無いので、ベッドの上に座り枝毛を探していた。最初は体育座りだったが、パンツ丸見せになっている事に気付きペタン座りに変更した。しかも下着も替えられていて、赤のカボチャパンツだった。還暦様仕様かよ！？と文句が言いたかったが我慢する。濡れた下着、あるいはノーパンよりはマシだ。ノーブラは妥協している。
「腹減ったし…」
皮鞄の中にソイジョイとカロリーメイトがあったのを思い出したが、見慣れた皮鞄は近くに無い。回収してくれたかも分からない。助けて貰った上「メシくれよォ！」とは流石に言いづらく、ルリは船室で誰かが来るのを空腹のまま待っていた。
（おばさんですら、ごっついナイフ持ってたしな……）
直には確認していないが、先程のおばさんが刃物を持っているとヤンキー直感が警告していた。
（定期的に揺れるから船の中、だよな。迂濶に歩いて『無礼者！切り捨て御免！』だったらイヤだし。履き物ないし）
皮鞄の中に入っていた折り畳み式の警棒が無いのを心細く思いながら、ルリは枝毛を探し続けた。すると足音が近づいて来たので、素早くベッドの上に正座をし直した。
足音はルリのいる部屋で止まり、ドアがゆっくりと開いてゆく。
入って来たのは黒い髪をした長身の若い男。切れ長の目が印象的だ。おばさんとは違い、所々に装飾が入った高そうな服を来ている。アジア系を彷彿とさせる漆黒の髪に、ルリは一瞬安心したが男の目は水色だったのでガッカリしてしまった。しかし、見た目、地位が

上の方には感謝を述べねばいかん、とルリは頭を下げた。
「アイハブユーヘルプミー、アンドサンクユー。アイアムアジャパニーズ。バイザウェイ、ウェアアムアイ？」
ルリは一気に言い切ってから（場所まで尋ねるのはちょっと図々しいか？）と思い、土下座からちらりと相手を見た。黒い髪の男は難しい顔をしてルリを見ている。
（ヤッベ！通じてないくさい！何言う！？ボンジュール？グーデンターク？チャオ？えー、それから…テレマッカシー？）
ルリは栄養不足を訴える脳をフル回転し、何を喋るか必死で考えていた所、低い声が聞こえた。
「……済まないが、此方の言葉は通じるか？」
流暢な日本語に聞こえた男の声に、ルリは顔を跳ね上げた。
「日本語？」
聞こえない様に小さく呟くと、ルリは深呼吸をしてからはっきりと言った。
「通じます。理解できます。アイキャンアンダースタッド」
ルリの言葉に黒い髪の男は驚いたが、更に近づいて話しだした。
「群島共通語は、一応使えるようだね。私はこの商船の副船長をしているブラックバーン、アタミ・ブラックバーンだ。君は、名前言える？覚えてる？」
ルリは愕然としていた。
アタミ。
（熱海なのかァーーー！！）
「……君、大丈夫？休む？」
心配そうに訪ねて来たアタミに、意識が戻ってきたルリは勢い良く横に首を振った。
「いいえ、平気です。あ、わたしは――――」
ルリは気付いた。異世界トリップなりタイムトリップなりしたとしても、自分の情報は隠した方が良いのではないか、と。おばさんも熱海――いやアタミ青年も漂流してた異国の娘を助けた、位にし

か思っていない。調子乗って『ワタシ異世界から来ちゃいましたッ！』とか言って珍獣扱いされ、見せ物にされたら嫌すぎる。
ルリは一瞬で考えをまとめ、偽名を名乗る事にした。
「わたしはルリコ・ディープシーです。助けて頂き、感謝の言葉が言い尽くせません」
深々とお辞儀をすると、アタミは笑みを浮かべた。
「いや、気にしないで良いよ。敬語は要らない。私も地位は高くないから……ルリコさんで良いよね？」

「“さん”は要りません。ルリコで結構です。敬語が要らないと言われても、わたしは助けて頂いた方々に敬意を抱かないほど恩知らずではありません」
ルリ――今からルリコはアタミを見ながらはっきりと丁寧に言った。自分を含め、周辺のヤンキーは何故か人情に脆い。以前、集団で映画鑑賞中、
『姫ねえさまが死んじゃった……！』
と音声が聞こえると皆ボロボロ泣いている輩である。
ルリコが余計な事を思い出していると、ドタドタと何人もの足音が聞こえて来た。
「副船長、開けて下さい」
アタミはドアの近くに行き開けると、バンダナを頭に巻いた女の子と、先程も見た恰幅の良いおばさんが鍋や籠を持って入ってきた。ベッドの近くのテーブルに二人がかりて食事の用意をしてゆく。コンソメに似た香りに腹が鳴りそうになったが、ルリコは根性で止めた。役に立つ特技だ。
「ルリコ、紹介するよ」
アタミが二人の方を左手を向け、おばさんの方を指す。
「さっきも見たと思うけど、此方がベレニケ」
続けて、バンダナの女の子を左手を向ける。
「隣がベレニケの娘のエウラ。多分歳が同じ位だから気軽に話し掛

けて」
　ベレニケ親子が食事の準備を終えたので、じっと此方を見ていた。ルリコは二人に向き直り、深々と頭を下げた。
「先程は失礼致しました。この度は助けて頂き、感謝しております。わたしはルリコ・ディープシーです」
　ルリコの言葉にベレニケは目を見開いた。
「あんた、言葉が話せたのかい？」
　ルリコは頭を上げ、苦笑した。
「驚かせてしまった様ですね。この言葉は使えますし、理解できます。読み書きは自信がありませんが」
　言葉が話せ理解できるのに、読み書きが出来ないと正直に言い、ベレニケの反応を見る。嘘をつくときは真実も混ぜると上手くいく、と教えられた。ベレニケはベッドに歩み寄り、ルリコの手を握った。
「こっちこそ、びっくりしてゴメンよ……。今まで辛かったろう。痛かっただろうね……。この船なら誰も殴ったりしないから、安心おし」
　ベレニケの言葉にルリコは何度か目を瞬いた。
「何があったかは聞かないけど、若い娘を何度も殴るなんてロクでもない奴らだね！次に大きな港行ったらアタシが海上警備団に文句行って来てやるから！」
　ルリコは目が潤んでくるのを止める事ができなかった。その様子を見て、バンダナを頭に巻いた少女――エウラもルリコの肩を掴んだ。
「全部忘れちゃいなよ！落ち着くまでウチに来れば良いし！大歓迎！」
二人に見つめられ、遂にルリコの左目から涙が流れ落ちた。
　（言えねぇ…こんな良い人達に
『この怪我は集団の喧嘩でしました！でも鉄パイプで応戦して三人は病人送りにしちゃったよテヘッ☆ムカついたから、つい半殺しにしちゃったんだ』

とか、言えない……！あたしもロクでもない一員だし……！！）
ルリコが歯を食い縛り、引きつった口元を右手で抑えていると、三人はいい感じに勘違いしてくれたらしい。
「……お腹すいただろ、ゆっくり食べな」
ベレニケが木の器にスープを盛り、ルリコに渡した。ルリコは促されるままに木のスプーンでスープを口に運ぶ。広がる味はやはり、コンソメに似ていた。
「おいしい、です…」
一言呟くと、ルリコは罪悪感から再び涙を流した。
――嘘と成り行きで創った身の上に、親身になられるのが、辛い。たまらず瞳を閉じると、目元付近に気配を感じ、後じさり瞼を上げた。
アタミの手がハンカチらしい布を掴み、ルリコの顔があった付近にあった。苦しい様な、悲しい様な表情をしていた。涙を拭おうとした、とルリコは理解すると、後ろめたい涙だから止めてくれ、と心の中で思った。
「……私達が居ては落ち着けないだろう。後でエウラを寄越すから食べたら休んでくれ、ルリコ」
アタミはそう言い、部屋を出ていった。アタミが閉めたドアを見、エウラは何故かニヤニヤしていたが、ベレニケは強ばった顔をしていた。
「さ、エウラ。アタシたちも行くよ。ルリコちゃんも疲れるだろ」
ベレニケは笑顔をつくり、鍋を持った。
「そうだね。じゃルリコ、アタイので悪いけど着替えも置いとくから使ってね！それじゃ！」
エウラも食器が入っていた籠を持ち、ドアを開ける。ベレニケが出ていった後にルリコに手を振り、静かにドアを閉めた。
ルリコは一人になった部屋で器を抱えたまま、ぼんやりとしていた。テーブルには、木の皿に茹で卵と、ベーコンの様な干し肉、焼いた小魚が置いてあった。隣の籠にはキツネ色の小さなパンが二つ

入っている。
（異世界に来て、初めて出会った人達がこんなに優しいなんて……嘘をつかなくても良かったかもな）
ルリコは一度ため息を付き、スープを啜った。少し冷えたスープは先程よりしょっぱく感じた。

二話・猫かぶりが疲れる

ルリコが助けられて二日目。
ひっきりなしにくる女性達に囲まれ、ルリコは甲斐甲斐しく世話をされていた。
アタミの配慮があるのか、男性はアタミ以来ない。海の屈強なオッサン達と話せ、と言われても微妙だとルリコは思った。
「もう安心おし」
「大変だったでしょ」
「船の上なら安心だから」
「ウチの息子余ってるから嫁に来る？」
どうやら“暴行を受けて海に逃げ出した異国の娘”と思われているようだった。
当然、嫁の件はやんわりと断った。
そんなんじゃないです嘘付きまくって申し訳のうございます、と平伏したい気持ちを抑え、ルリコは嘘を付き続ける事に決めた。
「次に向かうのはどこですか？」
エウラはナイフでマンゴーに似た果物を切り分けている。眼鏡をかけた女性――ドルシアが地図の中央付近を差した。地図には上下左右に大陸があり、大小様々な島々が載っている。使い古しているのか所々破れていた。
「向かってるのは、ここ。群島商人組合のあるセンタナ島の近くのオリ島よ。明後日の朝には着くわ」
今いるのはオ・ル・マリーヴェスタ群島諸国連合、と言うらしい。地図も群島諸国連合仕様で大陸には国の名前しか書かれていない、らしい。地図を見て、ルリコはやはり文字が読めない事を確認した。
群島諸国連合は四つの国から構成されている。南にある大陸に近い島々がノルヴェスタ国。

この船はノルヴェスタ一大きな港、ノルスヴェータから来たとエウラから聞いている。
同じく北大陸近くのソルヴェスタ国、長方形に似た島のソルスヴェータに麦と木材、樹脂に香木などを買い付けて来た帰りだとドルシアから先程聞いた。
そして東にあるのがウェスヴェラ国。最後に一国だけ、王様がいる西のイスタヴェラ王国。一番大きな島に国の名を冠した港がある様だ。但し、中央のセンタナ島は群島商人組合の私有島なので国には属さない。小規模な私有島は結構あるとも聞いた。金持ちが多いらしい。
「国境わかりにくくないですか？」
ルリコが聞くと、ドルシアはエウラが切り分けたマンゴーに竹串を添えてルリコの前に置いた。
「人が住んでる島なら、港や街に必ずどの国か書いてあるわ。船着き場の人も水先人も言ってくれるしね。私有島は大体警備員がいて、一般には封鎖されてる」
書いてあるなら分かりやすい、が文字が読めないのでルリコはマンゴーを食べながら地図を睨んだ。マンゴーは甘くて美味しい。
マンゴーを咀嚼しつつ、先程から地図の一点が気になっているので思いきって聞いてみた。
「この、点線で囲われた場所は何ですか？」
ルリコはソルスヴェータから左斜め下の赤点線で囲われた部分を指差した。点線にそって小さな文字が書いてあるが、ルリコは勿論読めない。
二人は指差した部分を見て、ぴくりと肩を動かした。観念した様に、エウラが話し始める。
「そこは、“人魚の海域”。ルリコがいた場所だよ。大昔は人魚がいて、財宝を積んだ船が幾つも沈められたんだってさ。勿論、今は人魚なんかいないよ」
エウラはグサグサとマンゴーを竹串で刺し、

「夜は発光クラゲや夜光貝なんかがいて、観光地になってる。だけど、今の時期は海竜の繁殖地になってるから、行くつもりじゃなかった。でもルリコ助けられたから皆納得してる」
と、マンゴーを頬張った。
ルリコは疑問に感じた。わざわざ仕事の帰りに寄る場所ではない。助けて貰って聞くのも奇妙だが。
「何故、わがわざ危険な場所に？」

ルリコが尋ねると、ドルシアは両手を胸の前で組み、エウラは目線を彷徨わせたあと、ゴニョゴニョと呟いた。
「……そりゃ、あの船長が」
「エウラ」
ドルシアに睨まれ、エウラは身を竦ませた。ドルシアは前髪を掻き上げながらルリコに微笑んだ。
「ルリコ、仕事があるからもう行かなきゃ。エウラ、あなたも手伝いがあるでしょう？」
ドルシアは立ち上がり、食器を片付け始めた。エウラも慌てて続く。ルリコの皿にはマンゴーがまだ残っていたが、二人は食べ終えていた。
「地図はあげるわ、お古でごめんなさいね」
「アタイがお昼持ってくるから、じゃあねルリコ」
「有り難うございました。エウラさん、ドルシアさん」
ルリコは二人を見送ると、腕を伸ばした。話題を逸らされた事も、あまり気にしていない。
（二人より上の人だもんな。雇い主かも知れんし。文句なんか迂闊には言えねぇか……しかし、海竜とは……どんなんだろ。凶暴なんかね。こえっ！）
二人の態度から、船長のせいで危険な海域に来たとわかった。しかし、ルリコにとっては恩人なので礼を言っておこうと思う。

しかし、誰か来ないと暇である。部屋にはベッド、テーブル、椅子三脚、オレンジ色の敷物、ベッドと反対の壁に据え付けてある棚しかない。棚には何も置いていない。
（敬語使わなくてイイのは楽だけど。しゃーねぇ、今度は腹筋でもやるか）
ルリコはマンゴーを食べきり水を飲むと、敷物の上に座り、ベッドの下枠に足をかけた。そのまま頭の後ろで腕を組み、ゆっくりと後ろに倒れる。
（ドアの下少し空いてるから、音ダダ漏れなんだよな。声抑えてー）

ルリコは気合いを入れ、腹筋を始めた。

（四十七、四十八、四十九……五十！）
五十回の腹筋を終えると、ルリコは敷物の上に横になり、深呼吸をする。何気なくドアに目を向けると、灰色の薄っぺらい物が見えた。雑巾でも飛ばされて来たか、と思ったが、動いているのに気付く。
灰色の生き物はゆっくりとルリコがいる部屋に侵入した。薄っぺらい体の下に、同色の無数の足が見える。
「……」
ルリコまで後三メートル程だが、ルリコは動かない。
「……」
後、二メートル。
「…っぎゃあーーーーー！」
ルリコは喉が潰れる程の大声で叫んだ。灰色の生き物も何かを感じたのか、敷物の直前で固まっている。
「どうしました！？」
慌ただしくドアを開け、アタミが入って来た。寝ていたのか髪は乱れ、上着は青いシャツを羽織っただけ。下はベルトはせず、足元

は裸足だった。
叫んだルリコはベッドの上に爪先立ちで乗り、壁にぴったりと張りついていた。
瞬きもせず、ゆっくりと灰色の生き物を差す。アタミは生き物に気付き、テーブルの近くにあった椅子を手に取った。
ヤツを潰す気だ。
「潰さないで下さーーーーい！」
汁がでるからァーーー！
ルリコは擦れた声で叫んだ。二言目は言葉にならなかったが、アタミは理解したらしい。椅子を置いてから少し迷った後、ズボンのサイドから柄の長いナイフを取り出した。ナイフを投げて刺さった事を確認し、部屋の隅にあった塵取りに載せて部屋を出ていった。

時間経過がわからないまま、ルリコは爪先立ちでベッドの上にいた。普段から鍛えていたので足先が震えたりはしない。
アタミが濡れた塵取りを持ち戻って来た。上着のシャツのボタンは閉まっていたが、ルリコはその事には気付けなかった。ベッドの上で未だ固まっているルリコを見て苦笑した。
「オオイワフナムシ。海中を泳げるから、たまに甲板に上がってくるんだ。毒は持ってないから安心して」
名前なんて聞きたくねぇよ。
ルリコはそう思いつつも体は動かせなかった。全く動かないルリコにアタミは近寄り、壁に付いた両腕を取った。
「…大丈夫？」
アタミは囁くと、ルリコの両腕をゆっくりと下ろしてゆく。下ろされるに連れ、力が抜けてゆき、ずるずるとベッドの上に座り込んだ。アタミの水色の目を見て、落ちついてきたルリコは目を閉じ深呼吸をした。まばたきも忘れていたらしく、薄く涙が滲んだ。
「お休み中、申し訳ありませんでした……」
「いや、起きようと思ってた所だから気にしないで」

アタミが笑うと、軽快な足音が聞こえ、勢い良くドアが開かれた。
「飲みも――」
右手に水差しと籠を抱えたエウラが二人を見て固まった。
ベッドの上に座り込んだルリコの両腕を、立て膝のアタミが掴んでいる。距離は結構、近い。誤解されるには充分な程。
「アタイお邪魔？」
エウラが少し悩んだ後、率直に二人に聞いた。アタミは慌てて立ち上がった。
「な、何を言う！何もない！言い触らすなよ！」
「んー、つまんない」
むきになって言い返すアタミに、ルリコは冷静に（クールかつ簡潔に言わないと逆効果ですぜ）と思っていたが、エウラの足元を見てアタミのシャツを握った。
「る、ルリコ！？」
アタミは更に慌てるが、エウラはニヤニヤしながらテーブルに水差しと籠を置いた。
エウラが近付いて来たので、ルリコは恐る恐る足元を確認する。焦げ茶色のストラップのサンダル、床に面している部分が暗くなっている。灰色の糸に似たものも何本か靴底に付けていた。
ルリコは、素早くアタミの腰に抱き付いた。震えて力が入らないので、サバ折りにはしていない、筈。
抱き付かれたアタミは顔を赤くして盛大に慌て、エウラは「おおっ！」と嬉しそうに声を上げた。
深呼吸を繰り返したルリコは、唇を噛んでから声を絞り出す。
「エウラ……足、付いてる……」
ルリコの声にエウラはサンダルを見て、
「ああ、通路にフナムシいたから全部踏み潰してきた。たまに跳ねてくっつくから腹立つんだよね。甲板なんかうじゃうじゃいるかも」
とあっさり言った。
うじゃうじゃ、という言葉にルリコは意識を飛ばしそうになった

が、アタミにキツく抱き付く事により何とか意識を止めるのに成功した。普段通りだったら、完璧にサバ折りにしていた。
「……エウラ、靴を綺麗に洗って来い。廊下も片付けろよ。後、ルリコの前でフナムシの話はするな」
ルリコにしがみ付かれたままアタミが言うと、エウラはびっくりした様に言った。
「えっ、ゴメン！苦手だったんだ！ほんとにゴメン！すぐ洗ってくるから」
エウラは慌てつつも、ゆっくりと出ていった。靴底に付いた足を落とさないように気を使ったのだろう。エウラが出ていったのと同時に、ルリコはアタミの腰から腕を離し、素早く土下座をした。
「重ね重ね、申し訳ありません……」
アタミは堅固な土下座の構えをしたルリコの肩を持ち、顔を上げさせた。申し訳なさ過ぎて目も合わせられない。
「気にしなくていい。私も得意な方じゃないから」
アタミは微笑んだ後、部屋を出ていこうとした。未だにフナムシショックを引きずっていたルリコは慌てて声をかける。
「あの、アタミさん！わたしがいた場所に茶色の革鞄と、白い円筒型の鞄ありませんでしたか！？」
鞄の中には携帯、教科書、ノートは当然の事、予備の下着や使用済みの水着が入っている。どっかのオッサンに拾われて着られたりしたら嫌すぎる、とルリコは顔を青ざめさせた。
「あったよ。ルリコのだったんだ。乾燥室にあるから後で届けさせるよ」
どこからか「副船長ー」と声が聞こえたので、アタミは足早に部屋を出る。エウラが歩いた、少し変色した部分を器用に避けながら。
やはり、裸足は色々ときつい。
「またね、ルリコ」
ドアを閉める前にアタミはそう言うと、足早に通路を歩いていった様だ。

ルリコは取り敢えず、ベッドから降り部屋の隅にあった箒を取って、床を掃き始めた。
エウラの足跡を踏まない様にしながら、鞄を持ってきてもらったら何とかして隙間を塞いでやろう、と固く誓った。

三話・見られました（前書き）

お約束です。

三話・見られました

部屋がオレンジ色に染まり始めると、ルリコは腕立て伏せをやめた。昼食後に「甲板に行ってみない？」とエウラに言われたが、フナムシがうじゃうじゃいた甲板には行きたくなかった。そしてまたサンダルを貸して貰うのを忘れた。

する事もなく、椅子に座りぼーっとしていると、重めの足音がしてドアが開かれた。

「ルリコちゃんの服と荷物、持ってきたからね！」

ベレニケが両手に荷物を持ち、テーブルに鞄や制服、ブーツに見せ掛けた安全靴を置いた。

「触った事がない素材だけど、石鹸で洗って大丈夫だった？」

「はい、大丈夫です。ありがとうございました」

ルリコは丁寧にベレニケに礼を言った。

「礼儀正しい子だねぇ！エウラとは大違いだよ」

（年上の人、特に両親と同年代か上の人には礼儀正しく、と頭に仕込まれたしな）

ルリコは計算を見せずに、ベレニケに微笑んだ。俗に言う、日本人大得意の曖昧笑いだ。

「あの、わたしも食事のお手伝いをしたいのですが」

「ルリコちゃんはいいんだよ！怪我を治すのが先。治したら手伝ってもらうよ。後でエウラに薬の替え持たせるからね」

ベレニケはからからと笑い、部屋を出ていった。あっさり断られたルリコは、制服に下着が挟まれているのに気付き、ノーブラに落ち着く前にブラを付けようと、黄色のチュニックを脱いだ。

脱いだ服を椅子に置くと、肩や脇腹に包帯が見える。打ち身なんてほっとけば治るのに、とルリコが思っていると足音が聞こえる。ベレニケやドルシア、エウラやアタミとも違うので「あたしに用事じゃないな」と思い下着を取ると、いきなりドアが開いた。

「失礼――――――した」
茶髪のツリ目の男はルリコを見て、即座にドアを閉めた。
部屋を間違ったのか、とルリコは思い、一応後ろを向いて着替えた。あまり気にしていないのは、一瞬だから見えなかったと思ってからだ。
（何でここの人達はノックしねぇのかな……風習の違いか？プライバシーっつう言葉が無いのかもな）
花も恥らう（言いすぎ）女子高校生の癖にその程度しかルリコは思わなかった。

締め付けの感触をやや窮屈に思いながら、ルリコは学校指定の革鞄を開けて中身を出してゆく。革といっても合皮なので、異臭はしない。
世界史・化学・古文の教科書、地図帳、某下着カタログ、メモ帳、ノート三冊、ペンケース、カッターに替え刃、体操着上下、電子辞書、手鏡、タオルハンカチ、目薬、小さいペットボトル、カロリーメイト、ソイジョイ二本、ジップロックの箱に肩掛け用のストラップ。
ノートなど紙製品は見事に波打っていた。開くのは無理そうだ。ルリコは鞄を逆さまにして降ると、ピアスが幾つも入ったピルケースに、ライターが床に落ちた。板チョコもあったので、開けてみると白くなっていたので齧る。
「結構あるな……ま、使えねぇけど。地図帳見たかったんだけどな」
ルリコは敷物に座り、白い円筒型のボストンバッグの中身を広げてゆく。
チャック付きビニール袋に入ったキャップと水着、ゴーグル、スポーツタオル、財布、メイク道具、香水、シャンプー等お風呂セット、ポーチに入った基礎化粧用品、ジップロックに入った携帯と充電器、予備の水着、下着予備が二セット、ヘアワックス、ピンや髪

飾り数種。
「うー、売れるものはヘアアクセとピアスくらいか。香水気に入ってるヤツだし。高かったし。携帯のストラップも売れる、な。予備の水着と下着……後で水着も洗って乾かさなきゃ」
ルリコはぶつぶつ呟きながら、銀のイルカが付いたヘアゴムで髪を纏めた。しわしわになったジップロックの箱から一枚取り、ペンケースから油性ペンを取り出す。ジップロックに“売れそうなもの”と書き、敷物に置いた。
「とにかく、売れそうなもの分けるかな」
ルリコはそう言い、分別作業に取り掛かった。

「辞書……やっぱダメだ。分解して捨てちゃうか。荷物はどんどん減らさないと」
電子辞書を革鞄に放り投げ、ルリコはジップロックに入った携帯を取った。
「携帯亡くすと紛失届出してから契約し直しなんだっけ。面倒だから持っとくか、カメラ使えればいいし」
携帯を出しディスプレイを見ると、待ち受けのラッセンの絵が見える。アンテナはバリ三だが、通じるとは思えない。
「時計は…あー、ズレてるな。カメラは使えそう」
ルリコは電源を落とすと、元通りにしまった。“売れるもの”と書いた袋は二つになっている。
「港に着くの明後日だっけな。明日の夕方にでも、売れるかこっそりドルシアに聞くか」
ルリコは荷物を鞄にしまい込み、棚に置いた。制服とブーツも棚に置いてゆく。
置き終わると、軽快な足音が聞こえてきた。ルリコはエウラだと確信しながら、カーテンを引き棚を隠した。髪を纏めていたヘアゴムも外す。
「ルリコー、薬塗るよ！」エウラが取っ手付きの箱と包帯を持って

部屋に入って来た。
「お湯持ってくるからまっててねー」
エウラはテーブルの上に箱と包帯を置き、すぐさま部屋を出ていった。ルリコは部屋の隅からスリッパ立ての様な木製品を持ち、ドア挟んだ。ドアストッパーにしては効率が悪い、と思ったが。すると、エウラが来た反対側から足音がしてきた。覗いて見ると、先程ルリコの部屋に来た茶髪ツリ目の男だった。 茶髪ツリ目は、ルリコの視線に気付くと一瞬足を止めたが、そのままルリコの前に来た。
「……君が、ルリコか。先程は失礼した」
茶髪ツリ目がルリコの前でそう言うと、エウラの軽快な足音が聞こえてきた。
「お待たせーって、イオシフ！」
両手にタライや夜間を持ったエウラが、茶髪ツリ目――イオシフを見て口を尖らせた。
「副船長の部屋は隣。ルリコになんの用？用があるなら母ちゃん達の許可を取ってからにして！」
エウラは早口で言うと、イオシフを睨み付けた。
（良く思われてねぇのか……そういやあ、さっき見られたっけ）
ルリコは裸を見られた事を思い出し、仕返ししてやろうと邪悪に微笑んだ。
「…失礼したって、着替えを見た事ですか？」
ルリコがそう言うと、エウラが眉を吊り上げ、イオシフも「なっ！」と驚いた。
「着替え！見た！？女の子の部屋に声も掛けずに入るの！？」
「ぐ、偶然――」
「アンタ最ッ低！ルリコに謝れ！今すぐ！この女の敵！フナムシ野郎！」
エウラはイオシフの言葉を聞かず、噛み付く様に捲くしたてる。
ルリコは人を罵倒する時“フナムシ野郎”といつか使ってやろうと思った。

「通路で騒いで、何事だ？」
イオシフの後ろからアタミが歩いて来た。紙を何枚か抱えている。
「副船長！イオシフが――」
エウラが言おうとした時、ルリコはエウラの肩に手を置き微笑んだ。
「何でもありません。エウラ、お願い」
「…う、うん」
エウラはイオシフを睨み付け、ルリコと共に部屋に入って行った。エウラの態度が気になったアタミは、通路に棒立ちしているイオシフに尋ねた。
「エウラか、ルリコに何かしたのか？」
イオシフはアタミに振りかえると、一度目を伏せてから言った。
「…なにも」
「それなら良いが。各店に送る商品のリストだ。一度確認しよう」
そう言い、部屋に入ったアタミにイオシフは続いた。

「ルリコ、何で副船長に言わなかったのさ！」
エウラはタライにお湯を入れながら、不満そうにルリコに尋ねた。
「男の人だから」
ルリコは箱から緑色の軟膏が入った瓶と、銀のスプーンを取り出した。
「大多数の男の人は、裸を見られてもあまり恥ずかしがったりしませんよね？だから男の人に言ってもダメです」
軟膏をテーブルに置き、蓋を開けるとハーブに似た香がした。意外としみる。ルリコはしみる感触を思い出し軽く身震いした。
「できれば女の人に言う方が良いと思いました。特に、ベレニケさんの様な」
「そっか！母ちゃん怒るとかなり恐いよ。船乗りや副船長も、誰も適わないかも！やるねルリコ！」
「ありがとうございます」

エウラは両手を重ねて目を輝かせ、ルリコは金髪を撫で付けながらにっこりと笑った。

「――――ッ」

イオシフがリストを見ていると、唐突に寒気が襲って来た。

「どうした？」

アタミが紙に文字を書きながら言う。

「いえ、昨日夜風に当たりすぎたかもしれません」

「自己管理が足らないな。珍しい」

「――申し訳ありません」

アタミは手を止め、イオシフに向き直った。

「気になった所はあったか？」

イオシフは目を細めながら紙を捲ったり、テーブルに置いたりした。

すると、静かになった為か隣から声が聞こえる。

「ルリコってほんと、肌白いー！」

「そうですか？」

「そーだよ！だから跡が目立つのかも。まだ青いし」

「あまり日に焼けないのです」

「うらやましー！アタイなんかすぐ日焼けしちゃうのに～……えい」

「え！ちょ、ちょっと！くすぐっ……たい、ですから！う、し、しみる……！」

「ん、すべすべ～。あ！ね、コレどうやって脱がすの？」

「ま、前は結構です…」

「ついでだよ。ん？こうかな！こうかッ！……おおっ！なかなか…」

「ど！何処触ってるんですか！」

「……」
「……」
男二人は、暫し沈黙した。
「ば、場所を替えるか…？
顔を赤らめたアタミと違い、
「わかりました」
イオシフはさらりと同意した。

四話・某俳優の様に大物が釣りたい

拾われて今日で三日目。

青空が切れ切れに見える甲板の上で、ルリコは釣りをしていた。あの魔海の尖兵――オオイワフナムシは、良く晴れた波の高い日に泳ぐらしい。今日なら大丈夫と、朝食時にエウラに保証され、甲板に出た。

掃除や波をみている海の男達に挨拶をしていると、端っこで釣りをしている白髪混じりの海の男を見つけた。「釣れますか？」とルリコが声をかけると、「全然だから嬢ちゃんも手伝ってくれ」と誘われ、今に至る。

ゆるい潮風がルリコのプリン色の髪を揺らす。澄んだ青い海には所々白波が立ち、遠くに黒い島影や船影が揺らめく。時々鱗を輝かせながら、飛び魚の群れが跳ねた。

ルリコは軽く握った釣竿に振動を感じ、強く握り直す。水面に浮いた羊の腸で作った浮きが沈むと、何度か震えを数えたのち、勢い良く甲板に引き揚げた。

釣竿には三匹の魚が針にかかっていた。

「ほう、うまいもんだ」

隣にいた白髪混じりの中年がニヤリと笑う。ルリコは針から魚を外しながら中年をちらりと見ると、呟いた。

「ニコスさん、引いてます」

「お？うぉっ！」

白髪混じりの中年――ニコスは慌てて竿を上げるが、三つの針には餌すら付いていなかった。

「あちゃー…嬢ちゃんみてぇには行かねえな…」

ニコスは息を吐きながら座り込み、釣竿を置いた。ルリコは反応せず、海水の入った大型のタライに魚を投げ入れる。二十匹程の様々な魚が泳いでいた。入れ食いフィーバー状態に近いが、何故か全

く中年は釣れていない。
しゃがんだルリコは上部に丸い穴が開いた黒い木箱を開けた。中にはミルワームに似た蛾の幼虫がみっしりと入っている。躊躇せず素手で三匹取り、針に手際よく付けていった。
「嬢ちゃんすげえな…」
「フナムシに比べればまだマシですから」
ルリコは立ち上がり、手首のスナップを効かせ釣竿をしならせた。ヒュッと音がし、海面に浮きが着水する。先程よりも強い風を受け、ルリコの緑色のシャツワンピがはためく。
「風が変わったな…」
ニコスは「よっこらさ」と言いながら上げた腰を叩いた。
「じゃあなルリコ嬢ちゃん、一雨来る前に引き上げろよ」
「お気遣いありがとうございます」
釣竿を肩に乗せ、ニコスは悠然と歩いていく。遠くで帆の向き替えるかー？と声が聞こえた。
太いマストは二本あり、より近い後方のマストをルリコは見上げた。がま口財布に紙束とコインが詰まった柄が群島商人組合のロゴらしい。
……悪趣味で分かりやすい。
再び竿が引かれる感覚に、ルリコは釣竿に集中した。何度が振動を感じてから一気に引き揚げると、二匹の魚と一匹の小魚が釣れていた。小魚を外し、海へと投げると、どこからかウミネコが飛んできて小魚をくわえていった。
伯母直伝の釣り方は異世界でも役に立っている。無事に戻れたら鳩サブレでも送りつけようとルリコは誓った。
二匹の魚をタライへと放ると、「もう充分かな」と片付けを始める。
幼虫みっしりの箱を閉め、籐らしき籠に入れた後、底の革紐でしっかりと固定する。釣竿に三回ほど釣糸を巻き付け、幅広の布で針

部分を重点的に縛る。ニコスがこれでイイ、と言ったので間違ってると思いつつもルリコは言われた通りに片付けてゆく。
つるつるした黒い釣糸は、クロウミズグモと言う蜘蛛の糸らしい。群島周辺に住む、海面や水面に巣を作る変わった黒い蜘蛛だ。
大きな得物相手には、同種のクロオオウミズグモと言う蜘蛛の糸で勝負すると聞いた。滑車と皮のベルトが付いた大物勝負用の釣具もあったが、一人じゃ厳しいとニコスに言われたので諦めた。ニコスは手伝ってくれない。
片付け終えたルリコは甲板を囲う柵の前、隙間が空いた部分を前にし体育座りをした。腕は膝を抱くように組む。灰色をした厚手の半端丈ズボンの、側に付いた黄緑のビーズが澄んだ音をたてた。サンダルはキャラメル色のストラップサンダルを今日になってエウラから借りている。ちょっと小さいが文句は言わない。
眼下に広がる海面を見ながらルリコはぽつりと呟いた。
「どうしたら、帰れるのかね……」
――異世界に来てまだ三日目。
手掛かりが無いのは当然かと思うが、異世界なんだから便利な魔法くらいあるんじゃね？とルリコは思っていた。
しかし、未だ魔法の“ま”の字もない。それ以前に字が読めない。何故この世界に来たのかも、わからない。
（このまま…ノルスヴェータに行くとして、行った後どうすっか。エウラは『ウチに来な』って言ってくれるけど、世話になりっぱなしじゃ気が引けるしな…どっか住み込みで雇ってもらうしかねぇ）
地球で、日本で、自分が健康で学校行けて好きな事が出来る場所じゃないんだと実感し、ルリコは組んだ腕に顔を埋めた。
（やっぱり伯母さんを継ぐ漁師や、栄造さんを継ぐ骨董商よりも、ヤンキー辞めて地道に公務員目指すのがイイかもしれねぇ。……あー、今更こんな事考えるなんて異世界効果？アナザーワールドズメランコリー？ディファレントの方が良いか？）
うだうだ悩んでいると、上から声が聞こえた。

「お、おまえ見た、ことない。だれだ？」
低めの男の声だが、何故か舌足らずだ。ルリコが上を見上げると、甲板から階段で上がる二階の様な部分に太った男がいた。ルリコは身軽に立ち上った。
「わたしはルリコです。漂流していた所を助けて頂きました」
ルリコが言うと、太った男はのたのたと階段を降りてきた。手には鉢を持ち、黒い葉を持つ植物が植えられている。
「おまえ、アタミが言ってた、ながれてたやつか。お、おりぇは、せんちょうのぺりゅっつ、だ」
「（結果的に）あなたのお陰で助かりました。有難うございます」
ルリコは近くに来た船長に会釈をした。
「おれい、しなくていいんだ、な。人魚は見れなかった、けど、ひとだしゅけになって、ほめられた。うれ、しい」
船長はしゃがみ、嬉しそうに甲板に植物を置いた。
「うみ、のみずでそだつ、しーむろぉーじは、うみかぜが好きなん、だ。青いはなが、たくさん、さくんだな」
「花は綺麗ですか？」
「う、ん、きりぇい。海みたいに、あおいはな」
船長が、ニコニコしながら鉢植えを見ている。すると、甲板から船室へ行く通路からドルシアが走ってきた。
「ここにいたんですか！風が冷たいので船長室へ戻って下さい！」
ドルシアが嗜める様に言うと、船長は身を竦ませた。
「し、しーむろぉーじに、かぜを当てて、た。せんしつは風、が、ないんだ」
「……では、後で私が戻します。風が強くなると揺れますし、危険です。船長は戻って下さい」
ドルシアが言うと、船長は渋々階段を上がっていった。
扉が閉まる音がすると、ドルシアはルリコに向き直った。
「びっくりさせたかしら。彼が、船長のペルッツ・ヴィルヤネンよ。私たちの働く商家の長男。変わってるけど、悪い人じゃないわ」

「無垢な方、ですね」
ルリコがそう言うと、
「……そうね。色々、あったから」
ドルシアはタライに目を向け、魚を見て驚いた。
「すごいわ、大漁！ルリコは釣りが得意なのね。私はあの虫がダメで出来ないわ」
「この魚と釣り道具、どうすれば良いですか？ニコスさんは、何も言って無かったのですが」
ドルシアは、ニコスの名が出ると微かに眉を寄せた。
「あの男、ここで遊んでたのね……釣り道具は良いわ。ニコスに片付けさせる。魚は厨房からザル持ってくるからこのまま。ルリコも部屋に戻った方が良いわ。じきに雨になる」
「いえ……風に当たりたい気分なので。道は分かるのですぐ戻れます」
「わかったけど、注意してね。冷えて風邪でも引いたら大変よ？」
ドルシアは鉢を持ち、二階部分へ向かった。多分船長室なんだろう。実質的な船長はアタミに違いないが。
ルリコは甲板の柵にもたれ、遠くを眺めた。向かっている先は薄曇り程度だが、進んで来た方は水気にけぶっている。海面に、イルカが何匹か跳ねた。
「あ、ケイタイ持ってくれれば良かった……でも晴れてる時でいいか」
先程よりも冷たくなった風に、ルリコは両腕を擦った。
「っくしゅッ！……うー、冷えた。マジで風邪ひきそう。……戻ろ」
甲板には、いつの間にかルリコ以外誰もいなくなっている。
ペタペタと足音をたてながら、ルリコは船室への通路に向かった。

五話・連絡と交渉（前書き）

この回は長めです。

五話・連絡と交渉

日が暮れて船が碇を下ろし、星が輝きを増す頃、ルリコは甲板に出た。甲板には至る所に松明が灯され、意外と明るい。前方にうっすらと島が見える。

ルリコは見回りの船員に挨拶をした後、周りをきょろきょろと見回した。

「誰も――いねぇな」

ルリコは確認すると、携帯を取出し電源を入れた。起動画面から、ラッセンのイルカの絵に切り替わる。アンテナは相変わらず三本。電池も減っていない。

画面は、五月十八日午前十時三十三分を指していた。

「……もう三日は経ってるけど。壊れた？」

ルリコが不安に思いながら画面を見ていると、着信履歴が大量にあった。メールも五つ届いている。日付は殆どが……十八日になってからだった。

「うわ！マジで、届くモンなのか？すげぇなド●モ！」

ルリコは目立たない様に、甲板の後方、二階建がある後ろへ隠れた。松明は小さいものしかないが、大して困らない。少し前には太いマストがあるので、音も周りには気付かれない、と思いたい。

着信履歴を確認すると、大半が妹、次に多いのは両親、学校の友人、ヤンキー仲間だった。時間はまんべんなくバラバラ。

「やべぇ……手がかりなしの失踪になっちまうよ。学校退学になりたくねぇ……」

ルリコは頭を抱えた。成績も学年二十番内に入っているし、生活態度も悪くない（つもりだ）。格好は昔のヤンキーだが、服装検査の度に

『制服の着こなしは、学校生活の中における自己表現の一つだと思っています。個性を無視するんですか？』

等、適当な事を言ってうやむやにしていたが、長期に渡って学校を休むと退学になりかねない。
（失踪届とか出すと大丈夫なのか？……上半身だけはギャルだし。あー、でもポリとマスコミのお世話にはなりたくねー。有る事無い事言われたくねぇー）
ルリコは頭を掻き毟りながらメールを見た。『遅いけどどうかした？』『お姉、お父さんもお母さんも心配してるよ！早く帰って来て！』『今日、風邪？休み？中間なのに！？』と心配する内容が殆どだ。
（ホームシックだ……帰って風呂入ってトリートメントして、誰か蹴り飛ばしたい）
ルリコは滲んできた涙を乱暴に拭った。拭っている途中である事に気づく。
（もしかしたら――携帯通じるんじゃね？メールも着信も来てるし。……よし、1度試してっか）
ルリコは動悸を抑える様に深呼吸し、電話帳から妹の――深海アイの番号を表示した。　十五分前にも着信が入っていたので、中学をサボったのだろう。
（アイは自称、ライトヲタクだからな……異世界位じゃ驚かんかも）
ルリコは電話帳をかけると、うろうろと歩きながら周りを見渡した。
（アイ、早く出ろ！）
念じながら鳥の鳴き声の呼び出し音を聞いていると、『はい』と平淡な声がした。
「アイ！あたし、あたし！ルリ」
ルリコは詐欺っぽいかなと思いながら、アイの反応を待った。
『お姉……？え！本当にお姉なの？誰かに捕まった？大丈夫？怪我してないよね！？頭に連絡とってあげようか！』
電話の向こうでわめきたてるアイに対し、ルリコは「しぃー」と囁いた。マナーモードなので聞こえている筈だ。

「悪い、アイ。こっち電気が今の所ないから手短に言う」
ルリコはもう一度深呼吸をした。
「あたし、どうやら異世界来ちゃったみたい。どうしたらイイ？」
またアイの反応を待つと、アイは震えた声で呟いた。
『……お姉、マジ？』
「マジ。オ・ル・マリヴェスタ群島諸国連合なんて聞いた事あるか？」
『……ない……。ネットで調べる？』
アイは疑って無いようだが、電池が惜しいのでルリコは続ける。
「要らん。で、あんた、良く小説読んでんじゃん。可愛い絵の。どうしたらあたし帰れると思う？」
『……えっと、勇者としてお姉が召還されたとか！魔王とかいる？』
「話題に出てないな。いないんじゃね？」
『召還術師や魔法使いは？』
「“ま”の字もでてねぇな」
『え、えっとー、何か能力目覚めた？体で変わったとこ有る？住んでる人は人間？月と太陽は一つずつ？』
「能力か――魚が良く釣れたな。怪我の治りが遅いな。見た目は皆さん、人間だな。月も太陽も一つ。後、こっちは四日も経ってる」
『四日！？まだお姉がいなくなって半日位しか経ってないよ！？市民センターの人に電話して、昨日の九時四十分には出たって確認してるし！』
騒ぎたてるアイを落ち着かせるように、ルリコはふう、と息を吐いた。
「アイよ、落ちつけ。姉がいるのは、異世界だ」
電話向こうのアイがぴたりと黙った。
『そっか。異世界だもんね、何があってもおかしくないよね』
ルリコはアイの理解力に舌を巻いた。反対の立場だったら『取り敢えず寝直せ』と言っていたに違いない。アイには元の世界に戻れたら土下座しながら感謝の言葉を言おうと誓った。続けて、アイに

頼み事を相談する。
「だからアイに頼みがあるんだけど、学校退学しない様に何とかして？あたしも帰る方法探すけど、どれだけかかるかわからねぇ。帰ったらダッツ十二個とＤＶＤ奢る」『
……お姉の頼みならタダでいいけど。貰えるなら貰うけどね。じゃ明日、何とかしてみる』
「アイ、ありがと」
『いーえー、二人きりの姉妹ですもの！じゃあさ、お姉。メールで色々送ってくんない？メールだったら怪しまれないし。写メだともっとイイな！そっちの風景見てみたい！』
「分かった。電池無くなんないように頑張る。アイもあたしみたいにサボらず学校も行けよ」
『もう、お姉までお母さんと同じ事言う！電源――じゃなくて、まずは魔法使い見つけてね！異世界だからきっといるよ！』
「ああ」
ルリコは笑みを浮かべた。魔法使いはいない、と思ったが、アイが言うならいる気がする。
「じゃ切るぞ」
『あ！まって！これだけは言う！』
「どした？」
ルリコは首を傾げてアイの言葉を待った。電話向こうのアイは不安げに呟く。
『妊娠とかしないでね。わたし十五歳で“おばさん”になりたくない』
「……そっちの心配は要らねぇよ。また連絡する。じゃな」
ルリコは冷たく電話を切った。アイなりに励まそうとしたのかも知れないが、ちょっと冷たかったかも知れない。昼間と違い、少し元気が出てきたルリコは、軽くストレッチをした。
「さて、アイにメール打とう」
携帯を服に仕舞い込み、ルリコは船室に向かおうと歩いた。する

と、船の舳先から、ツリ目の男がぼんやり歩いてきた。
「……ルリコさん」
ツリ目の男――イオシフは、ルリコに向かい深々と頭を下げた。いつの間にか“さん”付けになっている。絞られたらしい。
「先日は、誠に、申し訳ありません」
喉の奥から絞り出すような声に、ルリコは相当責められたのか、とちょっと可哀想に思った。
「あまり気にしてないので、もういいです。それじゃ」
ルリコはあっさりと言い、船室に戻ろうとしたが、イオシフに腕を掴まれた。
「……いえ、ルリコさん。あなたにお話があります」
腕を掴まれたまま、片眉を上げたルリコがイオシフを見ると、丁度舳先からオッサン船員二人が歩いて来た。ルリコ達に気付き、隠れる気がないのか、マストとロープの後ろに身を寄せた。
顔だけはしっかりこちらを向いている。
「皆に見られて平気な話ですか？」
ルリコはイオシフの後方に隠れているつもりの二人を指差した。イオシフは後方を見て、舌打ちをし、ルリコを見る。
「いえ……では、私の部屋に行きましょうか」
イオシフはルリコの腕を離し、ずんずんと船室に向かい歩きだした。ルリコは歩きながら、冷静に声をかける。
「イオシフさん、わたし少々冷えてしまったので、何が羽織って来ても宜しいでしょうか？」
船室通路への扉を開けると、イオシフは視線のみを背後に向けた。
「……どうぞ」
「ありがとうございます」
二人は通路を歩き、ルリコの部屋の前で止まった。会釈しながら中に入り、薄手のクリーム色のショールを取った。携帯の電源を切り、ベッドの下へ隠し、カーテンを引いた棚から小物の入ったジップロックを取り出した。シャツワンピの中に突っ込む。

「お待たせしました」
ルリコはショールを羽織りながらイオシフに微笑んだ。
「では、こちらに――」
イオシフはすぐに正面を向き、あまり足音を立てずに歩きだす。
アタミの部屋の前を横切り、洗面所の近くで左へ曲がった。
（船のトイレは、大変なんだよな……）
ルリコがぼんやり考えながら歩いてゆくと、イオシフが突然止まった。ルリコも続いて止まる。
「こちらです」
イオシフは黒い扉を開け、ルリコを招き入れた。
書類や布袋、木箱などが至る所に積み重なっている広い部屋だ。家具は殆ど無い。中央に大きな黒いテーブルと椅子がある。イオシフが手早くランプを三つ点灯すると、大分明るくなった。明るくなったことでデカいベッドが嫌でも目に入る。
（……いや、そーゆーんじゃ無い事はわかってるし）
ルリコは無表情のまま座らされ、対面にイオシフが座る。イオシフは指を組み、ルリコを静かに見た。
「さて、ルリコさん――」
「理解しているので余計な口上は不要です」
ルリコはイオシフの言葉を遮るように言い放つ。
「イオシフさん、次の島で降ろして頂けませんか？皆様に悪いと思いますが出来れば内密に」
イオシフはルリコを見て、つり上がった目を細めた。
「……何故、あなたに降りて貰うと分かったのですか？」
「普通に考えれば分かる事です。大事な取引を終えた後に、海で拾った不審者を長期間置いてはおけないでしょう？――この船の方々は、かなりのお人好しですが」
ルリコが一気に言うと、イオシフは目を閉じため息を吐いた。
「ノルヴェスタ国の人々の祖先は、様々な大陸からの移民なのです。

困っている人がいれば皆で助ける、と言う事はノルヴェスタでは常識です」
（ノルヴェスタは良い国だな……ま、暫く行かないようにするか）
ルリコは異世界の常識にちょっぴり感動した。気を取り直し、イオシフに話し掛ける。
「降ろして貰うに当たり、困る事がありまして。わたしはこの国の通貨を持っていません。荷物から換金出来そうな物を分けて来たので、買い取って下さい」
イオシフはツリ目を少し見開いた。
「良いでしょう。品目は？」
「大体、装飾品ですね」
イオシフは立ち上がり、棚から大きなランプを出して来た。火を灯し、テーブルの真上の金具にランプを引っ掛けると、かなり明るくなった。オレンジではなく白に近い光にルリコは驚く。
「では、見せて下さい」
イオシフが椅子に座り直すと、ルリコはジップロックを開けた。

サファイア、レッドスピネル、エメラルド、アイオライト、アパタイト、ペリドット、ロードクロサイト、レインボームーンストーンの大粒ピアス。金具もプラチナ、シルバー、ゴールド、ピンクゴールド、ホワイトゴールドと素材もデザインも様々。
但し、どれも片方のみ。
種類を分けながら説明していると、イオシフが呆れた様に声を洩らした。
「……こんなに隠し持っていたんですか」
「隠し持っていた、とは人聞きの悪い。すべて貰い物です」
ルリコは不機嫌そうに眉根を寄せた。
これはタキさん――ルリコがバイトしている骨董屋の奥様のお土産である。向こうの蚤の市で片方ずつのピアスを見付けては『ちょっと時代遅れ』『石留めが甘い』『この値段じゃ誰も買わないから

安くしろ』等、文句を付け二束三文で買い叩いて来る。海外でも“おばさま”は畏怖すべき物らしい。そのピアスを、帰国する度にルリコに『お土産！』とアンティークのピアススタンドごと押しつけて来る。

しかし溜まる一方なので、好きなデザインでは無い物を、骨董屋の一角で“中古・千円均一”で売っている。ちゃんと消毒はしているので良く売れる。

宝石なんかは高校生には分相応ではないが、栄造さんに『こっちの世界に来るなら本物を毎日見てろ』と言われたでつけている。進むと決めた訳ではないが。

「珊瑚や真珠、琥珀などはこの国では比較的安価ですが、こういった貴石は大陸に行かないと手に入りませんからね！高価で売れます。カットもしっかりしていますし」

イオシフは手袋を着けてピアスを眺め、少し興奮した様子で答えた。

（やっぱコイツも商人だな）

ルリコは万華鏡のストラップをイオシフに突き出す。

「万華鏡、カレイドスコープです。見てください――そう、そちらの穴の中を覗くと……」

「おお！」

イオシフは大声を上げた。大の男が万華鏡を覗いて大喜びする姿は、見ていると少々白けた気分になる。ルリコは頬杖を付きジップロックを見た。

（万華鏡は江戸時代に輸入された。流石にこの時代には無かったか……原理は割と単純なんだがね）

「それ、万華鏡は、意外と原理は単純です。光の加減と鏡の効果で見えるんです。

上下透けた円筒型の容器に、三面に合わせた鏡を作って、下部分に透ける紙貼って、小さく切った色紙やビーズ入れて、紙やビーズがこぼれない様に透明な何かで蓋をして、覗き窓付ければ完成です。

ビーズや色紙入れすぎると綺麗に見えないので注意して下さい。外身が味気ないので、柄の入った紙を貼りつけるのも忘れないで下さいね」

万華鏡に夢中になっていたイオシフは、顔をあげてルリコを見た。右目まわりに窓の跡がくっきりと付き、ルリコは込み上げてくる笑いを必死で耐えた。

「意外とすぐ作れそうですね」

「わたしの国では十二歳位には作れる様になります」

（まあ、材料があれば。アイが取ってた科学雑誌の付録だったしな。代わりに作ってやったのも、今では懐かしい思い出……）

イオシフが難しい顔をして十センチ程の万華鏡を睨む。

（後、一押しみてぇだな）

ルリコは邪悪に微笑むと、ジップロックをまさぐりながら平坦な声で呟いた。

「誰も気付かない内に作れば、ボロ儲けだと思いますが、ね。それでは、返してください」

『返して下さい』の言葉に、イオシフは目をこれでもかァ！と見開いた。見開いた目の色が暗い赤色な事に気付き、ルリコは表情も変えず驚いた。

「買い取ってくれないなら返して下さい。私にとってコレを売るのは誰でも良いのですから」

感情を込めずに言い放つと、イオシフは諦めた様にため息を付いた。

「……ルリコさんが、一枚上手のようだ。ピアスとマンゲキョウ、買い取らせて貰う」

ルリコはジップロックを締めながら、イオシフの言葉に眉を吊り上げ口元を引きつらせた。

「万華鏡は“カレイドスコープ”と言って下さい。風情がありません」

ルリコは内心、汗をだらだらかいていた。

（全ッッ然気付かなかったけど、カタコトで言われると卑猥な気が！意外！ヤベェ！）
「――で、幾ら位で買い取って貰えるのですか？」
冷静さを取り戻したルリコが言うと、イオシフは机の鍵を開け、金属の棒を取り出すと無造作に机の端に刺した。すると机中央かカタン、と渇いた音がし、指で中央を押すと机の板が浮いた。
隙間が空いた部分に指を掛け、板を引き上げると、テーブル中央に細長い隙間があり、様々な色の紐で束ねられた紙束が幾つも置かれていた。　紙束に書かれた文字は分からなかったが、ルリコは金の匂いがすると察知した。
（仕掛け机……用事深いこった。キライじゃないけどな）
イオシフは赤い紙束と青い紙束を持ち、何枚か抜いた。
「こちらが、えー、カレイドスコープの分」
置かれたのは赤い紙五枚。
「で、こちらがピアスの分です」
続けて置かれたのは、青い紙十六枚。ピアス一つに付き二枚。
（紙幣なのか。異世界は金貨だと思ったんだけど。価値は赤＞青――んー、基礎価値がいまいち分からん。まあいい……さ、勝負はここからだぜ）
ルリコはふう、と息を吐くと目を伏せ、不満そうに言った。
「それだけ、ですか？」
イオシフの手が止まった。
「割と、価値のあるものだと思ったのですが……ね」
実際そうだろう。型が古くて石留め甘くて二束三文でも石は六ミリクラス、現代の加工技術が上の筈。
万華鏡も十七世紀のフェルマーの定理の基礎原理を使った幾何光学、物理の（略）
イオシフは無言で青紙束に四枚、追加した。
「それに、カレイドスコープを上手く、商品化すれば……」
イオシフは更に、赤紙幣を二枚置いた。

「ノルヴェスタの方なら心付け位出して頂くべき、だと思いますが。わたしはね」
イオシフは青紙幣を三枚置いた。若干顔色が悪い。
（こんだけ札束持ってんのによぉ……鬼ケチ野郎め）
ルリコは不機嫌な顔つきのまま、顔色が悪いイオシフをちらりと見た後、一瞬で紙幣を数えた。
赤紙幣、七枚。
青紙幣、二十三枚。
（もう許してやるか。精々、寛容なあたしに感謝しろ）
ルリコは不機嫌から一転、輝くばかりの営業スマイルでイオシフに言った。
「では、これで取引成立ですね」
いきなり笑顔で言いだしたルリコにイオシフは若干引いていた。
「な、納得して頂けた様で……」
イオシフは仕掛け机を元に戻しながら、ルリコを見ずに言った。
「それでもう一つ、お願いがあります」
ルリコは“お願い”の部分でイオシフの肩がびくり、と震えたのを見逃さなかった。
「イオシフさんのお陰でお金は手に入りましたが、価値と通貨種類を教えて頂けませんか？」
ルリコがにこやかに言うと、イオシフは再び顔を青ざめさせた。
「……知らなかったんですか？」
「一言も、言っていませんが」
イオシフは左手を目蓋に当て、深々と息を吐いた。
「……人魚の海域にいただけあって、本当に人魚ですね」
かなり小さい声だったが、ルリコにはしっかり聞こえていた。前後関係から悪口だと思い、イオシフを睨む。
「聞こえていますよ、しっかりと。お褒めの言葉、ありがとうございます。で、教えて頂けないのですか？」

イオシフは少しの間停止したが、腕を下ろし、けだるげにルリコを見た。
「わかりました。まず、この赤い紙幣は――」

「失礼しました」
ルリコは棒読みでイオシフに言った後、静かに部屋を出た。ジップロックを服の中にしまい込もうとごそごそしていると、通路からアタミが歩いて来た。慌ててショールを体にキツく巻き付ける。
「ん？ルリコ！――こんな時間に何故、イオシフの部屋に？」
「え、ええ、少々相談がありまして……そのへんに居たイオシフさんに相談を」
（いい人に嘘付くのはツライんだよなー悪いヤツには何とも思わねェけど）
「では、お休みなさい」
誤魔化す事にしたルリコはショールを押さえながら足早に去っていった。
アタミは不審に思いながら、イオシフの部屋を開ける。所々にランプが付いた部屋は大分明るい。イオシフは無駄に大きいベッドに突っ伏していた。人が入って来た気配に顔を向けると、素早く跳ね起きた。
「――副船長！何か！」
「いや、大したことじゃない。航路の最終確認だ、明日早朝でもいい」
「申し訳ないですが……明日にして頂けますか」
アタミは片眉を少し上げた。
「珍しいな」
「今日は少々、疲れたもので……」
イオシフは乱暴に髪を撫で付けた。少し苛立った様子に、アタミは足早に去っていったルリコの事を思い出した。

「この分なら明日の夜には着ける。陸でゆっくり休めるな」
「そうですね。明日は――ゆっくり出来そうです」
ランプをぼんやり見つめはじめたイオシフに、アタミは首を傾げた。
「本当に疲れてるんだな。じゃ、早朝に集合で」
「了解です」
イオシフが再びベッドに突っ伏すのを見て、アタミは静かに部屋を出た。

「ふう」
部屋に戻ったルリコは、暗い中手探りでオイルランプを取り、ライターで火を点けた。トレイに入った火打ち石はあるが、文明人であるルリコは暗い中では付けれるか自信が無い。
“売れそうなもの”ジップロックを棚に戻し、財布とジップロックの箱を取り出した。　財布の中にあった六千円を折り畳んで仕舞い、無造作に三枚を入れる。化粧ポーチにも三枚入れ、ブーツの底に二枚ずつ入れておいた。コレで財布スられても凌げる、と思う。
残りは箱から出したジップロックに入れて鞄へしまった。
「じゃ、アイにメールするか」
長文を考えつつ、ルリコ寝転がりながらメールを打つ。考えながら打っていたので大分時間がかかってしまった。時間も頭に入って来ない。メールを送信すると、眠気と戦いながら電源を切った。ランプを消そうとゆっくりベッドから起き上がると、月が見えた。
青白く大きい月が、ぼんやりと笠をかぶり滲んでいた。
「明日も雨振るのかな。当てにならねぇけど」
ルリコはそう呟き、ランプを吹き消した。

五話・連絡と交渉（後書き）

長くなりました。視神経がきっとお疲れです。

六話・海賊、襲撃

拾われて四日目。
ルリコは久しぶりの制服に着替えていた。
「さすがに暑いな」
今までは薄手のものを来ていたので、少々暑く感じる。
「甲板に行けば丁度良いか。薄曇り、風強し……よっしゃ、フナムシ来ねぇぜ」
ルリコは船室の窓を覗いて小さくガッツポーズをした。すると、軽快な足音が聞こえて来る。
「おはようルリコー！朝ごはんだよー！」
元気よく、朝食を運んできたエウラに、ルリコは微笑んだ。
「おはようございます、エウラさん」

昼過ぎ、ルリコは荷物をまとめた甲板に来て、海を見ていた。
学校指定の革鞄に、斜め掛けのストラップを通し、白いミニボストンも通している。化粧ポーチに入っていた、ごつい質流れ品の壊れた腕時計もストラップに通してある。靴もエウラに借りたサンダルではなく、靴下を履き安全靴に変えている。
「今日の夕方で、この船とお別れか……」
ルリコは息を吐き、二階建の建物の後ろで、進む船に沿って出来る波を一人で見ていた。
夕方にはオリ島から小舟が来るらしい、とイオシフから昨日聞いている。代表者として一人、イオシフが下船し手続きし、意外と早く着いたので夜には皆下船するなど。
ルリコは代表の航海士――イオシフと共に、こっそりと島に渡る。で、そのまま雑踏に消える。この船の人達がいつも利用する宿は港の東で、北の繁華街に向かい、反対の港まで歩いて行けば、夜に出

港する船に乗れると聞いている。
「何も言わずに『ドロン！』と消えちまうのは……罪悪感あるな。ま、でも、あのツリ目が悪役になってくれっか！」
ルリコは深く考えない様にしながら、船首に向かい歩き出す。途中にいた乗組員数人に挨拶し、船首に着くと寄りかかった。船尾より強い風が、ルリコの傷んだ金髪を乱す。
「うわー、バリバリ。纏めっか」
ルリコは革鞄から黒いバラの付いたヘアゴムを取出し、手櫛でポニーテールに纏めた。腕を組み、見えて来た島々をぼんやりと見つめる。

島々に近づき、岩壁や岩に生えた木の根が確認出来る頃、誰かが近付いて来た気がし、ルリコは振り返った。
「ルリコ、ここにいたのか」
白いジャケットを着たアタミが近づいて来た。
「さすがに、船室ばかりは飽きて来ましたので」
アタミはルリコの隣で立ち止まった。
「次の島で海上警備団――群島連合の海を高速海竜船で見回り、犯罪などを取り締まる組織だが、そこにルリコの事を相談しようと思う。未だに、大陸からの人身売買が後を絶たないと聞いているからな。辛い事だと思うが、是非とも協力してほしい」
ルリコは内心、嫌な汗が止まらなかった。
（ヤッベェ！そんな大事なのかよ！？『何も覚えていません』じゃ済みそうにねぇ！！）
昨日、人魚の海域に落ちていた件についてイオシフと話したが『全て忘れました』とルリコが誤魔化すと、イオシフも『そうですか』と軽く流した。
あまり重要じゃないと考えていたが、目算は甘かったらしい。人身売買とは大問題だ。

「オリ島の海上警備団には、大陸から人身売買されていた男性と女性が勤めていると、海ツバメで連絡があった。ルリコにもきっと親身になってくれる」
（マジやべぇ！あのツリ目そんな事一ッッッ言も言わなかったぞ！？逃げたらあたしの印象すんげぇ悪くなるじゃん！この船の人達にも迷惑かかるじゃんかよォ！！）
顔色を悪くしたルリコは左右に目線を彷徨わせると、船首を向き俯いた。
アタミは「嫌な事を思い出したんだろうか……」と不安になったが、実際ルリコは何も重要な事を言わないイオシフを思い出し、憤怒の形相で歯ぎしりをしていた。残念ながら歯ぎしりの音は波の音に掻き消され、アタミには届かなかった。
アタミはルリコの両肩に手を置き、小さく呟く。
「無理に話さなくても良い。ノルスヴェータに行き、落ち着いた頃に海上警備団に行っても良い。……ルリコ、悪いな」
ルリコは振り返り首を横に振った。
「いいえ――いずれ必要になる事ですから。でも……少し考えさせて下さい」
（あのツリ目男……島に着いた直後に半殺しにしてやろうか……人身売買も、有る事無い事でっち上げるのもなー。いっそ最初に異世界から来たって行っておけば……今更遅いけど）
ルリコが物騒やら余計な事を考えていると、右手の島にキラリと光るものが見えた。ルリコとアタミも反射的に光った所を睨む。
「アタミさん、あれは？」
「――ああ。ルリコ、戻った方がいい」
厳しい顔をしたアタミが見張りの所に行き、何事か話している。ルリコの隣にも頬に刺青を入れた筋骨隆々のデカイ男が来た。こんな見た目だが、若い嫁さんに頭が上がらないらしい。
「ルリコ嬢、何か見えたって？」
「はい――鳥が漂着物のガラスを巣に置いているだけがも知れませ

んが」
デカイ男は短い茶髪を乱暴に掻き上げた。
「まじぃな……ルリコ嬢、中に入ってな。海賊かもしれねぇ」
ルリコが驚いてデカイ男を見上げる。
「海賊、ですか……？」
「ああ、昔っからこの辺は海賊多くてな。海竜と珊瑚礁の保護条約なんたらで、この見通し悪りぃトコ通るしかねぇんだわ。最近は少なかったんだがな……無くならねェよなあ、本当」
ルリコがデカイ男と話していると、背後から大声が聞こえて来た。
「先ほどの島で狼煙が上がりました！海ツバメでオリ島に連絡します！」
その声でデカイ男は舌打ちをし、ルリコを船室への入り口へ急いで押した。
「戻れッ、嬢ちゃん！」
船室への通路へ押し込まれると、「総員、戦闘配備！」と野太い怒号が聞こえた。ガチャガチャと、金属音も聞こえてくる。
通路でルリコは立ち尽くしていると、肩を引っ張られた。反射的にルリコは睨みながら見上げるとツリ目――イオシフが眉を顰め、厳しい表情をしていた。いつもと違い金属の小手や胸当てを付けている。似合わない、とルリコは正直に思った。
「船室へ戻らず、下に降りてエウラ達と共にいて下さい。それにしても――海賊とは、ついてない」
イオシフはため息を吐くと、ルリコを後ろへ押した。
ルリコは言いたい事が沢山あったが、何も言えなかった。
「海ツバメを連絡に飛ばしましたから、多めに見て一時持てば助かりますが、あまり安心しないで下さい」
イオシフは一度、腰の剣を少し抜き、戻した。カキン、と金属音が響く。
「……あなたの事降ろせなくなっても、文句言わないで下さいよ」
イオシフは目線だけでルリコを見た後、甲板に出ていった。呆然

としていると、走って来たベレニケに「こっち！」と引きずられていった。痩せたおばさんと巻き毛のおばさんが、金属の閂をかけるのを、ただ、ルリコは見ていた。

船室の下、ソルスヴェータからの荷物が詰まれた場所に、ルリコ達女性陣はいた。端っこにいる怯えた船長をドルシアが宥めている。入り口を槍を持った長身のおばさん二人が固めていた。やはり鎧のようなものを着ている。

「大丈夫だよルリコ。うちの船員達は皆訓練してるし、海上警備団だってすぐ来る」

エウラがルリコの肩を握っているが、エウラの顔色は悪い。手も少し震えている。

ルリコは未だぼんやりしながら、エウラに尋ねた。

「エウラさんは、海賊に会った事ありますか？」

「うん……二回」

エウラが俯いたのを見て、ルリコは視線を逸らした。

（あんまり言いたくねぇんだな……にしても、海賊か。やっぱ治安良くねぇんだな）

ルリコは二回ほど船内をうろうろしたが、大砲の様なものは無かったのを思い出した。

（まだ火薬が無ぇみてぇだから、遠距離は投石か弓、か。横付けしたら武器使って接近戦……被害は、そこそこ出るだろうな……あー、やだやだ）

ルリコは体育座りになり、膝に顎を乗せた。久しぶりのロングスカート。パンツが丸見えになるが女性ばかりなので気にしなかった。

しばらくぼーっとしていると、ルリコはガタンと大きな音が聞こえたのと同時に立ち上がった。階段を降りてくる音が聞こえる。

（二人か……まさか、やられた訳じゃないよな）
出入り口の二人のおばさんは扉に急いで閂をした。ドン、ドンと扉が叩かれる音がする。
ルリコは鞄のストラップから壊れた腕時計を取出し、右手に着ける。
おばさんは目配せしながら、叩かれている戸から少しずつ離れ、槍を構えた。
ルリコはゆっくりと扉に向かい歩く。止める人は居ない。
鈍い音がして、扉を突き破り何かが見えた。何時も音がし、扉が壊されてゆく。
ルリコは助走を付け、走りだす。

扉が破られた。
おばさん二人が槍を突き出す前に、ルリコのドロップキックが男の胸に決まった。ごちん、と向こうの壁にぶつかった音がし、男は崩れ落ちる。
ドロップキックが男に決まると、ルリコは身軽に後ろ受け身を取り、素早く立ち上がる。
階段にいたもう一人の男が呆然としている間に右手を安全靴で蹴り、武器を落とさせる。武器はギンッ、と高い音をたて、天井にめり込んだ。
「……っこの！」
「遅ぇ」
男がナイフを取り出す前に、ルリコは鳩尾に右肘打ちを入れ、腕時計を握った右手で裏拳を鼻に叩き込む。痛みと鼻血に怯んだ隙に背後に回り、容赦なく下に蹴り飛ばした。
ドロップキックを食らっても、ふらりと立ち上がろうとした男に、蹴り飛ばした男がぶつかる。どさり、と音がしたのを確認すると、ルリコは階段五段目まで降りて、無表情のまま蹴り飛ばした男に踵を振り下ろした。

「ぐぇっ！」
「ぶぎっ！」
ルリコは悲鳴を上げた男達から降り、何回か顔面を中心に蹴り飛ばし気絶したのを確認すると、呆然と見ていたおばさん二人に話し掛けた。
「すみませんが、こいつらを縛り上げるのを手伝ってもらえますか？ロープ近くにあります？」
ルリコがそういうと、おばさん二人は槍を落とした。
「ル、リコちゃん……」
「すごい、ね」
二人が呆然としている間に、ルリコは男達の服を剥いでゆく。ナイフなど刃物類は遠くに放り、上着や頭に巻いた布を捻り、猿轡をつくった。猿轡を噛ましきつく縛り、下着だけになった男から離れた。
「ロープどのあたりですか？」
ルリコが言うと、ベレニケが丈夫そうなロープを持ってきた。
「ルリコちゃん、これで良いかい？」
ルリコはロープを受け取り、じっくりと観察した。
「十分です。あ、あとフックみたいな引っ掛けるものありますか？」
「何に使うんだい？」
ベレニケが聞くと、ルリコは気絶した男を指差した。
「逃げられなくする為、下着を取りたいんですが……触りたくないので」
「あらら、じゃアタシが代わりに取ろっか？」
「……汚いですよ？」
ルリコが心底嫌そうに見ると、ベレニケはでかい胸を張った。
「なに、気にならないさね。ちょいと、ホラ！ぼーっとしてないで手伝っておくれよ」
ベレニケと槍を持っていたおばさん達が男を剥いでいる間、ルリコは放り投げたナイフから二本を取った。一つは全長十二センチの

細いナイフ、もう一つのナイフは重く、黒い金箔押しの革ケースに入っていて刃渡りは二十センチはありそうだ。ケースを外してみると、刃は何か文字が刻んであり、ノコギリ状に加工してあった。
「うっわ……趣味悪ッ」
ナイフをケースに収めると、迷惑料としてナイフを頂く事にする。仕舞いながら男達の方に歩いて行くと、全裸に剥かれていた。
「それでは縛りますので、どいて下さい」
ルリコはあまり男達の裸を見ない様に引きずり、手近な柱を前に抱える様にして、手足をそれぞれ結んだ。
二人を縛り上げると、ルリコはふう、と深呼吸する。
「これでいいですかね。ベレニケさん、コレって――海上警備団で引き取って貰えますか？」
柱に結んだ男を“コレ”呼ばわりするルリコに、ベレニケは腕を腰に当てて頷いた。
「ああ！その為に税金払ってるからね！いやぁ、ルリコちゃんってば強いねぇ！」
ルリコは目を伏せて、ゆっくりと首を横に振った。

七話・海賊、迎撃

「おう、そこのチューボー、男と女で差がないのは何だァ？」
ルリは短い金髪に赤いサラシを巻いた女性に尋ねられた。黒い口紅を塗った唇は、楽しそうに歪んでいる。
「頭」
ルリが答えると、短い金髪の女性は首を振った。
「そーだけどよォ、ちょい違う。ギジュツテキなコトさ。アタイはァ、瞬発力と素早さだと思ってる」
短い金髪の女性は、赤い特攻服から棒付き飴を取出した。
「純粋な力比べじゃァ、男には勝てねェ。いッッッくら筋トレしたってなァ。だから、女だと油断してるヤツラに出会い頭で一発カマして、流れを変えちまう。木刀や鉄パイプ、安全靴……武器が有りゃあ、大して性別差関係ェねぇからなァ」

「わたしは強くないです」
ルリコは何かを諦めた、そんな表情で力なく微笑んだ。
「ところで、何か鉄の棒の様な武器はありませんか？」
ルリコが聞くと、槍を持っていたおばさんが、落ちていた槍を拾った。
「これではダメかい？」
ルリコは目を伏せて頷く。
「重すぎますし、その武器じゃ人を殺してしまうかも知れません。申し訳ないと思いますが、わたしは人を殺す事はしたくありません」
ルリコは勝手な我儘だと思っていたが、そうとしか言えなかった。人を殺してしまったら、元の世界に戻っても、きっと、ずっと後悔するだろう。泣き叫ぶ相手を殴った感触ですら、すぐに消えてはくれないのに。

喧嘩の時でも、口では「ブチ殺す！！」と言っていても、頭から教わった急所は武器で攻撃はしない。それがグループの決まりであり、ルリコを率する事だった。。

おばさん三人が悩んでいると、エウラがルリコに近寄って来た。
「台所に麺棒があるよ。あと、ルリコの隣の部屋、副船長の部屋じゃない方に金属製のオールが何本かあったはず」
「麺棒では、強度に不安が……やはり、わたしのいた船室付近まで戻らなければなりませんか」
ルリコは半眼で呻いた後、軽くストレッチを始めた。
「わたしは武器を取って来ますので、皆さんはここにいて下さい」
ルリコの言葉に、エウラやベレニケ達おばさんが反論する。
「危ないよ！」
「じっとしとき！」
「ルリコちゃんも、ここにいた方がいいよ！」
「アタイも行く！」
騒ぎ出した女性陣を見つめ、ルリコは口元に人差し指を立てる。
「静かにして下さい。五人以上の団体に来られたら、わたしには何もできません。上の様子も気になりますし、きっとすぐ戻って来ます」
ルリコはそう言うと微笑み、ロープを革鞄にねじ込んだ。
「一度に三人までなら撃退できますので、ロープは貰って来ますね。では、お静かにお願いします」
ルリコはもう一度口元に人差し指を当てると、静かに階段を登っていった。

自分は強くない。
ルリコは、何度もその事を味わった。

故に、自分が強くなる方法も知っていた。

自分のいた船室に向かい、階段を登り、静かに通路を歩く。すると、重い足音が聞こえて来たのでルリコは深呼吸をした。

通路の曲がり角で出会ったのは髭を生やした、むさ苦しいオッサンと腹に刺青をいれた半裸のオッサン。

「……っ、いやっ！」

ルリコは演技全開で高い声を出し、目を見開きながら壁に張りついた。オッサン達は汚い笑顔を浮かべ、ルリコを舐める様に見た。

「……ふーん、若い娘も居たか。中々高く売れそうだ、いや、飼って客を取らせるかな」

「なぁオルゼン、その前に、使えるかよーく、調べねぇといけねェよなァ！」

ニヤニヤ笑いながら近づく髭のオッサンに、ルリコは右手を降って後じさる。

「い、いやあッ！やめて！来ないで、来ないでッ！」

ルリコは演技に徹し、目を見開いているので目が乾き始め、涙がうっすら浮かんでいる。イイ感じに勘違いした髭のオッサンがルリコの右手を掴むと、ルリコは目を細めた。

ルリコは右手を捉まれたまま、左足を斜め前に出し、刺青腹の男の股間を思い切り蹴り上げた。

「おごッ！！！」

右手を掴んだ男が仰天してる間に、男の右肘を肩にかけ、極める。

「あ、あだだだッ！！」

激痛に男が苦しんでいる間に、股間を手で押さえた刺青腹の股間を更に蹴り、大人しくなるのを確認した。髭オッサンの右足を払い、引き倒すと鳩尾を目がけて膝を落とした。

「ぐげぇっ！」

オッサンが吐いた吐瀉物を無表情で見ながらルリコは服を剥き、猿轡を噛ませ手足を階段の手刷りに結んだ。ナイフは一本頂戴し、

他の刃物と財布は近くの部屋に投げ入れ、もう一人の刺青腹を剥き始める。
　ルリコ的に、下着は触りたくないので剥ぎ取らない。
「うっわ汗臭ッ！オッサン風呂入れよ！」
　不満気に呟きながら、ルリコは同じ様にナイフや財布を別の部屋に投げる。猿轡を噛ませ手足を縛り上げると、額の汗を拭った。
「さて、どこに結ぼっか……」
　ルリコがキョロキョロ見回していると、スキンヘッドのオッサンが曲がり角から現れた。
「お、おめェ何してやがんだ！」
　スキンヘッドが鞘から剣を出す間に、ルリコは刺青腹の手足を持ち、二回転してぶん投げた。
「おわっ！ダグ！」
　スキンヘッドは刺青腹を受け止めたが、勢いが強く、壁に頭をゴッとぶつけて座り込む。
　ルリコは容赦なく、スキンヘッドの側頭部を蹴った。
「あぎっッ！」
　次に鼻を蹴ると、鼻血を吹き出しながら横に倒れた。ルリコの安全靴と通路に血が飛ぶ。
「これで、五人目……何人いるんだ？甲板の人達全滅してねぇよな？あー、ものすごい不安になってきた」
　ルリコは不安に思いながらスキンヘッドを剥く。先程と同じく、剣やナイフや財布等は別の部屋に投げ入れる。
「それにしても……ナイフ必ず四本は持ってるんだよな。あぶねー」
　スキンヘッドの靴を脱がすと、またナイフが転がった。
「げッ！このハゲ何本持ってやがんだよ」
　ルリコは猿轡を噛ましながらぶつくさ文句を言い、刺青腹とスキンヘッドを抱き合うように結び、通路に転がしておく。
「こいつら来たのはこっちか……でも、甲板が不安だから行くか」
　頂いたナイフをポケットに入れたルリコは、縛ったオッサン達は

気にせず自分のいた部屋に向かって静かに歩き出した。

ルリコは表情を消したまま、鼻にピアスを付けた男の腹を蹴った。左手の指は変な方向に曲がっていた。

「げひっ！」

痙攣する男から武器や服を手早く取り去る。

「アバラ折れたか……でもそんなに力入れてないから内臓に刺さってないだろ。血吐いてないし」

ルリコは一人で納得し、トイレに縛り上げた男を転がした。

「コイツで八人目だよ……マジで全滅したんじゃねぇだろうな。……ロープだって後少ししかねぇ」

ルリコは人影を確認しながら、急いで目的の部屋に向かう。

通路の確認をし、静かに進むと甲板への通路に出た。扉ごと金属製の閂が落ちているのが見え、うっすらと見える甲板には矢が何本も刺さっていた。

（マジで矢かよ……パッと見、死体転がってないから全滅してはない……と信じてェけど）

いくら喧嘩慣れしたルリコでも、死体の転がっている場所で冷静に対処できる自信は無い。

ルリコは最悪の事態を考えながら、ゆっくり部屋に進み、身を滑り込ませた。

血のにおい。

ルリコは反射的に血のにおいがする方へ体を向けると、暗色の布に包まりオッサンが身を縮めていた。

「ニコスさん？」

「……嬢ちゃんか。ってぇッ！」

ニコスは右肩と左手、脇腹に矢を刺していた。しかし、出血は少ない。

「あのヤツラ、矢射かけてきやがって……このザマだ」

苦々しげに舌打ちすると、後ろを振り返った。ルリコも後ろへ視線を向けると、目を閉じたイオシフが蹲っていた。顔や服を血で汚し、左腕は真っ赤に染まっている。多分ニコスが腕に布巻いたのだろうが、血は未だに滲み出ている。
「第一航海士も結構頑張ってたがよ、ヤツラにぶん殴られて気絶しちまってよ。俺も頑張って引きずって来たのさ」
ルリコはニコスの言葉を聞き流し、部屋の物色を始めた。金属のオールを何本か持ち、比べながら首を傾げる。
「で……嬢ちゃん、何してんだ？」
ルリコは中途半端に折れたオールを掴み、軽く振り回して頷いた。
「武器探しです」
「武器！？」
ニコスが絶句するのも一切気にせず、引き出しを漁る。
「そうです。ここも安心出来ませんよ。小麦とか置いてある場所から、八人はやっつけて来ましたから」
「八人もか！？」
隣の引き出しから革手袋を見つけたルリコは、指先をナイフで切り、折れたオールの持ち手に布を巻き始めた。
「他の人達は？大体無事ですか？」
ニコスは深呼吸をし、額に手を当てた。
「……新人、二・三人は殺られた。他は矢が刺さったってピンピンしてるさ。特に、あー見えて副船長は強ぇからな」
「そうですか。ではわたしも甲板に行きます」
ルリコは革手袋の手首を紐で縛り始めた。
「――おい、本気か？」
「本気です。もうそろそろ海上警備団が来るでしょう？今からなら、少しでも相手の戦力を削いだ方が良いです」
縛り終えると手を開いたり閉じたりし、ルリコは頷く。
「わたしは女ですから、男は大体油断します。そこがわたしの強さです」

ルリコはニコスに向けて微笑むと、静かに部屋を出た。

甲板に向けて歩き、到着すると左手に血溜りが見えた。血の中に――矢の刺さった、まだ少年が倒れている。

ルリコは跳ね上がった心拍数を、気合いで押さえ込む。

（悼むのは後、落ち着け……落ち着け）

頬を一回叩き、金属製のオールを握り締め、ルリコは前に走りだした。

八話・オジイチャンと海賊船

ルリコは黒い海賊船の近くに来て、上を見上げた。後ろのマストに黒い糸が絡んでいるのが見えた。
（クロウミズグモの糸……か。こんな使い方もすんのかよ）
ルリコは短く舌打ちすると、海賊船からかかっている橋――木の板に飛び乗った。両端と中央に金属板が加工されているので折れないだろう。
「ルリコ！」
ルリコが振り向くと、左肩に布を巻いたアタミが走って来た。白いジャケットは大半が赤黒く染まっている。
「大丈夫ですか？」
「――ああ。ルリコこそどうした？危険だから戻った方が良い」
アタミは真剣な顔つきでルリコの右腕を強く掴んだ。
（うーん、ヴィクトル爺は心配だがアタミさんをブン投げる訳にはいかねぇな……）

船員であり商人のヴィクトル――通称、ヴィクトル爺は齢八十になる白い髭と日に焼けまくった褐色の肌をした老人だが、腰はまっすぐで、まだまだ現役と自負し誰よりもよく働く。ヴィクト爺独自の購買ルートも幾つかあるらしい。若い頃は海賊まがいの事をしていたらしく（無駄に）血気盛んで、デカイ中華包丁の様な剣を背負っているハイパージジイである。

「ザンギルさんから、ヴィクトル爺の救助を頼まれたのです。一度に四人までなら、わたしにも何とかできますし無傷ですから」
ルリコは真剣にアタミの説得を続ける。
「イオシフさんもニコスさんも怪我をしてるので、手当てしてあげて下さい。わたしの部屋の右隣に隠れてます。それではお願いしま

す」
　ルリコは掴まれた手を回し、手のひらが上に来るようにすると、一気に手のひらを下に向け、アタミの手を振り払った。壊れたオールを握ったまま橋をバランス良く渡り、アタミを引き離す。
「ルリコ！！」
　アタミの叫び声が聞こえたが、ルリコは振り返らず海賊船内部に入っていった。

　海賊船内部は狭く、薄暗く、何となく湿気があり、オッサンが集団で生活していたからかどことなく汗臭い。
　ルリコは眉間に縦皺を作りながら、慎重に進んだ。
（死体は……ないか。死体なんて見たくねぇからイイけど……）
　先ほど、通路一面にべったりと付いた血痕を思い出すが、必死に振り払った。
（血は見慣れてる！あたしは平気！）
　顔をぶんぶんと振り、何時か屈伸すると、ルリコは再び通路を進んだ。
　しばらく進むと、下から怒声が聞こえた。下に行く階段を探していると、背後に気配を感じオールを突き出した。
　ギィイン、と金属音が響く。
「チッ、気付かれちまった」
　口元に傷のある、白に近い金髪の男が湾曲した剣を突き出していた。まだ若い。
　ルリコは鳥肌が立つのを感じたが、気合いで押さえ込む。
（この男――さっきの三下どもとは違ぇな……普通にやるなら、勝てねェ）
「イきのイイ女は好みなんだ。楽しませてくれんの？」
「ごめんなさい。その気は――無ェよ」
　金髪の男は口元だけで笑い、下から切り上げて来た。ルリコはバックステップで躱し、懐に入ろうとしたが反射的に右足を回転させ

る。
ギャリッ、と音を立て安全靴の底をナイフが擦った。
「――っ！」
「へぇ……勘イイじゃん？」
ルリコは間合いを取り、手を狙ってオールを振るがことごとく躱される。時折ナイフが鋭く突き出され、躱した所で剣が振られるので躱すのに必死だ。
――もっとも、ルリコは前の頭に十人からの攻撃を避ける特訓を受けていたので、躱すのにはかなりの自信がある。
（くっそ！マジ始末悪リィ！剣は何とかしてぇな……）
「よく躱すな！オレ、ゾクゾクしてきたッ！」
金髪の男は笑った。背筋を凍らせる様な美しく、妖艶な笑みにルリコは身震いする。
（――この野郎、前の頭と同じ笑い方しやがる！遊んでやがったのか！？）
ルリコは低くオールを振り、金髪が下がった瞬間手を蹴り上げた。
「おっ！」
「ちっ、ナイフか！」
柄を蹴られ、金髪の手から抜けたナイフを遠くに蹴りながら、ルリコはオールを振るう。またオールを低く振ると、金髪に踏みつけられたので肘で鳩尾を狙うが、躱される。
「ひゅう！あッぶねー」
ルリコはまた金髪と距離を取り、深呼吸をした。金髪は上着からまたナイフを取り出している。
（キリねぇよ！しゃーねえ……アレやってみっか）
ルリコは後ろ手で革鞄を漁り、ナイフを投げた。金髪がナイフを剣で叩き落とし、反対の手からナイフを突き出す。
「遅いッ！」
ルリコは突き出された手をいなし、足でナイフを弾いてから指を握り、素早く指を極めた。

「ってェ！」
ルリコは金髪から離れ、短く息を吐き、オールを操り突き払いを繰り出す。金髪は先ほどとは違い、つまらなそうに後退する。ルリコが怪訝そうに下がると、金髪は剣を鞘に収めた。
「……やめ。行けよ。仲間も見逃してやるから」
「え？」
「指痛いから、もうヤるき無くしたー」
殺気の消えた金髪は、極められた指に息を吹き掛けている。相当痛かった様だ。
当然だが。
ルリコはオールを担ぎ、金髪を横目に見ながら通り過ぎようとすると、金髪がのしかかってきた。殺気は無い。
「オレこんな痛い目あったの初めて。お姉さん、また遊ばない？」
「……断わる」
ルリコは鬱陶しそうに振り払うと、階段に向かう。
「オレの名前はルスランだから！覚えといてよ！」
ルリコは金髪の言葉を聞き流し、階段を降りた。

ヴィクトル爺は自慢の剣を振るいながら後退していた。背後には傷を負った若者が三人。
「ヴィクトルさん！」
ルリコは奪ったナイフを足元に向かって投げた。ヴィクトル爺と切り結んでいた男が離れた。男は角刈りで、顎髭とモミアゲが一体化していた。身長はルリコとあまり変わらない。
「海上警備団が来ます。退いて下さい！途中の男は手出ししないと思うんで」
ルリコは手近にあった椅子などを投げつけながら一体化男を牽制する。
「……あいつ！サボりやがって！」
ルリコは傷を負った若い男を支えながらも、牽制する事を忘れず、

手当たり次第に椅子や皿を投げる。傷を負った男達を逃がすと、ヴィクトルも下がって来た。
「ルリコ嬢、悪りィな。おめぇも下がれ」
「……それはヴィクトルさんが退いてくれないと無理です」
一体化男が両刃のごつい剣を振るった。ヴィクトルが避けなかったのでルリコはオールを縦にして受けとめるが、衝撃に両手が痺れる。
「……うっ！」
（お、重ッ！さっきの金髪よりヤバい感じはしねェが、重い！！）
ルリコはヴィクトルを階段に突き飛ばし、一体化男の斬撃を避けまくる。ルリコに斬り掛かる度に壁や床、テーブルなどが破壊されるが、一体化男は気にした様子がない。
ルリコは痺れた両手が回復するのを待ち、手を狙ってオールを振るった。二、三回攻撃した後、一体化男の顔面目がけオールを投げる。投げたオールと共に前進したルリコは、オールを弾き落とした一体化男に側面からヤクザキックを食らわすとバックステップで下がった。
「この女……！」
ヤクザキックを顔に食らった一体化男は血を拭い、ルリコに追撃しようとしたが、こっそり側面に回ったヴィクトルが丈夫そうな椅子をぶん投げ、いい音を立て後頭部に当たり、膝をつき倒れた。
「ヴィクトルさん素敵！」
「まだまだ現役じゃからの！」
ヴィクトルはにやりと笑い親指を立てた。
金歯が眩しい。
ルリコは投げたオールを回収すると、ヴィクトルに近寄った。
「ルリコ嬢にはびっくりしたのう。随分と戦い慣れてる様じゃし」
「わたしなんて大した事はないですよ」
（戦いっていうか……基本的には殴る蹴るの集団喧嘩だしな）
「ともあれ、嬢ちゃんのおかげで助かった。オリ島についたら若い

娘の服でも髪飾りでも買ってやろうかの！いや、海上警備団が来るまでこの船から何か、高く売れそうなモンふんだくるかの！副船長達には内緒で、迷惑料として山分けせんか？」
「……火事場泥棒って、わかりますか？」
「？ん？嬢ちゃんの国の言葉か？」
ヴィクトルは首を何度も傾げた。傾げながらも棚や戸から荷物を引き出し、散らかしている。
（あたしが言ったって説得力無ぇか。ナイフ何本も盗ったし）
棚の中身を引き出したヴィクトルは、戸を結んでいたロープをルリコに渡す。
（――一応、モミアゲ一体化男縛るか。丸裸にするのはヴィクトル爺にやらせよ）
ルリコがロープの強度を確認していると、ヴィクトルが「うお！」と叫んだ。
「窓だったか！？危ないのぅ！ん？」
ヴィクトル爺は戸――もとい大きめの窓から身を乗り出した。ルリコは慌てて、近くの柱にロープを縛り、ヴィクトルに近づく。
「危ないですよ！ロープ持って下さい！」
ルリコはヴィクトルにロープを持たせようとしたが、ヴィクトルは渋い顔をして手を振った。
「儂は平気じゃ。年寄り扱いするな！それより、アレ見てみ」
ヴィクトルは左を指差した。ルリコも見てみるが島影に隠れ、波が高くなって見えにくい。それに、いつの間にか船首方向にまで来ていたのに驚いた。
右隣の、ルリコ達が乗っていた船は財布と札束とコインが描かれていた帆が、無数の穴が空きボロボロになっていた。
「あの白いのが白海竜じゃ。ほれ！とんでもなく早いぞ！」ヴィクトルは指差し嬉々として話すが、白波に紛れルリコは確認できない。
（ずいぶん目のイイ年寄りだ……）
ルリコは半分呆れヴィクトルにロープを巻き付けるべくオールを

下ろそうとすると、嫌な感じがしてオールを横にして掲げた。
高い金属音と、痺れる両手。
モミアゲ一体化男は頭から血を流しながら、ルリコに剣を振り下ろしていた。オールの半ばまで、剣がめり込んでいる。
「嬢ちゃん！」
ヴィクトルは窓から離れ、剣で応戦しようとする。
「ジジイはどけ！」
一体化男は剣を横に払い、剣撃をヴィクトルは受けとめるが、尻餅をついてしまった。
「ヴィクトルさん！」
尻餅をついたヴィクトルに斬り掛かろうとする一体化男を止める為、ルリコは大切を低くし遠慮なく膝裏をオールでぶん殴る。オールも限界だったのか、ぐにゃりと曲がってしまった。
「ぐあっ！」
一体化男が仰向けに倒れると、ルリコはオールを捨て腹を踏みつけた。動かないのを確認すると、一体化男の靴を脱がし両足を縛った。
「油断しちまったよ」
小さく呟き、手を蹴り付け剣を奪うと、遠くに放り投げる。
（――そうだ。逆さ吊りにしてやろう。このモミアゲ、血の気多いみてェだからな）
ルリコは閃くと、尻餅を着いているヴィクトルを起こした。
「大丈夫ですか」
「あー、腰は痛いが、何とか平気じゃ」
ヴィクトルは起き上がると腰をトントンと叩いた。
「じゃあ、こいつ窓から吊り下げるので後ろを持って貰えますか？血の気多いみたいなので、大人しくなるでしょう」
「あ、ああ、わかったぞい」
ルリコが男の肩を持つと、ヴィクトルはロープを巻いた足を抱えた。二人でずりずり一体化男を引きずると、「金髪に長身の娘、ほ

んとに人魚みたいじゃのう」とヴィクトルは小さく呟いていたが、ルリコは気にしなかった。
窓まで来た二人は、ルリコが窓ギリギリに立ち、ヴィクトルが窓より少し後方で止まった。ルリコは肩から腕へと、一体化男を持ちなおす。
「一、二の三で投げますよ」
「わかったぞい」
二人は一体化男の体を振り子の様に揺らし、勢いを付けた。
「いーち、にの、さん！」
ルリコが先、ヴィクトルが少し遅れて手を離すと、一体化男が目を開けた。
「……っんの女！」
一体化男はルリコの足を掴もうとするが、ルリコはひらり、と躱した。
ひらり、とした。
「あ！」
制服のロングスカートがひらりと靡き、一体化男はスカートの端を掴んだ。
一体化男とルリコはまっ逆さまに海へと落ちる。しかし、一体化男は途中で落下が止まり、船壁にぶつかる。
「ッうぐ！」
男は衝撃で手を離し、ルリコは海へと落ちる。ルリコは慌ててスカートを抑えていた手を落下方向へ向けた。パンツ丸見えはイヤだが、この高さで頭から落ちたら、気絶しかねない。

ざばん、とルリコは海中に落ちた。鞄が抜けない様しっかりとストラップを持ち、力を抜いて浮き上がる。
「――ぷはっ！」
ルリコは思い切り息を吸い込み、深呼吸をする。上を向くとヴィクトルが何か叫んでいるようだが、耳に海水が入り良く聞こえない。

ヴィクトル爺曰く、左手に見えていたらしい海上警備団も波が高く、見えない。
（海に落ちるとはマズったな……とりあえず、乗っていた船は落ち着いてると思うし、泳ぐか）
ルリコはあまり体力を使わない平泳ぎで、少しずつ海賊船から離れた。

九話・流されて離岸流

乗っていた船に向かいルリコは泳いでいたが、何か変だと気付いた。前方を見ると、小さな岩の島がある。

「何か進まねぇ気がすんだよな？沖に引っ張られるみてぇな……」

ルリコは船に近付こうとクロールに変更するが、進むのは沖の方だ。

「まさか……ここまで離岸流？ヤベ！どーしよーもねぇ！」

ルリコは呆然としながらも、船に向かい両手を振ってみた。離岸流で流され、高くなって来た波では留まるのも難しい。

手を振っていると気付いたのか、船員が手を振った。ルリコがいる海面からでも赤い服が認識できる。血で染まったのだろう。

「助けてくださー……わぷっ！」

波に晒されながら叫ぶのは難しく、ルリコは被害を抑えるように浮き沈みを繰り返す。救いは海水が冷たくない事だけ。

勢い良く海面に出て酸素を吸い込むと、小さくなった人影が四人に増えていた。

白い袋を投げたが、ルリコには届かない。

「もっと紐長くしないと！ってあー、ここで言っても聞こえねーよな！」

ルリコは文句を言ったが、状況は好転しない。流されてきた流木に捕まり、沖に流され離れゆく船を見ながら、海上警備団の救助を待つしかなかった。

しばらく流されると、波の合間に船も見えなくなった。一面に広がるのは、ただ、波。

「あれ？……もしかして、あたし見失われた？」

ルリコは流木に捕まりながら呟いた。

アタミは傷を負った船員を女性陣と共に手当てしていた。刺さった矢も出血は少なく、島に到着したら医者の手当てを受けるつもりである。

「腕を固定したから、動かすなよ」

「はい……」

まだ少年の船員は白い顔で頷いた。アタミは立ち上がり、赤黒く変色した帆布で覆われた端を暗い目で見る。

（三十人程の襲撃で、二人の死亡……重傷者は三人、か）

「幸運なものか……」

苦々しく呟くと、血に染まったジャケットを脱ぎ捨てた。べちゃり、と音がする。

「副船長……」

アタミが振り向くと、エウラが青い顔で立っていた。いつもの快活さが全く無い声で、小さく呟く。

「ルリコは、どこですか？」

アタミはエウラから視線を逸らすように、黒い海賊船を見た。

「一人で、海賊船に行った」

その言葉に、エウラは悲しそうに叫んだ。

「何で止めてくれないんですか！あんなに身体中打ち身だらけなのに！何で、ルリコだけで行かせたんですか！」

「私だって止めた！」

アタミが怒鳴ると、エウラはびくりと肩を震わせた。アタミは目閉じ、返り血で固まった髪を掻き毟る。

「――すまない。何としても止めるべきだった」

「いいえ。アタイも、何も出来なかったので」
エウラは少し落ち着いたのか、着ているシャツの裾を握りしめている。
「手当て手伝ってきます……」
とぼとぼと歩いてゆくエウラを見送り、アタミはため息を吐いた。船首に向けて歩いてゆくと、見た事がない口元に傷のある金髪の男が手当てを手伝っていた。
海賊の一員の様だが、全く戦意がないので、アタミは気にせず歩き続ける。

「船長」
アタミの言葉に、ペルッツは甲板に広げた草の選別から顔を上げた。
「ア、タミ……」
ペルッツは白い鉢から赤い花をぶちぶちとむしった。
「この、もり、っツエの花を、つぶして、みず、とあわしぇてのむ。血が、ふえ、るんだ、な。みんなに、飲ま、しぇてほし、い」
ペルッツは清潔な白い布にむしった花を置いてゆく。
「ど、るしあ。しーむろ、ぉーじも持って、きて。葉っぱ、をつ、ぶしてしるをき、ずにぬる。さっきんな、んだ」
「わかりました」
ドルシアは素早く立ち上がり、船長室へ向かう。
「私も手伝います」
アタミの申し出に、ペルッツは勢い良く首を振った。
「アタ、ミはたた、かった。血、がいっぱ、いで、たからやしゅむ、ん、だな。おれは、こ、れしかでき、ない」
ペルッツは再び鉢植えを抱え、茎ごとむしってゆく。隣のおばさんに渡し、磨り潰すよう指示を出す。
アタミが赤い花が入った布を持つと、素早く来たおばさんにひったくられた。

「……昔、は、こんなふうにし、てやくそう、をふねにつんだ。おじい、さ、んか、ら聞いた」
「……そうなのですか」
「おれ、で、も役にたててう、れしいん、だな」
「船長は……、充分」
嬉しいような悲しいような複雑な表情をするペルッツからアタミは目を逸らした。
ドルシアが鉢を抱えて戻ってくると、シャツを真っ赤に染めた船員が急いで走ってきた。
「副船長！」
船員はアタミの前まで来るとむせた。ドルシアが背中を擦ってやる。
「無理するな。傷口が開く」
「っは、はっ、ごほッ！す、すいません！けほっ、大変なんです！」
船員はドルシアに礼をしながら、擦れた声で話し始めた。
「海賊船の方から、っごほ！ひ、人が……流されてます！長い、金ぱっげほッ！」
その言葉を聞くと、アタミは走りだした。

「ロープこんだけしかねぇのかよ！届かねェぞ！」
「何でもいいからやってみろよ！」
「早くしないと見失うぞ！」
「あー！もうあんなに遠い！」
ザンギルは舌打ちしながら、救助用の浮き袋を投げた。しかし、届かず、手を振っている金髪の人物は波に攫われ沖に流されてゆく。
「くそッ！海上警備団はまーだ来ねぇのか！？」
「波が高くなって来たから沈んじまうぞアイツ！」
船員が言い争っていると、アタミが来た。船員は言い争いを止め、俯く。

「流されているのはルリコか！？」
「――おそらく」
ザンギルが渋い顔で言うと、腕で沖へと流されている人物を指した。
アタミの目にも、小さくなった金色のものが見える。
「浮きは届かないのか！？」
「ロープがもう、無いんです。帆を下ろしてロープを足しても……間に合いません」
船員が俯きながら言うと、アタミは一度目を閉じ、開く。
「……縄ばしごと小舟の用意を。私が泳いで助ける」
「無理です」
アタミが振り向くと、左腕を吊った血の気のない顔のイオシフが立っていた。
「このあたりの海流は西の半島まで続いています。流れが早い為、落ちたら助からないとは皆知っている筈。海も荒れてきましたし、たとえ海竜でも救助は難しいでしょう」
淡々と言うイオシフに、アタミは低い声で唸る。
「……見捨てろ、と？」
「そうです」
イオシフは流されてゆく金色を見ながら呟いた。
「副船長、あなたは実質的に皆の命を預かってるのです。一人の為に皆を危険に晒すのですか？重傷の者もいますので海上警備団の力を借り、一刻も早く島に着く事が重要です」
イオシフが淡々と諭すと、アタミは光の無い目で見つめた。
「そう――わかっている。わかっているんだ」
アタミは冷たい言い放つと、やっと来た海上警備団の方へ向かった。船員達も暗い顔で散り散りになる。
イオシフが目線だけで見えなくなった金色を探していると、ザンギルが渋い顔でイオシフを見ていた。
「何ですか？」

「いやあ、おまえも大変だと思ってよ」
「いつも大変ですが」
イオシフは海から目を逸らし、ザンギルを静かに見た。ザンギルは深くため息をつき、瞼に手のひらを当てる。
「しっかし、後味悪いよなァ。何にも出来ねェってのは」
「……」
イオシフが船長のいる方に視線を向けると、一人の船員が問い詰められていた。
問い詰めていた女性は、その場で力なく崩れ落ちると、三人程に抱えられ船室へと消えていった。
イオシフは三人が船室に消えるのを見届けた後、波打つ海面をぼんやりと見つめ、ぽつりと呟いた。
「……私もこれ程後味悪いのは初めてですよ」

十話・人間やめました

「こりゃあ、本格的にマズい……」

ルリコは真剣に呟く。

高波に流されながら泳いだが、流木に右目をぶつけてしまった。髪を縛っていたゴムも流された。片目では視界も安定せず、丁度流れて来た扉の破片に苦労しながら体を乗せた。水分をたっぷり含んだ制服は重く、体力をかなり消費してしまった。

「海が時化てんじゃ、船も安全な所に泊めてるか。マズい……って言うよりヤバイな…わっぷ！」

波をまともに受け、流されかけるがドアの破片を必死で掴む。呼吸をしようと空を見るが、真っ黒な雲に覆われていた。雷雲なのか、不規則に光を放っている。

耳に水が入ってしまったせいで音ははっきりと聞こえないが、今にも雷鳴が響いて来そうだ。気付いて見れば周りが薄暗い。ルリコは体が冷えていくのを感じた。嵐になったら、まず助からないだろう。

「じ、……冗談じゃねぇ…」

胸から上を扉の上に乗せ、ルリコは低く声を漏らした。気温が下がったのか、冷えて張りつく制服の感覚に、体が震える。

（次に目が覚めたら…公園に戻ってるとか……普通に考えてねぇよ！水死体になって魚の餌！）

周りを見渡しても高波しか見えず、海水が顔にかかり視界が滲む。横から大波が迫り来る事に気付き、ルリコは扉の破片に鞄の紐をかけ、深く息を吸い海中へ潜る。力を抜き波に身を任せ、勢いが緩んだ所で海面に顔を出した。

「…ぷあっ！ごほっ、けほっ！…は、はあっ」

息を止める限界に近かったのか、少しむせながら扉を掴むと、手の甲に温度が違う水がかかった。目をこすりながら上を見上げると、

大粒の冷たい雨が顔にかかる。
「くそっ！降ってきやがった…！」
ルリコは忌々しげに舌打ちをし、鞄の紐を外してから、力を振り絞り扉の上に体を乗せた。先程よりも波は落ち着いたが、不安定な事に変わりはない。周りを必死に見渡しても、雨で更に視界は狭まり、海面には流木や何かの破片しか見えなかった。
「…マジで魚のエサ決定じゃんかよ」
ルリコは顔に張りついた髪を後ろに撫で付けながら、苛立ちをぶつける様に前方を睨んだ。すると、高くなってきた波間に木と白いものが見えた気がした。腫れた右目を抑え、左目のみを細めて見ると、流木に捕まった人間のように見える。
「テメェのことで限界だけど、しゃーねぇ！」
ルリコはよし！、と気合いを入れると、海に飛び込もうとした。が、鞄に通した白ボストンにゴーグルが入っている事に気付き、急いで取出し装着した。水着と共にチャック付ビニール袋に入れていた為乾いている。
「待っとれよ！」
ルリコは平泳ぎで進もうとしたが、速度重視でクロールに変えた。
（早く…もっと、早く！）
そう思うと、気分的には速度が上がった気がした。
あっと言う間に流木に着くと、ルリコはゴーグルを外して大声を上げた。
「大丈夫ですかー！」
血の気の失せた、真っ白な人がいた。まだ小さいから子供だろう。
「……！子供に、ひでぇ事しやがって…」
子供には首と手に鎖で繋がれた枷が付いていた。鎖が流木に絡まっている。無反応な事に不安になり、ルリコが手を触ると、冷たい。
間に合わなかったか、と震えそうになる体を叱咤し、口元に耳を寄せると微かに一定感覚で感触がある。まだ、息がある。
「誰か！いねぇのか！」

ルリコは叫んだ。悔しいが、今の自分には何も出来ない。
「誰か！」
無力感を打ち消す様に叫び続ける。
「いないのか！」
時化た海上に誰もいない事も理解している。
「誰か！！」
声が擦れる。
「助けてくれ！！！」
喉に血の味が混じり、ルリコは咳き込んだ。　子供を庇うようにしたせいか、冷たい雨がルリコの体力を奪う。足も動かしにくい。
（もう、終わりなのかよ…）
ルリコは冷えた子供の体を抱きしめると、目を閉じた。
すると、浮いた何かに乗り上げたのか、海面の上に出た体に制服が重くまとわりつく。バランスを取る為に手を付くと、つるつるして驚いた。
＞姐御、間にあったか！？ったッ！いて！痛ェ＜
ルリコと子供が乗り上げたのは、傷だらけのイルカだった。流木の枝が刺さるのか、痛いと騒いでいる。ルリコは慌てて、子供の鎖に絡んだ流木の枝を折る。
＞いやー、助かった＜
嬉しそうにイルカが言うが、普通じゃない異世界でも、常識的に考えてイルカは人語を話すような生き物じゃない。ベレニケ、エウラ、ドルシア、アタミなど出会った人達も『イルカは喋れるよ！』とは言ってなかった。
ルリコは取り敢えず、イルカの背鰭を殴った。手加減無しで。
＞あ痛ァァァ！姐御！酷い！＜
「夢じゃないんだな」
ルリコはぽつりと呟くと、イルカが生意気にも反論してきた。
＞ふ、フツー自分を殴ったりするんじゃねぇの！？で、姐御！コイツ…ヤバそうだ＜

ルリコは子供を見ると、唇や手の先が紫色に変色していた。口元に手を当てると、呼吸も弱い。
「おい！イルカ！近くに医者のいる島はあるか！？」
緊急時なので、ルリコは構わずイルカに話し掛けた。
＞あるけど……遠い。きっとコイツは保たねえ。姐御！オレの背鰭に鎖引っ掛けて、ちょっと降りて＜
「…わかった」
ルリコはイルカに従い、背鰭に鎖をかけて海へと落ちた。意外とイルカはでかい。四メートルはありそうだ。
＞よし！えー、海神ニエルドの血族セタ、偉大なる父の力を借りこの者と姐御をを癒す事を願う！＜
イルカが何かごちゃごちゃ言うと、子供の体が薄赤く発光した。顔色も良くなった気もする。
ルリコの顔も右目の腫れが収まったのか、視界が良くなった。
＞これで暫く保つ。体力を底上げしただけなんで、早く医者に見せた方がいい。島まで飛ばすから姐御も頑張れよ！＜
イルカはそう言うと、一気に泳ぎ出した。かなり離されてから、慌てて叫ぶ。
「ちょ、あたしも限界！」
急いでイルカに呼び掛けると、イルカはかなり距離を離して停止した。
＞姐御、気付いてないの？＜
「何が」
＞……足＜
イルカに言われるまま従うのは癪だったが、ルリコは足を見た。
自分の足は二本あった。紺のハイソックスも安全靴も履いていた。
しかし今は、ロングスカートの裾から何故か、魚の様な鱗が付いて透ける尾鰭が付いている。
「……」

ルリコは瞬きをした後、大きく息を吸い込んだ。
「靴ーーーー！！」
＞な、なんで靴？大事なの？じゃあ回収するよ。来い！野郎ども！＜
子供を乗せた傷だらけのイルカは五回高く鳴いた。暫くすると、キイキイ音がし、五匹のイルカが海面に顔を出した。キイキイ鳴いていたイルカどもは、ルリコに気付いて鳴くのを止めた。留まっていられないのか、ごちゃごちゃ動き回っていた。
＞兄貴！＜
＞姐御の＜
＞気配が付いたもの＜
＞持ってきた＜
＞きやしたぜ！＜
イルカはそれぞれ何かをくわえている様で、頭部を上に向けた。安全靴、靴下片方ずつと――
ルリコは無言で下着をくわえた黒いイルカの前に行き、下着をひったくり容赦なくぶん殴った。
＞痛ってえよ！姐御！＜
「うるせえ」
ルリコは瞬時に鞄へ下着をしまった。
＞…姐御、もうそろそろ雷が来る。イル！テホ！ゴリ！ハン！ヤム！トビエイの陣ッ！＜
＞了解でさあ！＜
＞姐御はゴリ……黒いイルカに荷物かけて、オレの前！＜
ルリコは色の違いが微妙すぎて分からなかったが、目の前の殴ったイルカに鞄を載せた。
＞姐御はもぐって呼吸を慣らしておいて。十数えたら出発するよ＜
ルリコは傷だらけのイルカに言われるまま、海に潜った。ゴーグルを付けなくても、先程と違い視界は良く下には珊瑚礁が見える。魚は岩下にでも隠れているのか、見当たらない。　海中でくるりと体を反転させると、五匹のイルカがV字型に並び、一際大きなイル

カが少し離れてVの尖った部分にいた。
＞五、四、三、二、一……行くぜ！＜
V字連隊になったイルカが同時に泳ぎだす。
ルリコも同時に泳ぎだした。クロールの泳法のまま腕も動かしていたが、腕を動かさずとも、かなりの速度で進む事に気付いた。膝――見た目膝は無いが、膝下からウェーブをする様に動かすと面白い程進む。
（すげ！全然息苦しくないし！）
＞姐御！飛ばしすぎ！若干左だから＜
傷だらけのイルカの声が聞こえ、ルリコは速度を落としつつ、方向を修正した。
海面を見上げる様に泳ぐと、下方にイルカの連隊が見えた。暫くすると合流し、速度を合わせて泳ぐ。
＞早ぇえなー！＜
＞さすが姐御＜
＞半端ねぇ！＜
＞負けてらんねぇ！＜
＞速度アゲるぞ！＜
イルカ達は楽しそうに言い合いながら速度を上げてゆく。海中では音が伝わらないので、イルカらしくパルスで会話してるのかもしれない。
（あれ……じゃあたし人間やめちゃった？）
ルリコは悲しく思いながらも、泳ぐ事に集中した。真上のV字連隊に速度を調節しながら泳いでいく。

＞来たぜ！＜
＞見えてきたぜ兄貴！＜
＞近いのは正面＜
＞正面は船だらけだ！＜
＞よっしゃ！裏回る＜

＞おまえら、人少ない所行けよ。見つかったらめんどい＜

ルリコにも前方に黒い影が見えてきた。複雑な岩場が奥に行くにつれ、緩やかに狭まっていた。

＞右手は砂地だ！左回っぞ！＜

＞了解！＜

イルカの連隊は左に勢い良くターンした。ルリコもほぼ同時にターンする。

（この体だと、普通の泳ぎ方忘れそうだな…）

ルリコはふう、と息を吐いたつもりだったが、気泡は出なかった。

＞お！いいとこめっけ！＜

＞小さい船着場。誰も居ない＜

＞上に登る階段見えるぜ！＜

＞おっしゃ！そこにすっか！＜

イルカの連隊は速度を急激に落とし、左右に広がった。広がった間を海中にいるルリコと、子供を載せた傷だらけのイルカが進む。海面に浮上し、息を吸おうとしたが上手く行かずむせる。

＞姐御！深呼吸！ダメだったら海に戻って！＜

傷だらけのイルカに言われ、ルリコは息苦しさをこらえ深呼吸をする。すると、いきなり呼吸が楽になった。前方を見上げ張りついた髪を掻き上げると、階段の上に灯りが見えた。

（人が、たくさんいる……）

イルカばかりと会話をしていた為、人間の気配が懐かしい。無意識に涙が流れた。

＞あ！姐御！ダメ！＜

声――正確にはパルスを発した傷だらけイルカの方を見ると、流れた涙が海面に落ちた。

すると、金色がかった大粒の球に変わる。

「な、何？塩分摂り過ぎ！？」

手伸ばし掴むと、真珠に似たヌメリ感があった。二つ三つ、四つ

と落ちるのに慌て、目をこする。
＞あっちゃー。やっちったか……。人魚の涙は真珠になるんだ。今は貴重だから、売るときは注意して＜
傷イルカが船着き場に乗り上げ、器用に子供を下ろす。連隊を作っていたイルカ達も順々に荷物を置いてくれた。
「あんまり、涙売る気にはならねぇな……所詮、老廃物だし」
真珠とゴーグルを制服のポケットに突っ込み、ルリコはぼやいた。
＞姐御！ヒトは金が必要でさぁ！＜
＞使えるものは使った方が良い＜
イルカが騒ぎ立てるのを聞き流し、ルリコは船着き場に手をかけ、体を乗り上げる。下半身はまだ魚状だった。
「…で、足、治せんのか？」
＞多分、擦ったり揉んだりすると治るぜ！オレはコイツの枷取っちゃうわ。変な枷だし＜
傷イルカは海に戻り、先程と同じ様に何か唱え始めた。ルリコは足を下から擦ってみる。
＞海神ニエルドの血族セタ、異なる地を生きるモノが造りし、枷を滅す事を望む！＜
ルリコは足を擦っていると、尾鰭が足の形になって来た。急いで揉んでみる。。
＞ん……しつこいな。滅せよ！滅ッせよッッ！メエェェッセヨォォォォォ！！＜
傷イルカが叫ぶと、枷は砂になって海へ消えた。ルリコの足も二つに分かれ、別々に動かせる。ルリコは石造りの船着き場の上で正座をし、イルカ達に頭を下げた。
「あんたらには、とても世話になった。傷もいつの間にか治ってるし。礼は後で必ず返す」
＞イイって姐御！そいつ早く医者に見せて！
あ……後、そいつ男だからね＜
「……そう、分かった。ありがとう」

ルリコは鞄を下げ安全靴を履き、子供を抱き上げた。気を失っている為、かなり重い。日々の筋トレがここでも役に立った。
＞おっと！待って姐御！＜
傷イルカがパルス――言葉を送ってきた。
＞オレは海神ニエルドの血族セタ。困った時は力になるから呼んでくれよ！＜
「分かった。頼るぜセタ」
＞おうよ！行くぜ野郎どもッ！＜
傷だらけのイルカ――セタは五匹のイルカと共に海中へ消えた。
「……さて、気張って階段昇るか」
ルリコは四十段程の階段に、気合いを入れなおし、手袋を脱ぎ捨てた。
宿屋で久しぶりに風呂に入りたい。そう思いながら。

十話・人間やめました（後書き）

風呂こそ、命の洗濯だと勝手に思っています。

十一話・アジアっぽい島で（前書き）

島に着きました。暫くは島での生活が続きます。

十一話・アジアっぽい島で

助けた子供を背負ったルリコは、ようやく四十三段の石段を登り終えた。息を整えながら前方を見ると、まばらな竹林の向こうに建物が見える。沖縄の家を思わせる長い瓦の平屋と、先程灯りが見えた、飾り窓が印象的な二階建の家屋。

「うわ、水溜まりデカッ！ちっと遠いけど平屋に行くしかねぇな…」

ルリコは子供を抱え直すと、平屋に向かって身長に歩き出した。歩いてゆくと、雨が降りだしたのでペースを上げる。軒下に着くと同時に、雨はバケツをひっくり返した様に勢いを増した。

「ぎ、ギリギリ……」

ふう、とルリコは息を吐くと、目の前の扉が開いた。

「あ～、また降ってきた！」

赤い簪を差し、作務衣に似た服を来た焦げ茶色の髪の女性は、軒下にいたルリコと子供を見て軽く飛び上がった。

「やだ！お客さん達びしょびしょじゃない！入って入って！」

女性は驚く程の早さでルリコの背後に回り、背中を押して平屋に突っ込んだ。ルリコがあまりの素早さに呆然としていると、籐に似た寝椅子を引きずり、布をばさばさとかける。　玄関は広く、四角い青竹に似た色の石が敷き詰めてあり、右手には複雑な木目の長い机がある。机の後ろは竹模様の布で仕切られていた。

「おぶった子置いて！」

「は、はあ」

ルリコはゆっくりと子供を寝椅子に寝かせると、乾いた布を大量に渡された。タオルほどの厚みは無いが、そこそこ厚い。

子供の顔や髪を拭いていると、頭に厚い布を被せられた。

「わ！」

「この子はアタシがやってあげるから、自分拭いて！風邪引いちゃうわ！」

女性は奥に引っ込み、直ぐに布を抱えて来た。手早く顔を拭いていると額に手を乗せ、顔を曇らせる。
「――熱がある！雨が止んだら医者呼ばなきゃ！部屋の希望はある？ああ、ようこそ！“青竹亭（あおたけてい）”へ！」
いきなり営業スマイルをした女性に、ルリコは戸惑った。しかし宿屋らしいので都合が良い。きっと風呂に入れる。
「え、えーと、希望は特にないです。後、着替えも貸して貰えませんか」
「もー、お客さんたら敬語なんか使っちゃって～……ん？」
何事も敬語を使ってしまうのは日本人の悲しい性（さが）だ、とルリコが思うと、女性は申し訳なさそうにルリコを見つめている。流石のルリコもちょっとたじろいだ。
「お客さん、随分軽装ね？……こんなこと聞くの失礼だけど、お金はある？無いなら従業員室に運ぶけど？」
「お金は大丈夫で……大丈夫。びしょ濡れだけど」
「いきなり聞いてごめんなさいね。じゃ客室に案内するから、ちょっと待って」
女性は作務衣の袂から車輪三つを取り出した。車輪は中央に穴が空き、突起物が着いている。
「よっ！」
女性は勢い良く寝椅子を持ち上げ、車輪を突き刺した。続いて前方、反対側二ヶ所に車輪を突き刺し、寝椅子の頭部分を持つ。
「二の間に案内するわ。ついて来てね！」
車輪を装着した寝椅子をゴロゴロと押しながら、廊下を進む女性に、髪を拭きながらルリコは続いた。
様々な小石が敷き詰められた廊下を歩くと、女性が停まって引き戸を開け、寝椅子を部屋に押し込んだ。ルリコが続いて部屋に入ろうとすると、引き戸の中央に二つの青い金属片が打ち付けてあるのが見えた。
部屋は十畳程で、左右に棚が打ち付けてあり、ベッドが二つ。ベ

ッドのフレームは竹で出来ている様だ。二つのベッドの間に細長いテーブルがあり、椅子が二つと硝子細工の水差しとコップがあった。カーテンと敷物が青竹色で統一され、涼やかな印象を与える。入って直ぐ右手には、紙を張った竹の衝立てと焦げ茶色のキャビネットがあり、上には白い細身の花瓶に桃色の花が二輪、活けてあった。

アジア風の部屋にルリコが見とれていると、ぼふ、と音がした。女性は子供をベッドに乗せ、布団をかけてやっていた。

「言った通り、雨止むまで医者は呼べないわ。でも二時(ふたとき)もすれば止むから安心して。じゃ着替え持ってくるわね」

女性は布団をぽんぽん、と叩いた後、寝椅子を押し素早く部屋を出ていった。ルリコは水差しを持ちコップに注ぐと、子供に近寄った。片手で子供の半身を起こし、半開きの口元にコップを当てる。

「飲めるかな……」

子供の口に少しずつ水を流し込むと反射行動か、細い喉がこくり、と動く。ルリコは喉の動きを確認しつつ一定感覚で水を流し込み、コップ一杯分飲ませると布で軽く口元を拭ってやる。汗で湿った額も拭うと、髪の色が銀色なのに今更気付いた。

男、とイルカ――セタが言っていたが、柔らかな頬と長めの髪、長い睫毛は少女めいていた。ルリコはぽりぽりと頬を掻く。

「――ふぅ、アイを看病した事が役に立ったな」

ルリコが呟くのと同時に、扉が四回叩かれた。

「どうぞ」

ルリコがコップを置き返事をすると、先程の女性が服を抱えて入ってきた。

「上着と下履きは持ってきたけど、下着は新しいのがなかったの。だからタダでいいわ。アタシのお古だし」

女性は申し訳なさそうに言うと、ルリコに服を押し付け、子供が寝ている布団を捲った。　ルリコは少し慌てて女性に言い返した。

「あたしがやる！」

「遠慮しない！早く着替えなさいよ、衝立て二つあるからね」

女性は慣れた手つきで子供のボタンを外してゆく。
（しかたねぇ、プライバシーの保護だ！）
ルリコは力ずくで女性の手を止めた。ルリコの力の強さが意外だったのか、女性は驚いた顔をしていた。
「えー、言いにくいんだけど……この子、男の子なんだ。かなりの照れ屋だから裸見られた、とか分かっちゃうと、あたしに殴りかかってくるかも」
ルリコが手を話すと、女性が目を見開き子供を見つめて。とっさに付いた嘘だが“言わなきゃ良くね？”等の反論はない。確実に女の子と思っていた様だ。
「へー……こんなにカワイイのに。神様が性別、間違ったのかもね……」
「本人の前では言うなよ。怒るから」
ルリコが肩をすくめると、女性は濡れた布を回収していった。
「それじゃ着替えは任せるね。そこの竹籠に濡れた服入れとけば、業者に洗濯してもらうわ。もちろん別料金だけど。時間を開けたらまた来るね！…アタシの名前はイロよ」
「わかった」
イロは両方に布を抱えたまま、器用に扉を開け閉めしていった。
「よーし、着替えるか」
ルリコは鞄を外し、勢い良く制服の上着を脱ぎ捨て、竹籠の中に入れた。びちゃっと湿った音がする。ロングスカートも脱ごうとしたが、下着を履いていなかった事に気付き、止めた。布団に置いた子供のものらしい服を広げ、服を脱がせ始めた。薄く肋骨が浮き熱で火照った肌に、何故か背徳感を感じる。
「考えてみれば、イルカの言うことだしな。間違ってるかも！」
前向きに考え直し、まだ濡れていた服を剥ぎ取った。

子供は少年だった。イルカの言う通り。

作務衣とズボンを履かせたルリコは、少年の顔の汗を拭った。
少年は桃色で赤い小花の刺繍が入った作務衣上下。どう見ても女物。
ルリコは青のムラ染で袖丈が長めの作務衣に、白く透ける帯、花柄の巻きスカートを着用している。この形態は二部式浴衣に似ている。当然、下着は新しいのを履いた。水分と塩分を含んだ髪を、白いヘアクリップで纏めアップにしている。部屋に大きい鏡があって良かった、とルリコは満足気だった。
髪がボロボロなのは、今は気付かなかった事にする。
扉が四回叩かれたので、ルリコは「はーい」と返事をした。
「失礼しまーす。ちょっと小降りになってきたからウチの従業員向かわせたわ。多分一人くらい手空いてると思うし」
先程の女性――イロは厚い冊子を抱えながら言った。腰にベルトを付け、細長い棒が出ている。筆記具の様だ。イロはテーブルに冊子を置き、椅子を引き出して言った。
「そのままでいいわ、宿帳に書くだけだから。お客さんの名前は？」
「ルリコ。ルリコ・ディープシー」
少年の汗を拭きながら答えつつ、ルリコは安心していた。
（顔を見られないなら、声だけ動揺しないようにするだけだ。…ああ、また嘘付きに……）
「――ルリコさんね。弟さんの名前は？」
ぴくり、と一瞬手が止まった。
（そうだ！どーしよ！？適当に付けて変な名前だったら可哀想だし！絶対名前ある筈だし！……うーん、仕方ねぇ）
「名前は、カイリ。厳密には従弟なんだけど」
一瞬考えた末、自分の従弟の名前を使う事にした。意識的に呼びやすいからでもある。
「はい、ルリコさんとカイリ君ね。宿泊日数は、とりあえずどの位

？延長もできるけど」
「えー、一週間で」
「一週間――、十日ね」
（十日！？）
ルリコは一週間が十日と言う事にかなり驚いたが、態度には表さなかった。
「じゃ、メルジフォス島の巨大蓮を見にきたのね！海竜船にも乗れるし。小さい子は、海竜好きだからね～。群島諸国でもこの辺しか乗れないし！」
「――ま、そんな所かな」
勘違いしている事を幸運に思いながら、話を合わせた。ちらり、と入口近くにかかった白い蓮の絵の紙を見る。ポスターだとは気付かなかった。。
「カイリ君良くなったら言って！海竜船の切符はここでも買えるから。すぐには取れないかもだけど」
イロは宿の事を売り込みながら、宿帳に書いているのだろう。カリカリと音が聞こえる。
「えー、それじゃあ二の間に十日で……一万二千になりまーす！群島共通通貨でだけど、持ってる？今じゃなくても良いけど」
「いや、大丈夫」
ルリコは振り向くと、鞄を取り出してこっそりと半開きの湿った財布を開けた。中が水分でびちゃびちゃだった。二十枚ある紙幣から二枚取り出し、ちらりと柄を見る。縦棒一本に二重丸二つに青い鳥の印刷。あのツリ目――イオシフから丸がゼロにあたる、とルリコは学習していた。
「じゃ、これで。濡れてるけど」
「はいはーい。乾かせば済むからイイわ。じゃ八千のお釣りね」
イロはベルトに付けた布袋を漁る。ルリコはある事に気付き、イロに付け加えた。
「二千分は崩して」

「……ルリコさん、しっかりしてるわね。あるかなー？」
イロは布袋をひとしきり探った後、「あった」と残念そうに言った。
「いち、にー、さん、し、はい、八千のお返し」
イロは紙幣二枚と、大きさが違う硬貨を十枚渡した。
（おー……硬貨はこんなのか。穴開いてるのもある。日本的で安心するー）
硬貨を眺めた後、財布にしまった。すると、イロが入ってきた時と同じく扉が四回叩かれる。イロがちらり、と視線を寄越したので、ルリコは少年の布団を整えた。
「どうぞー」
ルリコが声をかけると、そばかすの青年と、黒い鞄を持ったメガネのひょろ長い男が入ってきた。
「イロさん、医者呼んできましたよ」
「ありがと。タネク」
イロがそばかすの少年に礼を言うと、ルリコは席を立ち端に寄り、医者に頭を下げた。
「患者はそこの子か」
「はい」
「お願いします」
イロとルリコが口々に言うと、医者はツカツカと少年が寝たベッドに近寄り、鞄を下ろし椅子に座った。額に手を当てたり瞼を開けたりしていると、イロとそばかすの青年は静かに部屋を出ていった。ルリコは二人に向かい、軽く頭を下げた。
診察中の医者を見ると、耳の後ろを触り口の中を見た後、手首を取り脈を計っている。
（あまりやり方はあっちと変わんねぇなー。ま医療ってのは、何よりも先に進歩しないとダメだけどな）
ルリコが診察の様子を見ていると、脈を測っていた医者はちらり、とルリコを見た。

「熱を出した理由は？」
（――この人、嘘見破りそ……メガネ光りそうだしよ）
医者を“注意人物”と認識したルリコは目を伏せ、躊躇いがちに話し出した。嘘がバレないよう、必死に演技をしながら。
（バレたら“男児誘拐罪”とかになって前科者になっちまう。異世界に来て犯罪者にはなりたくねー……詐欺罪は認めるけど）
「……港を歩いていたら、カイリ――この子です、踏み外して海に落ちてしまって……。わたしも急いで飛び込んだのですが、潮に流されてしまって、カイリを抱えて何とかこの島まで泳ぎました」
不安そうに見える様、ルリコは胸元を掴んだ。医者は驚き、振り返ってルリコを見る。
「君まで落ちたのか」
「――平気です。それより、カイリはどうですか！？」
（これ以上突っ込まれたらマジ困る！早く、早く結果を！）
ルリコは祈る様な気持ちで医者を見た。

十二話・風呂に入らせてくれ

医者は少年――カイリの額にもう1度手を置いて言った。
「そうか……まあ、体が冷えただけの風邪だな。三日程寝込めば治る。咳もしてないしだるさが残るだけだ」
医者は鞄をテーブルの上に置き、中身を広げ始めた。
「朝に解熱剤、頭痛の鎮痛剤、胃薬と……熱が下がったら栄養剤も二倍に薄めて飲ませて、咳が出るなら咳止めを飲ませること。薬は水に混ぜて飲ませてもいい。解熱剤は熱が下がったら飲ませないで」
医者は種類ごとに分けたのか、幾つもの薬を順々に机に置いた。薬は色違いの薄い紙で包まれており、文字が読めないルリコは必で薬の順番を覚えた。栄養剤は茶色のビンに入っているのでわかりやすい。
「飲み物も栄養価の高いものがよいな。ハルモモサンゴの果実水がいい。この宿屋の下が料理屋だから手配して貰える」
医者は一通り言い終わると、じっとルリコを見た。
「君も海に落ちたんだよね。平気？」
ルリコは両手を横に振った。
「わたしは平気です！割と鍛えてるので」
（なんせ人間辞めちったからな……）
心の中でルリコは自嘲した。しかし、医者は怪訝そうに顎に指を当てる。
「今は緊張状態にあるから、疲労に気付かないのかもしれない――君の分の薬も出しておこう」
「……ありがとうございます。後、消毒液も貰えませんか？」
「消毒液？怪我をしてるのか？」
医者は眼鏡を少し光らせた。ルリコは慌てて言い返す。
「いえ、ピアスの消毒をしたいので……」
ルリコは今まで、何日経過したかいまいち不明だが、ピアスをお

湯で拭く位しかしなかった。向こうの世界にいた時は消毒液をつけたコットンで、使ったピアスを消毒していた。ピアスホールも洗ってない。
「そうか。ならついでにピアスホールも洗浄してあげよう。薬用の石鹸もあるし」
医者はすたすたと歩き、部屋から顔を出し「湯持って来い！」と大声で言った後、ルリコの目の前に来た。
「さ、じゃあ隣のベッドに横、いや仰向けになって」
「だ、大丈夫ですが……」
「医者の言う事は聞くものだよ。さあ」
ルリコは医者にじりじりと後退させられ、仕方なくベッドに仰向けになった。ヘアクリップが痛いので外すと、髪がさらりと広がる。
「ちょっと興奮するね～」
医者は鞄からビンと金属の箱を取出しながら、小声で呟いた。
（聞こえてるぞエロ医者ァァァ！）
ルリコが心の中で怒鳴ると、四回ノックの後「お湯持ってきました～」とイロが入って来た。
「ああ、テーブルの上に置いて。手拭きも使わせてもらうよ」
イロはベッドに仰向けになったルリコを見目を瞬かせたが、静かに退室していった。
「先ずは右からだね」
医者は嬉々として、金属の箱から出した薬用石鹸をお湯で泡立て、ルリコの耳を洗う。
他人に耳を撫で回される感覚に、ルリコは身を堅くした。
（なんか……いたたまれねぇ……微妙に、恥ずいし。うっ！ね、熱心に拭うなァァァ！）
ルリコは背中に変な汗をかきながらも、敵グループの頭と一人で対峙した時を思い出しながら、医者の仕打ちに耐えた。
「――よし、次は反対」
医者はお湯に浸した手拭きでルリコの右耳を丹念に拭いた後、身

を乗り出し左側に取り掛かった。少々形状の違う白衣から消毒液の香りがした。
「はい終わり。起き上がって良いよ」
左耳も拭い終えた医者は、桶に手拭きを戻しながら言った。ルリコは疲労感を感じながらゆっくりと起き上がり、手早く髪を纏めた。
「君は東の方から来たの？」
ルリコは耳に触れないように、少し口を尖らせて医者を見た。
「この辺は気温が高くて雨が多いから、ピアスしてる人少ないんだよ。土地柄、膿み性の人が多いのか無理に開けると膿んだりするし。南でもするけど、既婚者か婚約中の人しかやらない。君の様な若い子がピアスしてるのは珍しくてね」
「……まあ、そんな所です」
医者は、少年の額に置いたぬるんだ布を水で洗った。
「机にある青色のビンが消毒液。消毒する時には使う量に対し、二、三割の水で薄める事」
医者は少年の額に冷えた布を置くと、髪を掻き上げた。耳に三つ、銀色のピアスが見えた。
「じゃお代は――三千でいいや。おまけ」
ルリコはベッドから立ち上がり、鞄を開けた。“おまけ”部分は聞かない方が良いと思うので、無言のまま金を取り出す。
「では、これで」
「じゃ二千のお釣だね。そこの少年、咳やくしゃみが止まらない様なら診療所に連れておいで。誰かに聞けばすぐわかるから」
医者は後ろを向き言いながら立ち去った。
ルリコは置き去りにされた盥を片付けようと持つと、イロがノックもなしに入って来た。
「あ、お医者さんもう帰っちゃった？湿布貰おうと思ってたのにー」
ぶつぶつ文句を言いながらルリコから盥をひったくる。
「コレはアタシの仕事――あ、そうそう」
イロは片手で盥を抱えながら、緑の紐を付けた木の板を二つ渡し

た。木の板には文字の焼印と竹と花の絵が彫られている。
「下の坂少し下るとお風呂屋さんがあるの。白と橙色の屋根だからすぐわかるわ。この板見せれば、店開いてる限り無料で入れるのよ。はい」
ルリコは受け取った木の板を凝視した。
（風呂……！！）
まばたきもせず木の板を凝視するルリコを見て、イロは首を傾げた。
「えっと、ルリコさん、お風呂入りたい？」
「ものすんごく」
間髪入れず答えたルリコにイロは少し考えていた。
「ちょっと待ってて。手が空いている人探してくるから」
イロはそのまま盥を抱えながら出ていく。ルリコの頭の中は風呂の事でいっぱいだったが、それでも熱を出した少年の事は忘れていない。薬を混ぜた水を飲ませ、温くなった布を水で濯ぎながら、イロの事を静かに待つ。

暫く待っていると、四回ノックの後、イロと女性が入って来た。
軽く波打った焦げ茶の髪と、口元の黒子（ホクロ）が色っぽい。
「お待たせ！ウチの母さんが看病してくれるって！」
イロは隣の女性の肩を叩いた。若々しく、イロと並ぶと姉妹の様にも見える。
「ルリコさんね？私はこの店の経営者のキラよ。宜しくね。カイリ君は私が見てるからお風呂行っていいわよ」
イロのお母様――キラは寝込んだ少年の顔を見て、何故かとても喜んだ。
「あら、ほんとに可愛い！ねぇ、ルリコさん、汗かいたら剥いちゃっても良いかしら？」
キラは目を輝かせながら嬉しそうに言う。
「いや、それはちょっと」

ルリコが断ると、キラは頬に手を当て眉を寄せた。可愛い仕草だが、やはり色っぽい。
「おばさんでもダメ？」
ルリコはしつこく食い下がるキラの扱いに困った。
（……現代には子供にもプライバシーがあるのに、異世界はされるがまま、玩具（オモチャ）か……可哀想に。よし！）
ルリコは申し訳なさそうに見える様、眉を下げて愛想笑いを浮かべる。
「カイリは、隠そうとしてるけど、年上の女性が大好きなんで。イロやキラさんの様な美人に裸見られたと分かったら、あたしも口聞いてくれないかも。だから着替えはあたしか、男の方で」
必死で誤魔化すと、イロは「ん？」と顎に手を当てた。
「ルリコさんは平気なの？」
「あたしは小さい頃から、おしめ替えたりお風呂入れたりしてるんで」
（本当の従弟――沖縄在住の海吏（カイリ）にはそうしてたしな。小学生四年までは。この少年は見た目……中学生なりたて位だけど）
従弟のシャンプーに苦労した事を思い出しながら、ルリコは嘘をつく。
「あら……残念」
キラはため息を吐いて両肩を竦めた。
「そうそうルリコさん、着替え要る？イロとイラの着ない服沢山あるからルリコさんにあげるわ。勿論タダで」
「そーね。アタシも姉さんも古着屋に売れって散々言われてるし。好きなのあげるから持ってこよっか？」
「嬉しいけど……タダは申し訳ないので幾らかで買い取ります。気持ちなので。帰ってきたらお願いしますね」
「ルリコさんったらしっかりしてるわね……じゃカイリ君は任せてね」
「任せます。着替え以外」とルリコはしっかりと釘を刺し、荷物を

持って反対側のベッドの方へ向かった。壁に据え付けた棚に手早く荷物を広げ、必要な物だけを白いバックに入れる。バックはまだ湿っていたが、此方にはジップロックという文明の利器がある。ルリコは自分の運の良さに感謝した。

忘れずに木の板を掴み、お風呂セットを手早く用意したルリコはカイリを覗き込んでいるイロ母子に苦笑しながら言った。

「それじゃ宜しく」

「分かったわ」

「じゃね母さん」

キラが少年の顔を拭いているのを見ると、ルリコとイロは部屋の外へ出た。二人は並んで石造りの廊下を歩く。

「鍵はルリコさんが帰ってきてから渡すね。母さんが持ってるから。道案内する？」

イロの申し出にルリコは首を振る。

「大丈夫。覚えたから。後、ハルモモサンゴの果実水が欲しいんだけど」

「はーい！手配しとく」

「ありがと」

「それじゃ、いってらっしゃーい」

宿の出入り口から、イロに見送られルリコは風呂屋に向かった。

宿の竹やぶを抜けると、石畳の広い道に出る。少し下がった場所には平屋造り店が並んで建っていた。すぐ右側は行き止まりだったので左へ進むと、さらに広い道に出る。まだ曇っているが、雨が止んだのを確認したのか、様々な店舗から人が出てきていた。

ルリコはイロに言われた通り、緩やかな坂道を下る。下っている途中、正面に長い砂浜が見える。砂浜は長く、斜め左手に見える大きな島に繋がっていた。

「晴れたら写真撮りてぇな」

ルリコが呟きながら歩いていると、右の椿に似た木の横に白と橙色の瓦の建物が見えた。目の前に付き、入り口の前に立つと、一つ

問題が生じた。
藍色の暖簾がかかった入り口は二つあり、右には竹の絵、左には椿に似た絵が描かれており、絵の上には白抜き文字がある。
しかし、ルリコは文字が読めない。
（……あー、文字わかんね。普通に考えて、女は……花だよな？）
覚悟を決めて椿が描かれた暖簾を潜り、竹の戸を開けた。
開けた先には、お婆さんが二人、椅子に腰掛け茶を飲んでいた。頭に椿の布を付けたお婆さんが素早く、番台に飛び乗る。
「おや、いらっしゃい」
ルリコは軽く会釈し、イロから渡された木の板を出し、番台にいるお婆さんに見せた。
「コレで」
「はい、青竹亭さんね。戸を開けたら、同じ模様が入った列の棚を使って。体拭く布は、白い籠に入ってるから、使ったのは青い籠にね」
「はい」
ルリコはブーツを脱ぎ、置くところがなかったのでそのままにした。板張りの床を歩き、蓮の絵のポスターが張られた戸を開ける。
戸の向こうは、旅館の脱衣場そのままだった。但し照明は紙を張ったランプであり、壁に面した場所には大きな鏡と水道、手桶と水桶がある。見上げると、天井に所々採光窓があるが少々薄暗い。
（いけね、早く風呂入んないと少年が剥かれちまう）
誰もいない脱衣場を歩き、ルリコは竹と花の絵が描かれた棚を見つけ、荷物を置き服を脱いだ。脱ぎ終わったらジップロックに入れたお風呂セットを取出し、ガラスの引き戸を道場破りでもするかのように勢い良く開ける。
「うおおー！」
風呂は広く、二十人は入れそうな大きな石造りの浴槽があり、三つある小さめの浴槽にはピンクの花びら、オレンジに似た赤い果実、網に入った木片がそれぞれ浮いていた。上には大きな採光窓が有り、

椿の木が見える。所々にある緑色の紙を巻いたランプが幻想的だ。
（お～アジアンリゾートぽい。温泉じゃないけどタダで入り放題だもんな！有難う異世界！）　現金なルリコは、竹製のすのこが敷かれた床を歩き、一番手前にお風呂セットを広げた。
　蛇口をひねると水しか出なかったので、近くにあった手桶を取り、大きい浴槽から湯を掬い体を洗った。　隅々まで体を洗うと手桶を持ち、浴槽へ向かう。三回ほど体に湯をかけると手桶を置き、浴槽にゆっくり浸かった。
「あー……」
　深く息を吐きながら肩まで浸かると、ルリコの両目から涙が流れた。一切表情の変わらない男泣きだ。
　今度の涙は真珠にはならなかった。

十三話・少年達の野望と、人魚の意味

ある橙と白の屋根が特徴的な風呂屋“麻輪房拿（マリンボウダ）”の前で、二人の少年が立っていた。

「よしソロン！今日こそ、今日こそッ声をかけるぞ！」

「って言っても……早すぎじゃない？おばさんとおばあちゃんしかいないよ？」

薄茶の髪の少年――ソロンは、隣に立っている丸刈りの少年を半眼で見た。

「甘いなァソロン。さっき雨降っただろ？丁度風呂屋の前を通って、風呂に入った美女がいるッ！かもしれない」

「……まあいいけどさ」

この島、テキルダ島の風呂屋は四件あり、宿屋と契約を結んでいるのは三件。

“麻輪房拿（マリンボウダ）”

“寧日居（ネイビイ）”

“良群（リョウグン）”

以上が一部で有名なナンパスポットである。

名前は経営者が“わかりやすい”様、適当に付けたらしいので意味不明だ。風呂上がりなので食事に誘いやすく、気が合えば宿まで行き、そのまま“御馳走（いただきます）”になる事も多々ある、らしい。

それ故に、時間帯別に男の年代が分かれるという暗黙の了解がある。最も客足の多い夕方～日暮れにかけては、大体“怖いお兄さん”が占拠していて少年達が入れる隙がない。

お昼過ぎの今は“中高年”の時間帯だが、まだ少し早い。果敢な少年は一縷の希望を胸に、この時間に来た訳である。

「じゃ僕帰る」

「ソロン！おまえは戦友を見捨てるのか！？」

「だって、ミナスと違って熟女趣味じゃないし」
「誰が熟女趣味だ！」
「え、じゃ老女趣味？」
少年二人が言い争っていると、戸が開く音がし、椿の絵の暖簾が上がった。
反射的に二人は出てきた人物を凝視する。
おばさんでもおばあちゃんでもない。
若い女性だ。
手入れされた金髪は輝き、変わった髪留めで高い位置に纏め、僅かに水分を含んだ髪が一筋、項に張りついている。
白い肌は湯上がりの為うっすら上気し、伏せた目元が影を落とし、何とも艶かしい。
すらりとした長身に、青いこの国独特の服が似合っている。

ソロンが呆然としていると、勇敢かつ無謀にもミナスが声をかけた。
「あ、あっ、あのッ！お姉さん、よよ宜しければボクと一緒にお、お食事でもど
うですかッ！？」
女性はミナスをちらりと見た。黒真珠に似て不思議なツヤのある黒い瞳に、ソロンの顔が赤くなる。
「ガキはオヤツでも食って寝てろ」
女性はあっさりと言い、二人の間を抜け緩やかな坂を歩いていった。雨を浴びた花のような香りを残して。
「……惨敗だね」
ソロンがミナスの肩に手を置くと、振り返り唇を噛み締めた。
「惨敗じゃねぇ！オレ達の戦いはこれから始まるんだ！そうだろッ！？」
「僕も入ってる？」
「無論だ！戦友よ！」

ミナスの言葉に疲れを覚えながら、ソロンは金髪の女性の姿を思い出した。
「……今度会ったら僕も、声かけてみようかな」
ソロンが呟くと、ミナスは無駄に力強くばんばんと背中を叩いた。
「よし！遠慮なく当たって砕けろ！屍はオレが拾ってやる！」
「はいはい」
「ソロン、我が戦友よ。何か奢れ！」
「はいはい。それじゃ惨敗記念に、泣くほど激辛料理がいいね」
「正気か！？」
少年二人は楽しそうに、坂をゆっくり登っていった。

「お待たせしました！」
ルリコが“青竹亭”の二の間に戻ると、キラがびっくりしてルリコを見ていた。
「……ルリコさん、よね？」
「は？」
ルリコは着替えた服を無造作に籠に入れた。
「なんかルリコさん、お風呂屋行く前とは別人の様に光り輝いてるから……びっくりしちゃったわ」
「ああ！広いお風呂は久しぶりなんで」
（まあ、当然だろーな）
ルリコは内心、納得していた。
今まで海風に晒され水洗い続きの痛みまくった金髪は、迅速かつ丁寧なトリートメントの補修効果により、元の世界での輝きを取り戻していた。肌の方も、学校で友人に貰ったピーリング剤のおかげで段違いであろう。
風呂から上がると、番台にいたおばあさん達も皺に隠れた目を見開き『秘訣を教えろ小娘ェ！』とルリコに詰め寄っていた。

（現代科学はすげえなぁ……早く戻りてェよ）
ルリコはお風呂セットを棚に置くと、少年のベッドに戻りキラに礼を言った。
「キラさん、ありがとう」
「いいのよ～。お仕事だから気にしないで。あ、ハルモモサンゴの果実水はコレだから。沢山飲ませてあげてね」
キラは微笑みながら、太い竹筒を叩いた。油紙と桃色の紐で蓋をしてある。
「お代は洗濯物と一緒で明日でいいわ。何かあったら呼んでね。あと、コレが鍵だから無くさないでね」
ルリコはキラから緑の紐が通された金属の板を受け取った。複雑に穴が空き、何か文字が入っている。多分、部屋番号だろう。
鍵を見ている間にキラは籠に入った洗濯物を袂から出した麻布に入れ、「じゃあね」と微笑みながら部屋を出ていった。
荷物を置いたルリコは蓋を開けた果実水を竹のコップ流し入れてみる。ほぼ無色で無臭だ。
「味、気になるな。風呂屋で果実水買ったけど、もらお」
ルリコは一口飲むと、首を傾げた。
「……うっっっすいスポーツドリンクみたいな、酸っぱ甘しょっぱい。熱にはいいのかも」
毒味終了！と呟き、少年に薬を混ぜた果実水を飲ます。飲まし終えると口元を布で拭き、ぬるんだ額の布を替える。ふと窓を見ると、竹林の向こうに太陽が雲間から輝いていた。
「ん？」
雲は散り散りになり、眩しい太陽は遠慮なく太陽光線を放っている。
「……昼、だな」
ルリコが制服に着替え甲板にいたのが昼。
今、も昼。

「うぇ、一日経ってたのか……」
認識すると、猛烈な眠気と疲れがルリコを襲う。
「ね、眠みぃ！ダりぃ！あたしも寝る……」
ルリコはふらふらしたまま内鍵をかけ、自分のベッドに倒れ気絶する様に眠りに落ちた。

「んー……」
ルリコがベッドから起き上がると、辺りは暗くなっていた。真っ暗なまま棚まで歩き、ライターを取り出すと手探りでランプに火を付ける。ランプに紙製のシェードを被せると、部屋が一気に明るくなった。
キャビネットの上には、トレイに入った火打ち石とガラスの器に入ったお香と、小さい穴が空いたお香用の長い皿があった。
「お香に火をつけてから、ランプをつけるのか。サービスいいなぁ。結構上の宿屋なのかも」
ルリコはライターでお香に火を付け、あと二ヶ所にあるランプに火を灯す。灯し終ると少年の様子を見た。
相変わらず顔は赤いが、ルリコが額を触ると大分下がったようであった。
「薬が効いたかな。良かったヤブ医者じゃなくて」
ルリコは失礼な事を言いながら、額に乗せていた布を盥に入れ水を替えに部屋を出た。

少年が物音で目を開けると、ルリコは首の汗を拭っていた。額に置いた布も取る。
「目、覚めた？でも熱あるからまだ寝てな。あ、喉乾いた？トイレ？」
少年は薄く開いた青緑の目で、水差しを見た。ルリコは瞬時に理

解し、竹筒の果実水をコップに注ぐ。
「熱ある人はこっち。ゆっくり飲みな」
少年はゆっくり半身を起こし、受け取った果実水を飲み始めた。飲み終えるとルリコにコップを渡し、うつろな目でルリコをじっと見る。
「？……あたしが気になんのか？熱下がったら教えるよ。色々。だから今は寝な」
ルリコが少年をベッドに倒し、布団を整えると少年は瞼を閉じた。寝息が聞こえ始めるのを確認すると、額に布を載せる。
「これで少年は一安心、かな。しっかし、腹減ったな……何か買いに行こ。まだ営業中か？」
ルリコは腹を軽く擦りながら財布代わりのポーチに硬貨と紙幣を入れ、鍵を持ち静かに部屋を出た。

ロビーに着くと、イロがソロバンに似たもので熱心に計算をしていた。ルリコに気付くと、ぱっと顔を上げる。
「ルリコさん！カイリ君大丈夫？」
「大分良くなったよ。一度起きたし。そうだ、料理屋ってすぐ下だっけ？」
「うん、そーよ。“緑竹（りょくたけ）”って言う店。アタシの父さんと姉夫婦がやってるわ。ここなら出前もするよ」
イロは近くの棚から一枚の紙を出した。
「今の季節はコレ。国の名物は上から七つね、選べないけど果実水一杯付くわよ。甘味もいる？」
イロは更にもう一枚紙を出してきたが、ルリコは困っていた。
（何度見ても、読めねェ……でも奇抜な料理出てこねぇよな。名物だし。適当でいいや、そんな好き嫌いねぇし）
ルリコは一番上の名物料理と、別紙の甘味の真ん中を差した。
「じゃコレと、コレで」
「わかった！すぐ持ってくから部屋でカイリ君見ててね」

イロは奥に引っ込むと、ルリコも部屋に戻った。
（ちょっと夜歩きたかったけどな。ま、少年が心配だから構わねェけど）

ルリコが頼んだ名物料理は真っ赤な激辛カレーうどんだった為、食べきるのに非常に苦労した。
デザートは練乳のかかったフルーツゼリーで、カレーうどんで痛めた喉に優しかった。
値段は全て合わせて五百九十。
参考までに、風呂屋で買った果実水は、コップ一杯五十。
価値は今だに良く分からない。

部屋から出て、イロに言われた通り部屋の前に置かれた木のワゴンに食器を置いていると、キラが歩いてきた。
「あら、ルリコさんあの辛いの食べたの！？ヒリヒリしない？」
「――なんとか」
（辛いのは嫌いじゃねェけど……辛かったぜ。と言うか地元民にも辛いのかよ……）
ルリコは無意識に少々腫れた唇を指でさすった。
「そうそう。うちの宿、朝ごはん出してるんだけど、好き嫌いない？カイリ君一度起きたって聞いたけど、ご飯食べれそう？お粥は用意できるわ」
「あたしは好き嫌いないです。大抵のものは。カイリは……一応お粥を。治ってから嫌いなもの伝えますよ」
内心の動揺を悟られないよう上手く誤魔化しながら微笑む。
「わかったわ。朝ごはんは棚にあった青い札をかけておけばすぐ用意するからね。おやすみなさい」
「あ、えっとキラさん。一つ聞きたいんですけど、このあたりで“

人魚”って悪口なんですか？」
　ルリコの言葉にキラは少し下を向き、目だけをルリコに向けた。ランプの加減で目だけが異様に光り輝き、怖い。
「言われたの？」
「あ……、はい。二人ほどに」
「そう。言った人は絶対に、許しちゃダメよ。特に、相手が男なら――股間蹴られたって文句は言えないわ。“人魚”の意味はね、“性悪女”だから」
「性悪女……」
（よし、老い先短いヴィクトル爺はともかく、あのツリ目許さねぇ！）
「良く、分かりました。次に会ったら蹴り飛ばしておきますね」
「容赦なんてしなくていいのよ？このあたりでは女性に対する、最大級の侮辱だから」
「はい」
　ルリコとキラは凄絶に笑い合い、それぞれ静かに歩いていった。

十四話・イトコごっこ

翌日、早朝からおばあさん達に混じってひとっ風呂浴びたルリコは、部屋のベッドで唸っていた。

「えー、地図と合わせて……文字の形が一緒だから」

風呂屋に観光案内だと思われる紙がいくつかあったので、何枚か持ってきて地理と文字の勉強をしていた。

「今いる所が西の国、あ王国だっけな。大きい文字の島がこの隣だな、砂地で続いてるし……今更だけどすっげえ流されたな。あたしも少年も良く生きてたよ……」

ルリコは地図のほぼ中央にあった島をちらりと見てから起き上がり、地図と案内の紙をまとめて棚に置いた。

衝立の向こう、少年の様子を見ると、今起きたのか布団から起き上がろうとしていた。ルリコは近寄り、少年の額に手を当てる。

「うん、大分下がったな。でも今日位は寝てな。喉痛かったり、咳は出ない？起き抜けだから水分取るか？」

言いながら水に栄養剤を混ぜて少年に手渡すと、少年は少し戸惑いながらも水を飲み干した。ルリコは少年からコップを受け取ると、少年を見つめ話しかけた。

「少年、あたしが昨日言ったことを覚えてっか？」

少年が頷くと、ルリコはテーブルにコップを置き、足を組んだ。

「まずは少年の名前を伺う所なんだが、色々あって勝手に名付けさせて貰ったよ。少年、君の名前は“カイリ”。申し訳ねェが、この島にいる時は“カイリ”で過ごしてくれ」

ルリコは右手で自分を指しながら微笑む。

「あたしの名前は“ルリコ”。ぶっちゃけ偽名だけど、少年をどうにかしようとか全く思ってないから安心しな。宿屋取った時に“従（い）（とこ）

姉弟”って言ったから」
　足を戻しルリコは少年――カイリに近づくと、口を開けさせ喉の奥を見たり、耳の下から首をを触ったりした。
「体温高くないし、扁桃腺も腫れてないし、リンパ腺もフツーだな。解熱剤は要らん、と。少年、もとい、カイリ。ご飯食べれる？カイリのはお粥だけど」
　カイリはされるがままだったが、ルリコの手が離れると顔をぶんぶん縦に振った。
「よーし、じゃ朝食にすっか。あとカイリ、トイレは部屋出て左進んで、途中のガラスの扉の先だけど行けるか？」

　カイリは顔を赤くしながら、ルリコにトイレを付き添って貰った。

　ドアが四回、一定感覚でノックされる。もはや反射でルリコは返事をした。
「どぞー」
「おはようございまーす！朝食ですよー！」
　イロが元気良く入ってくると、きっちりワゴンを置いてからカイリに抱きついた。
「カイリ君起きたのね！良かったー！」
　イロは遠慮なくカイリをぎゅうぎゅうと抱きしめる。カイリは顔を赤くして抵抗しようとするが、どうしたらいいのか分からないのか、シーツを握りしめルリコに縋る様な視線を向けている。
（思った以上に純情少年だ……色々触っちまえばいいのに。従弟はそうしてたしな。でも年上好きは丁度イイか。“思春期《難しいお年頃》”という言葉で誤魔化せる）
　ルリコはイロが放棄した朝食の用意を手早くこなしながら、“年上の女性に好ィいようにされる少年”を生ぬるく見つめた。イロは満

足したのかカイリを胸から離すと、朝食の用意をするルリコに驚き、素早く近寄る。
「やだごめんなさい！すぐやるわ」
イロはルリコの手からおたまをひったくり、スープを器に盛り始めた。
「あとルリコさん、洗濯物届いてるから後で取りに着てね。古着もその時持ってくるわ、カイリ君の分も含めてね」
カイリがテーブルに歩いてくると、小鍋をワゴンに戻しながらイロはカイリの髪を撫でた。
「カイリ君もいいわねー。美人のお姉さんと一緒に旅行なんて」
カイリは髪を撫で回され、少し戸惑っている。ルリコはテーブルに置かれた薄いオレンジの果実水を注ぎながら呟いた。
「美人は言いすぎ。カイリとはそんなに年変わんないけど。あたしだってまだ十六だし」
「「え！？」」
「……なにカイリまで驚いてんの」
ルリコは呆然とするカイリに口元を引きつらせた。イロまでおろおろしている。
「アタシてっきり二十くらいだと思って……」
「――まあ、慣れてるから気にしないよ」
ルリコは百七十センチ近い長身で、長い髪を金に脱色し、ヤンキー特訓故に落ち着いている為、元の世界でも年上に見られていた。
「ところでイロ、牛乳ない？」
「牛乳？」
ルリコは昨日のデザートに練乳が使ってあった為、牛乳があるか聞いてみた。高身長は牛乳のおかげ、とルリコは勝手に思っている。
「ちょっと下の島で牛飼って乳製品作ってるけど、最近暑くなって来たし、加工前のものはウチでは難しいわね」
「うー、そっかぁ」
「練乳溶かして飲む？」

「それはイヤ……」
ルリコはげんなりした表情で首を振った。
「じゃ、食べおわったらワゴンに置いて洗濯物取りに来てね」
イロはワゴンを押しながら、軽快に部屋を出ていった。

「さて、カイリ」
ルリコは注いだ果実水をカイリに渡しながら言った。
「聞きたい事があるならどうぞ。あたしの答えられる範囲なら答えるよ」
小魚を箸で摘みながらルリコは言った。カイリは木の杓子を持ってじっとルリコを見ている。
（銀髪に青緑の目……本当に異世界カラーだよな。眉毛や睫毛まで銀色だし。向こうで脱色したら、髪というか毛根ごと死ぬな）
ルリコはカイリの視線を気にせず、小魚を咀嚼した。小さな卵が沢山入っていて美味しい。
「……ルリコに聞くが」
「お姉様でも構わないけど？」
ルリコの思わぬ反撃にカイリはぐっ、と息を詰まらせたが、果実水を一口飲み言い直した。
「ルリコはどうして、儂にここまでしてくれるのだ？」
カイリの言葉を聞きルリコは、二匹目の小魚をスープの中に落とした。
（わ、儂……。ずいぶん、ジジむせぇ言葉で話すな。いや、異世界だし民族的な問題かも。あたしも口悪いし。触れないでおこう）
スープから小魚を摘んでから、ルリコはカイリを見た。
「あたしは、この国で出会った人達に親切にしてもらったし、溺れてる子供を見捨てる程冷血人間じゃねェ。今は持ち合わせがかなりあるし、カイリの方も……まあ、何だか面倒な事になってたしね。本来なら海上警備団で保護して貰うのが妥当だけど、な」

「……すまぬ」
カイリは俯き今にも泣き出しそうだ。
「お粥食べながらでイイから。冷めると美味しくないよ」
ルリコが行儀悪く箸でお粥を指すと、カイリは俯きながらも杓子でお粥を少しずつ口に入れた。
「……それでルリコ、ここは何処なのだ？」
「オ・ル・マリーヴェスタ群島諸国連合の西、イスタヴェラ王国。一番大きい島、イスタンヴェストの隣の島、テキルダ島の宿屋“青竹亭”の二の間」
（よっし、完璧か？ちょっと間違って覚えてたからな……）
今いる部屋まできっちり言うと、カイリは杓子をくわえてお粥を見た。
「……群島、西か。そうか、わかった」
カイリはため息を付いてから、お粥を食べ始めた。
「ルリコはずっとこの島にいたのか？」
「違う。当面は観光目的って言っちまったし、カイリの具合が良くなったら近くのメルジフォス島に観光に行かなきゃならねェ。宿はそれまでしか取ってねぇし」
ルリコはサラダを咀嚼しながら言った。食事中にも関わらず、発音はしっかりしている。
「質問終わり？」
「い、いや、まだある。用事はないのか？この国にルリコは用事があるのではないのか？」
「用事、か……あるにはあるけど長期戦覚悟だし、この国で見つかるかもわからねぇ。あたしの事は気にすんな。カイリは、どこに行きたい？」
遠い目をして果実水を見るルリコを見、カイリは何故か不安に思った。
「……ルリコ、儂は取り敢えずメルジフォス島で構わん。そこに行けば知り合いも居る故、ルリコが儂の為に使った金も返せる。済ま

んが、その時まで待ってもらえぬか？」
カイリがそう言うと、ルリコはじろりとカイリを睨んだ。
「金は返さなくていい」
「し、しかし……」
「少年から金巻き上げる程不自由してねェよ。子供は遠慮すんな。甘えてろ」
ルリコは言い捨てると、野菜スープを飲み始めた。スープを飲むルリコを見て、カイリは不満そうに呟く。
「儂、もう七十七なのだが……」
その言葉を認識したルリコはスープを吹き出しそうになるが、根性で押し留めた。
「ななじゅう、なな……歳？」
「うむ」
ルリコは皺一つ無いカイリの顔を凝視した。顔も杓子を持つ手にも余計な皺が無い。
（えー、落ち着け。妹が言った通り異世界、何があってもおかしくない。年取る程若返る、そんな映画もあった！）
ルリコはひとしきり余計な事を考えて気持ちを落ち着かせた後、ふう、と息を吐いた。
「だったら尚更だ、喜寿のご老体。老後や孫の為にも金は残しておけよ」
「むっ、無闇に年寄り扱いするでない！儂はまだ若いぞ！それに未婚じゃ！」
「それなら未来の嫁との生活の為に残しとけ。はい、この話は終了ー」
「ルリコ！」
「カイリ？お姉様の言うことが聞けない？」
「……」
カイリはようやく黙り、頬を膨らませながらお粥を掻き混ぜた。子供が拗ねている動作そのものにルリコは苦笑する。

「あ、カイリ、頼みがある。あたし文字分からないから教えて欲しいんだけど」
「そうなのか？」
「そう。マジで困ってる。メニューも読めないし地図もわかんないし」
カイリは顎に手を当てて「ふむ」と聞き入っている。見た目が少年なので似合わない、とルリコは思った。
「それならば教えよう。群島連合の文字は少々厄介じゃからな」
「頼んだよご老体」
「ご老体言うな！見た目通りの立派な男性じゃ！」
（男性……？どうみても少年だよな？いや成人年齢が若い民族なのかも。異世界だし。それに男性って自称しても“お姉さん達の玩具（オモチャ）”になるのは間違いねェな。見た目変えねぇと）
ルリコは失礼な事を思いながら、頬杖をついてカイリを見る。じっと見られてカイリは動揺し、お粥をこぼした。
「立派な男性ねぇ……
ツルッツルなのに？」
カイリはお粥を派手に吹き出した。顔が真っ赤になり杓子をくわえて睨んでいる。
「……見たのか？」
「着替えの為。緊急措置だ。それとも、宿屋のお姉さん達に集団で剥かれる方がお好き？」
カイリは赤い顔のまま布巾を持ち、こぼしたお粥を拭いた。ルリコはため息を吐くと、海苔巻きを口に入れる。
「安心しな。あたしは年下好みじゃないし、着替えは四つ下の従弟で慣れてる」
“気にするな”といったのだが、カイリは依然顔を赤くし睨んでいる。
（反抗的だな……可愛くねぇ）
眉を顰めたルリコはデザートの、オレンジの様な果物とゼリーの

練乳がけをカイリの目の前に置いた。
「お粥食べたらコレやるから。病み上がりは食べたら薬飲んでさっさと寝な」
ルリコは朝食が来た時、カイリの視線がデザートに注がれていたのをしっかりと見ていた。カイリは物欲しそうにチラチラ見ながら「良いのか？」と小声で聞いてくる。
「ああ。昨日似たもの食べたしな」
食器を端に片付けると、ルリコは棚に行き財布を持った。
「あたしは洗濯物取りに行ってくるから。食べたら外に片付けろよ。薬各種はテーブルの上だから飲んどけ」
「承知しておる」
カイリはすごい早さでお粥を食べ終えると、目を輝かせてゼリーを食べている。
（デザートで誤魔化されるなんて子供（ガキ）だな）
ルリコはお粥の皿も持ち部屋を出て、外のワゴンに載せた後ロビーに向かった。

ロビーには焦げ茶色の髪を左で結んだ女性が布を畳んでいた。ルリコに気付くと、微笑む。営業スマイルだ。
「おはようございます。ルリコさんですね。私はイロの姉のイラです。どうぞ宜しく」
「こちらこそ。洗濯物と果実水のお金払いに来たんだけど」
「はい。では……合わせて四百になります」
ルリコがお金を払っていると、イラは籠に入った洗濯物を出し、更に中央に文字と花の入った紙袋を出してきた。
「こちらが古着です。カイリ君のは三着しか入ってませんが、ルリコさんのは十着程ありますので、気に入らないのは売って結構ですよ」
「ありがとう。お金は……」

「お気持ちで結構です」
ルリコは微笑を崩さないイラに困った。
（あんまり物価わかんねーけど……気持ちって一番困るって。昨日の意趣返しか？）
ルリコは財布から三千を出したが、イラは二千しか受け取らなかった。
「こちらで充分です。そのお金でカイリ君に何か買ってあげて下さい」
「――わかった」
ルリコは渋々お金を戻すと、閃いた。
（気持ちって事は、お金じゃなくてもイイんだよな？）
ルリコは愛想よく微笑むと、イラに話かけた。バイトで培った営業スマイルだ。
「少ししたら買い物に出かけるので、その時はカイリの着替えをお願いしても？」
茶色のイラの目が鋭い光を帯びた。
「宜しいのですか？」
「生意気だったのでお仕置きです」
イラが右拳を力強く握り締めたのをルリコは見逃さなかった。
（血の宿命とは怖ぇえな……あたしも妹や母に似ないようにしよ……）
「では、お出かけの際はこちらに一言」
「わかりました」
先程よりも愛想が増したイラに見送られ、ルリコは服と籠を抱えて部屋に向かった。

十五話・……いつもはいてるわけじゃない

ルリコが洗濯物を抱え部屋に入ると、哀れな生け贄――カイリは素直にベッドで寝ていた。薬も無くなっていたので飲んだらしい。

「……可哀相に」

ルリコはうっすら笑いながら呟くと、籠の中身を起き、紙袋の中身を出した。

「おっ、ピンクとか黄色とか入ってねぇ。青系が多いし。やっぱやるな……」

一番上にあった紺地に白と銀の刺繍が入った丈の長い服を手に取った。同色のズボンもある。

「……アオザイ、に似てるな。チャイナボタンはない。あ、帯たくさんあるけど、コレにつけんのか？着こなし方が分からねぇ！何故聞かないあたし！」

ぶつぶつ言いながらも手早く着替え、鏡を見ながら髪も結び直した。

「カイリの服は……なんか面白いな。海老柄の服なんて見たことねぇし。刺繍のパンダはヨダレ垂らしてるし。売ってる店が是非知りてぇな。他の服に興味がある」

ルリコは、背中にデカイ海老が描かれた服と、笹模様にヨダレを垂らしたパンダの刺繍の服に迷ったが、仮快気祝いという事で海老柄の服にした。着させる事に決めた海老柄の服をベッドの端に起き、他の服は棚に置く。ルリコ分の服も元通り紙袋に戻し、白いミニボストンに荷物をつめ直していると気付いた。

「カイリの下着も買ってやらないと……ハーフパンツみたいの履いてたけど、絶対この国はふんどしだよなぁ。探せばあっかな？」

早朝風呂屋に向かう途中、何故かふんどし一丁のおじさんの集団がいた。

ルリコは「変態か！？」とつい叫びそうになったが、どうやら普通の事らしい。おばさんやお姉さん達は普通に挨拶していたので、ルリコも見習い挨拶した。

必死で平静を保ちながら。

「祭り以外でふんどし一丁で自由に歩けるなんて……、なんて自由な世界だ……ますます帰りてぇよ」

ルリコは望郷の気持ちを募らせながら、携帯の電源を入れた。起動画面の後に時間に注目すると、五月十八日の午後五時前。感覚では、まだ午前九時前と思っている。

「この問題もあったんだっけな……一日携帯付けとけば時間のズレがわかっかな。持ってこ」

ルリコはミニボストンを持ち、寝ているカイリに近づいた。完璧に寝ているのを確認すると、携帯のカメラを構える。

カシャッ

「悪いな」

撮った画像を保存すると、鍵と空になった果実水の容器を抱えて部屋を出た。

ロビーに行くと、昨日のそばかすの青年がおじさんに洗濯物を渡していた。ルリコが順番を待っていると、気配が無かった背後から肩を捕まれた。

「のわ！」

驚いたルリコが振り向くと、キラとイロが笑顔で立っていた。背中に嫌な汗をかきながら、ルリコは口を開く。

「えっと……」

「ルリコさん出かけるのよね？」

キラが微笑みながら言う。
「は、はい」
「カイリ君着替えさせても良いのね？」
イロが嬉しそうに言う。
「えっと、そうですね」
ルリコがそう言うと、母子は同時に口の端を吊り上げた。
（これは、早まったかも――カイリには、甘いものお土産にしてあげよう）
ルリコが哀れな生け贄に軽く同情すると、イロが前掛けから地図を取り出した。
「コレが簡単な地図。服屋とか装飾品が売ってる通りしかないだけど」
イロから地図を受け取ったルリコは困った。
（ったって読めねぇよ！まー、誰かに聞くしかねぇか）
「化粧品売ってる所は？後、仕立て屋ってある？」
ルリコの問い掛けに、キラは地図を覗き込んだ。
「そうねー、レイストローム姉妹の店が良いわよ。この通り行って突き当たりで右。今なら門に赤い薔薇が咲いてるからすぐ分かるわ～」
キラから教わった店の場所を覚えていると、ルリコは気配を感じさせないイロに鍵を奪われた。
「じゃ行ってらっしゃい。カイリ君は任せて。宿帳には書いとくから大丈夫よー」
「爪先までぴっかぴかに磨くからね！」
（風呂にまで入れる気かよ！？）
ルリコは疑問を持ったが、何も言えず、二人に見送られ青竹亭を後にした。
坂を下り、教えて貰った通りに向かう。
道はなだらかな下り坂になっていて、隣の島が良く見える。今は

満潮なのか、隣の島に続く砂浜は見えなかった。
「下り坂にしてるのって津波対策か？竹のトンネルみたいの幾つかあるしな」
涼しげに日光を遮る竹のトンネルを通りながら、商店街に入った。
ルリコの感覚的にはまだ九時半前だが、商店街はかなり賑わっていた。リアカーを引いた商人がいたり、ツアーなのか旗を持った青年の後ろを中高年の集団が続いている。
「賑わってるな～」
呼び込みを器用に避けながら突き当たりに向かった。突き当たりの薔薇が絡まったの門を抜けると、二つ入り口がある。蔦に覆われた白い建物に右に赤い扉、左にオレンジの扉。どちらの店にも用事があるので、ルリコは何も考えず赤い扉に入った。
赤い薄布をくぐり抜けると、入ってすぐに黒い固まりがを確認すると、いきなり金色の目が二つ見えた。
「わー！？」
黒い塊はくるるーと小さく鳴きながら奥へ引っ込んだ。ルリコは黒い生き物を警戒しながらじりじりと奥へと進む。
「警戒しなくても平気よ。この子大人しいから」
店の奥にいたのは赤いベールをかぶった妖艶な女性だった。長い黒髪は毛先のみカールし、光の当たる部分は金色に見える。足元には、どうみても二メートルは超える黒豹が寝そべっている。機嫌が悪いのか尻尾をパタパタ振っていた。
（大人しくても、飼い……豹？は首輪くらい付けてくれよ）
切実にルリコは思った。
「ようこそ“紅真珠（ベニシンジュ）”へ。今日は何をお探し？」
「えーと、体を洗う石鹸と、髪用のト……手入れ油が欲しいのですが。椿油とか」
黒豹にビビッたルリコが言うと、赤いベールの女性は近づきルリコの髪を触った。ほんのりと薔薇の香がする。
「……何を使っているのかしら。髪の調子が随分良いわね。是非と

も、教えて欲しいわ」
ルリコは赤いベールの女性の迫力にたじろいだ。
（い、言えねぇ……トリートメントの材料なんか覚えて無ぇよ……）
「あ、あたしも詳しくは分からないので、今度にでも調べときます」
迫力に気圧され、ルリコは敬語で話ながら頷いた。
「――お願いね。石鹸は右の棚よ。特別に個別注文も出来るけど、三週間程かかるわ」
ルリコは女性の言葉に頷きながら棚を見た。様々な色の石鹸が並んでいる。ひとつはそのままで、後は文字の書かれた紙に入っている。
（石鹸のオーダーメイドか……三週間は三十日。すぐ帰れるわけないしアイへのお土産にするかな。後でメール送っとくか）
三つ程石鹸を選び終えると、赤いベールの女性は黄緑がかった液体の入った瓶を抱えていた。
「分量は、小さい瓶で良いかしら？香りはつける？」
「はい。香りはなくてよいです」
「わかったわ」
赤いベールの女性は複雑な切り込みの入った瓶に油をそそいでゆく。赤い紙で蓋をし、椿の花が描かれた布袋に入れた。紙で包まれた石鹸も、紐を通した赤い紙バックに入れてゆく。
「あなた、薔薇は好き？」
ルリコは財布を出そうとすると、赤いベールの女性に話し掛けられた。
（妹は好きだけどな……あたしも嫌いじゃねぇが）
「はい」
「そう。おまけとして薔薇の化粧水も入れておくわ」
赤いベールの女性は棚から薄赤い液体が入ったガラス瓶を紙バッグに入れた。
「あ、ありがとう」
「使ってるもの、教えてくれるんでしょう？」

「……はい」
ルリコは女性の要望に屈し、トリートメントの成分を調べる事に決めた。

「赤い扉が化粧品店だったから……オレンジの方が仕立て屋か。猛獣とかいないといいけど」
ルリコは赤い扉を出ると、オレンジの扉を開けた。薄いオレンジの布を潜ると、オレンジ色の、恐らくモルモット四匹が奥へと逃げた。
（まあ……黒豹よりは心臓に良いな）
「いらっしゃいませー！」
奥へと進むと、オレンジ――橙色のアオザイを着た女性が微笑んでいた。先程の女性と良く似ているが、部分的に金色に見える黒髪は肩迄だった。
何より妖艶さと胸が無い。
部屋の両脇に細い棚があり、全ての棚に様々な布がきっちり納まっていた。ちなみに前後面は無数の引き出しである。女性の前にあるテーブルの両脇には、戦士の墓場の様に定規と鋏が何本も刺さっていた。
「“橙珊瑚（ダイダイサンゴ）”へようこそー！本日は何をお仕立てましょうか？」
橙色のアオザイの女性は某女性芸人を思わせる高い声で、ルリコに営業スマイルを向ける。
「男の子用の、半ズボンに似た下着を作って欲しいのですが」
「はーい、北大陸方面の下着ですねー？このあたりじゃちょーっと暑いのでぇ、丈ちょっぴり短くしちゃいますね」
橙アオザイの女性は横長の引き出しから紙を取出し、何か書き始めた。
「色や柄の指定はありますかー？材質の指定も承りますー」
「えーと、指定は特にないです。肌触りと通気性の良いものであれ

ば。綿辺りの」
「はいー、何枚位お作り致しますかー？」
「七枚で」
「畏まりましたー」
恐ろしい程の早さで文字を書くと、机にあった橙色の板に画ビョウで紙を刺した。
（イロ達もそうだけど、この島の商売してる女の人って、やけに素早いよな……）
「以上で宜しいでしょうかー？」
ルリコが女性達の素早さに感心していると、橙アオザイの女性が営業スマイルを向けていた。
「あ、あと、もう一つ。女性用の下着ですが」

ルリコは風呂屋で気付いた。
この島の女性は、ふんどしを履くと。
未だに風呂屋で若い女性に会わないので分からないが、上はサラシかそのまま、下はふんどしかカボパン、たまにモモヒキが多い。
ルリコはカボパンはともかく、女子高校生として、ふんどしとモモヒキは是非とも遠慮したかった。

「この辺りでは、胸に下着はつけないんですか？」
「そうですねー、北大陸、もしくは南では綿製の胸当てを付けたりいたしますがー、群島連合では暑いので、気になる時に軽くサラシを巻く位ですねー」
（……ブラは諦めよう）
ルリコはため息を吐くと、ミニボストンを漁った。
「そうですか。実はコレと同じものを作って貰いたいのですが」
ルリコはボストンの中でジップロックを開け、目的のモノを取り出した。
取り出したのは、白いレースの紐パンツ。

「……この形状は、見たことないですねー」
橙アオザイの女性は、紐パンを手に取り、しげしげと見回した。ルリコですら、いくら綺麗に洗濯したと言っても自分の下着を見回されるのは気まずい。
「通気性は良いと思いますがー、面積が少ない上両端を紐で蝶結びとは少々、着用に不安が残りませんかー？」
（冷静に言われると……なんかハズいな……）
「それで、いや、それがイイんです。勝負下着ですから」
「勝負、ですかー？」
橙アオザイの女性は、二、三回瞬きしてルリコを見た。ルリコも多少、勇気の要る言葉なので一度目を伏せ、深呼吸してから言いだす。
「女性が男性と、負けられない勝負を仕掛ける時に付ける下着です」
「……あー、なるほど、よーくわかりました」

橙アオザイの女性は素早く棚から紙を取り出すと、先程を超える勢いで文字を書き始めた。今度は図入りで様々な矢印が描いてある。
「材質と色合いはどのようなものに致しますかー？」
「そうですね……まあお任せします。肌触りと通気性重視で。大体男は白い下着が好きですから、白も一枚お願いします」
「はーい、レースの方は使用致しますかー？輸入物になりますので、若干お値段の方上がってしまいますがー」
「必ず使わなくてもイイです。中心に何か、蝶結びの紐か何かで、前面だと分かるものがあれば」
「承りましたー。枚数の方は何枚程お作りしますかー？」
「七枚で。色やレース、紐の色や太さに変化を付けて下さい」
「畏まりましたー」
橙アオザイの女性は猛然と紙に文字を書いてゆく。
（意外と下着について語るのも悪い気分じゃねぇな……むしろ楽しいな。また新しい将来が開けるかも）

ルリコが進路の事に思いを馳せていると、橙アオザイの女性が書き終えた紙をじっと見た。
「お客様がご注文されましたモノでしたら、複雑ではないので明日昼にはご用意できますー」
「朝でも？」
「はーいご用意しておきます、料金も来店時にお願い致しますー。つきましては、お客様のお名前を頂戴しても宜しいでしょうかー？」
「えー、“ディープシー”で」
「はーい、ディープシー様で。此方が控えになりますので、来店時に必ずお持ち下さいませー」
橙アオザイの女性は橙色の紙に何行かを書くと紐パンと共にルリコに手渡した。
ルリコは瞬時にミニボストンの奥に下着をしまう。
「わかりました。お願いします」
「では、またのご来店をお待ちしておりまーす」
営業スマイルと高い声を聞きながら、ルリコは店を出た。

十五話・……いつもはいてるわけじゃない（後書き）

今の形になったのは割と最近ですよね。
持ってた理由については後々。

十六話・ヤツは変身も出来ました。

「これでよし。後、買うモノは……カイリの服は本人連れてきた時買うか。おやつと、大きいカバンとあたしの靴か。カイリの靴も買ってやりてェがサイズがな。店員に聞けば平気かな」

今後の目的をぶつぶつ呟きながら、ルリコは薔薇の門を通り抜けた。商店街の簪やアクセサリーを冷やかしながら、手持ちの金を考える。

（二人分って、結構物入りだよなぁ……やっぱ真珠換金すっかね）

簪を何本かと螺鈿細工の櫛を二つ買い、ルリコは簪を沢山つけた女性店員に屋台街の場所を聞く。場所を覚えると、哀れなカイリへのお土産を買いに向かった。

服や装飾品の商店街から少し坂を下り賭けのトンネルを通り、道なりに進むと煉瓦が敷き詰められた広場に出た。広場には所狭しと様々な屋台が並び、中央には大きな池があり、甲羅が金と銀の大きな亀が何匹も悠然と歩いている。

「おおー、携帯で撮りたいけど、ちっと難いな。デジカメありゃあ良かったけど」

ルリコは甘味の屋台を回ろうとしたが、いい香りに足が自然に向かう。

向かった先の屋台には、大きな貝柱やエビを竹串に刺して焼いていた。味付けは塩だけのようだが、そこに惹かれる。

「おっちゃん、貝柱一本お願い」

腹にサラシを巻いた（残念ながら下はふんどし）オッサンはルリコにニカッと笑いかけた。

「あいよ！若い姉ちゃんにはおまけしてやんよ！七十でいいよ！」

「ありがとおっちゃん」

お釣りを受け取りながら、オッサンから貝柱を受け取った。何と

なく海を間近に見たかったのでウロウロ歩いていると階段が見付かったので降りてみる。
降りると竹林の脇に石碑と崖があり、下に海が見える。崖まわりは金属製の丈夫な柵で囲われていた。
ルリコは柵に寄り掛かりながら貝柱を齧る。
「うめぇー、船じゃこんなの食べれなかったからな～」
貝柱を齧りながら下を見ると、二メートル程下にイルカが何匹か見える。ルリコは一つ食べきった後、串から貝柱を取り二つに割ってイルカに投げる。イルカは投げた貝柱に群がった。
＞姐御ー、オレ貝より肉がイイー＜
一際大きなイルカから声が聞こえ、ルリコは串を落としそうになった。柵の下に蹲ってじっくりイルカを見ると、一際大きなイルカには傷が沢山あった。
「おまえ……もしかして」
＞姐御ー、もう忘れちゃった！？＜
傷のあるイルカは激しくぐるぐる回った。
「あーっと、――セタだっけ？」
＞そう！姐御ッ、お肉食べたい！みんなの分もお願い！＜
イルカ達は無駄に跳ねたり、キュイキュイ鳴きせわしなく泳いでいる。
（声が聞こえんのに鳴き声も聞こえるって不思議だな。でもうるせー）
「まあ奢る位別にいいけど。助けて貰ったしな。何肉よ？」
＞オレ行くよ！選びたい！＜
セタは崖の下で楽しそうにキュイと鳴いた。ルリコはしゃがんだまま眉を寄せ呟く。
「イルカって二足歩行できんのか？皆さんびっくりしねェ？騒ぎになったら置いてくぞ」
＞違うよ姐御ッ！置いていかないでッ！人間に変身すんの。なんたってオレ、海神様の子孫だし！えー、あーっと、“海神ニエルドの

血族セタ、陸に住むヒトへ姿を変える事を望む”！＜

セタが叫び一度海に潜ると、海面に灰色の髪の男が浮かび上がった。褐色の肌には無数の傷がある。

灰色の髪の男は器用に崖を登ると柵を飛び越え、ルリコの横に立った。

「どう？姐御？久しぶりに変身したけど、ヒトに見える？」

意外に長身の灰色髪の男は銀の目を細めルリコに笑いかけた。ルリコは灰色髪の男――セタと呼ばれた元イルカを呆然と見ていたが、いきなり顔を殴り付けた。

殴られふらついたイルカだった男は、赤くなった頬を擦りながら涙目で叫んだ。

「痛いよッ！」

「なら服を着ろ。捕まっぞ」

イルカだった男は、全裸だった。

「あ、そっか。ヒトになるの久しぶりだから忘れてた！丸出しなんだよね！イルカは交尾の時しか出ないから忘れてた！ありがとー姐御」

「いいから服を着ろ。蹴るぞ」

ルリコが射殺しそうな目で睨むと、イルカだった男は何事か呟き青い霧に包まれ、下半身は青迷彩のカーゴパンツ、黒いサンダルに変わった。上は裸のままだった。

「コレでいい？」

「……いんじゃね」

ふんどし姿を予想し、身構えていたルリコはなげやりに頷き貝柱を食べる。セタは機嫌よさそうにニコニコ笑っていた。

（デケェ男が笑いやがっても可愛げのカケラも無ぇよな……なんかカイリを苛めたくなってきた）

ルリコは貝柱を咀嚼しながらセタを見た。

セタの身体には、イルカ状態と同じく無数の傷があったが、顔には右目下にしか無い為余計に目立つ。ルリコは貝柱を食べ終わると、近くにあった竹籠に串を捨てた。
「じゃ行こう姐御！」
「はーいはい」
セタはルリコの右手を引きながら、軽快に階段を上がった。

「お腹へったよー。でも迷うなー」
ルリコはセタに手を惹かれながら歩いていた。キョロキョロ屋台を見回しているセタを見上げながら、ルリコはぼんやり考えた。
（一般女子高生には、照れたりすっべきなんだよな。でも相手が人外哺乳類じゃあな……）
広場の何人かの女性、はセタにアツい熱視線を送っているが、正体がイルカだと知っているルリコは、全くときめかない。
ちなみに、ルリコの好みのタイプは銀行員の竹内力である。不器用タイプだと、尚良い。
「何種類でもイイけど」
「それは悪いよー。六人分だし」
（六匹だろうがよ）
ルリコが内心ツッコミを入れていると、ある屋台の前でセタが止まった。黒い作務衣を来た渋いオッサンが、黙々と肉を串に刺し焼いている。塊を見ると豚肉の様だ。
「姐御ッ、コレがイイ！」
「はいはい。あ、ちょっと大きいモン買うからこの後買い物付き合ってくんねぇ？」
セタは豚肉からルリコに視線を移した。腰に手を当て、視線を上に向け頷く。
「いいよ～。暇だし」
ルリコは荷物持ちを手に入れた。

「よし。アシ代に三本食わしてやる」
「やった！姐御最高ッ！」
「抱きつくな暑苦しい」
ルリコは抱きついたセタを、うんざりとした顔で力任せに剥がした。
（ときめかねぇ……全く持って、ときめかねぇ。むしろイルカの方がときめく様な……あたしは女子高生失格か？ヤンキーとしては合格なのか？）
ルリコは財布を出しながら考え、作務衣のオッサンに声をかけた。
「おじさん、八本お願い」
「……バラ肉でいいか？」
作務衣のオッサンの見た目を裏切らないダンディーボイスに、うっかりルリコはときめいた。早鐘を打つ心臓付近を軽く押さえながら、セタに聞く。
「ッ！え、えっと、どうする？」
セタはしばし肉を凝視した後、真面目な顔で言い切った。
「んーと、出来れば赤身脂身半々がイイ。塩も少なめでッ！」
「……肩背肉でいいか？」
（な、なんて美声なんだ……）
ルリコはうっとりしながらも、力を振り絞り言った。
「はい……。それで……」
「姐御、顔赤いよ？」
余計に事を言うセタに容赦なく肘を叩き込み、落ち着きを取り戻したルリコは財布を取り出した。
「すみません、いくらになりますか？」
「……七百二十だ」
ルリコが料金を支払っている間、セタは蹲って苦しんでいたが、焼き上がる頃には元気を取り戻した。
「……兄さん、焼けたから手を出せ」
「はいおじさんッ！ありがと！旨そー！」

セタは両手に肉を持ち上機嫌だ。ルリコは作務衣のおじさんに礼を言い、先程の場所へ向かった。

ルリコは海に豚肉を投げ入れていた。海洋汚染が気になるが、“海の仲間”が投げろと言ったので気にしないことにした。
＞美味いな＜
＞うめェよコレ！＜
「あ、テホ！ヤムの分まで食うなよ！塩食わせるぞ！」
＞ア、兄貴それだけはッ！＜
＞テホ馬鹿だな＜
「コラー！ゴリ、お前だってテホの事言えないだろッ」
セタはルリコの隣で肉を食べながら、イルカに文句を言ってた。
（平和だ……）
イルカどもに肉を投げ与えながら、ルリコは思っていた。

五匹に一本ずつ豚串を食べさせると、セタがゴミを引き取り捨ててくれた。
（イルカ野郎の癖に気が利くじゃねえか）
ルリコはミニボストンからタオルを取出し手を拭っていると、またセタに腕を引かれた。
「じゃ姐御！なに買うの？」
「色々。具体的には靴と鞄と少年のおやつ」
「さっきのトコか。おーし、行こッ！」
セタに半ば引きずられながら、ルリコは急いで鞄から携帯を出した。表示時刻は、宿を出てから十五分程しか経過していない。ルリコの感覚では二時間以上は経過しているが。
「セタさぁ、電気――雷とか起こせっか？」
「雷？やった事ないよ。必要なかったし」

「そう。おい、止まってこっち向きな。笑顔で」
セタはルリコに言われた通り、止まった後に振り向き、無駄に白い歯を見せて笑った。
カシャッ
「よーし、記念二人目。後は美女と美少女、美中年を寄越せと妹御(いもうとご)は仰るだろーな……」
ルリコが携帯に画像を保存していると、セタが覗き込んできた。
「何それ？」
「携帯型撮影機能付電話機。忘れろ」
「うんッ！じゃ買い物だね」
セタはまたルリコを引きずりながら階段を上がっていった。
（この海洋哺乳類はもっと疑問持たねぇのかよ？）
「忘れろ」と言っておきながら、ルリコは能天気なセタにかなり不安を覚えた。

「はい確かに、毎度ー」
「おっちゃん、ありがとなッ！」
果実を練り込んだ焼き菓子の紙袋を受け取りながらセタは微笑み、紙製の手提げに紙袋を入れる。
「もうお菓子はいいか。次は鞄見に行くぞ」
「上行くんだね！」
セタはまたもやルリコの腕を引き、先導して歩き出した。
「あんた先導してるけど、場所分かんのか？」
「うん！多分！」
「どっちだよ！？」
ルリコはツッコミを入れながら諦め、セタに行き先を任せた。
屋台広場を抜け、倉庫街の様な場所に入ると、広場の喧騒が嘘のように静まっている。

「あー、そういえばあの真珠売ろうと思うんだけどよ、いい場所知ってっか？」
「……姐御、ちょっとマズい。こっち」
セタはヘラヘラしていた顔を引き締めると、ルリコを倉庫と倉庫の間に引っ張り込んだ。セタがまたぶつぶつ言うと、青い膜の様なものが周囲を覆う。
ルリコは指で膜を触ると、何の感触もなく膜を通り抜けた。
「……そーいやぁ、コレって魔法？」
セタは腕を組み、首を傾げた。
「んー、全然違うけど似てる。その辺はものすごい長いから後でなッ！えーと、姐御の涙から出来た真珠だよね？その辺の店では売れないよ」
「マジでか？」
「うん。だって姐御、どこで手に入れたかって聞かれても答えられないよね？」
「確かにな。誤魔化せんのも二回位だな」
「……誤魔化す自信はあるんだ。で、あの真珠かなり大きかったよね？天然だとあんなに大きいの本ッッッッ当に無いんだ。大きくて傷が無いのは“人魚の涙”って言われてるし」
「うっわ、そのまんまじゃねぇか……」
ルリコは前髪を掻き上げ、目を伏せた。
（人魚《性悪女》の涙だから、より美しい……ってか。サド野郎か、より性悪女が考えそーな事だな）
「だから姐御、売るなら普通の所じゃダメだよッ！身元が分かんない所で売って！ちゃんと売る時は変装もしてね！」
両肩を掴み、頭突き寸前の至近距離で顔を覗き込むセタを、「近い！」とルリコは力ずくで引き剥がした。
「分かったよ。あたしも頑張るけど、セタの魔法で変装に使えるのあっか？」
「魔法とはちょっと違うけど……目の色や髪の色変えたり、髭生や

したりはすぐ出来るよッ！」
「――髭はいらねェ。じゃあ売る時は力貸してもらうよ」
「任せてよッ！もういいね」
セタは一度両手を叩くと、青い膜が消えた。倉庫の隙間から出ると、ゴミがついていたのでルリコは服をはたく。セタもサンダルに入ったゴミを取り除くと、再びルリコの腕を取った。ルリコは取られた腕をちらりと見た後、セタを見上げた。
「そういえば、何で腕を持つ？」
「えー、だって離れると見つけるの大変だよ？それに姐御、海の匂いするから落ち着くんだッ！」
ルリコは目を限界まで見開く。
海の匂い。
（……あたし汗臭い！？）
ルリコは表情を凍り付かせ、セタに引きずられていった。

十六話・ヤツは変身も出来ました。（後書き）

イルカの生体について色々調べたのですが、中々面白いものがありました。イルカで四メートル以上のものは分類上、鯨になるそうです。

十七話・適当名と少年のトラウマ

セタはルリコの手を引きながら倉庫街から横道へ逸れ、何度か突き当たりを曲がって竹のトンネルを通り、木製の階段を上がるとまた違った商店街に出た。

「うん、間違ってなかった！ここに鞄も売ってると思うよッ！」

セタがルリコを見ると、ルリコは無表情のまま立っていた。

「……あれッ？姐御？」

セタが目の前で手を振っても反応せず、不安になり顔を覗き込むと、力強く後頭部を捕まれ――

「っオラァァ！」

「ふべェッッッッ！！」

ごちん、と音が響きセタとルリコの額がおもいきり衝突した。セタは額を両手で押さえその場に崩れ落ち、ルリコは額を赤くしたまま、獲物を見つけた肉食獣の様なギラついた目で風呂屋方向を見ていた。

「……帰ったら風呂屋に籠もってやる……」

呻き声に似たルリコの低い声は、土下座をするように道に座り込んだセタは聞けなかった。

「いつまで寝てんだ？立てよセタ。早く鞄とか買っちまうからよ」

「あ、姐御……酷いよ、痛いよッ！」

セタは涙目で、額をさすりながら立ち上がった。

「うるせェなぁ。早く行くぞ海ブタ野郎」

「う、海ブタ野郎って、オレ？」

「おめェ以外に誰がいんだよ？あたしの国ではイルカを“海豚（ウミブタ）”って書くんだよ」

「何ソレ！？扱いヒデェ！？」

ルリコが文句を聞き流し、近くの露店に向かうと、セタも額を擦ったまま急いで向かった。

「どっちにすっかな～。合わせやすいのは黒だけど……白も可愛いな」
ルリコは靴が三足入った籠を抱え、一列に並んだサンダルを見ていた。店の前の竹製のベンチには、大きな麻布と紙製の手提げを下ろしたセタが座っている。
「ずいぶん悩むね？」
「そりゃな。オンナは皆買い物が大好きだし……いいや、両方買う」
白と黒のサンダル両方を籠に入れると、会計に向かった。
セタは全ての荷物を器用に抱えると、ルリコが麻の巾着を持って店から出てくる。
「待たせたな。宿に戻っぞ」
「了解ッ！」
二人は並んで歩き、商店街を上に向かって歩く。
「そういえば、あのイルカ達は平気なのか？島の周りウロウロして」
ルリコがセタに尋ねると、セタは麻袋を抱え直し頷いた。
「平気だよ。たまに悪ガキに松ぼっくりとか投げられる位だし、ご飯くれる人が多いねッ！東や東南の方だと、イルカ食べるから注意しなきゃならないけどさ」
（イルカ食うのか……脂身多そうだな。マンボウなら食べたことあんだよな。あんな感じ？）
ルリコは内心ちょっと食べてみたいと思うと、セタにじろりと半眼で見られた。
「……姐御、もしかして食べたいとか思ったりした？」
「いいやぁ？」
誤魔化したルリコは、歩く速度を早めた。
ルリコは青竹亭の扉を開けた。続けて大荷物を抱えたセタが入っ

てくる。
ロビーのテーブルを雑巾で拭いていたイロは顔を上げた。
「おかえりなさーい……あれ？」
首を傾げるイロを気にせず、ルリコはセタを放置しテーブルに近寄る。
「鍵お願い。カイリにはご飯食べさせた？」
「鍵ね！カイリ君にはまだ。からかい過ぎて布団に包まっちゃったの」
イロは鍵を手渡しながら、セタを見た。
「ねー、ルリコさん、あの人……」
「あ、荷物運ぶからさ、アレ部屋に入れて平気？」
ルリコは入り口付近に立ったままのセタを指差した。
「うん。宿泊者と一緒なら問題ないわ――もしかしてぇ、ルリコさんの彼氏？」
「タダの荷物持ち。鍵どうも」
鍵を振りながらイロの追及を逃れ、ルリコはセタと共に部屋に向かった。

ノックをしても室内から返事が無かったので、ルリコは鍵を開けて室内に入った。セタも「お邪魔しまーす」と続けて中に入る。
「荷物分けるからテーブルの上に。麻袋は下で、手提げはこっちな」
ルリコは荷物を手際良く分けながらセタに指示を出す。ふと、カイリのベッドを見ると、とてもわかりやすく布団が丸まっていた。
「姐御ッ！コレはそっちでいい？」
「ああ、もういいや。助かった」
「どういたしましてッ！」
セタは荷物を全て下ろし、肩と首を回した。
（イルカには肩も首も無ぇ癖に）

ルリコが心の中で突っ込むと、カイリの布団を持ち上げた。デカイ海老が見えると、海老部分を指でつつく。すると、布団からゆっくり目を腫らしたカイリが這い出してきた。
「……っ、ルリコ……？」
カイリは目を擦ると、充血した瞳でルリコを見上げた。弱々しい動作に、ルリコはかなりの罪悪感を覚える。
（相当、イジられたんだな……変なトラウマ残さないと良いけど。あたしのせいだし）
「ただいま、カイリ」
ルリコは手触りの良くなったカイリの髪を撫でる。柔らかい銀髪は、僅かに青みを帯びていた事に気付いた。
「……子供扱いするな。所で、横の男は何者じゃ？」
カイリは背後のセタを見上げると、セタはルリコの隣に来てカイリの顔を覗き込む。
「へー、少年元気になったじゃん。姐御のおかげだねッ！」
他人（しかも男同士）が話し合うには近すぎる距離に、カイリが後じさる。
セタの見た目はイルカ状態に比べ人に与える印象は、強い。長身のルリコより頭一つ分高く、上半身は裸で褐色の肌は傷だらけだ。灰色の髪に銀の瞳も、商店街では見かけなかった。
「カイリ、お礼言いな。コイツもカイリを助けてくれたんだからな」
「そ、そうなのか」
カイリは布団の上で体制を整えると、深々とセタに礼をした。
「助けて頂いた方に何と言う失礼を……」
「いいよ～、気にしないで！」
セタはヘラヘラ笑いながら手を振る。カイリは、がばっと顔を上げ、真顔で言った。
「ルリコ同様、いずれ恩を返したい故に貴殿のお名前を伺いたい」
「え、えーっと……」
セタは困った様にルリコを見る。ルリコも瞬時に察しがつき、セ

タに耳打ちした。
「名前言っていいのか？」
「うーん、ダメかも。何故かヒトには名前聞こえないみたいなんだよね。姐御が言ってるのも略称だし……姐御ッ、オレっぽい名前付けてくれない？」
「え」
「お願いッ！」
カイリは耳元で内緒話をしあう二人を、怪訝そうに見ている。
（名付け親二人目かよ。あー、困る）
ルリコはこめかみを抑えながら、隣のニコニコしているセタを見た。
（髪が灰色……日本的にしちまうか。適当に）
「カイリ、コイツは――は、ハイジロー。ハイジローだから」
適当に作った名前を言うと、カイリが「おお」と更に食い付いてきた。
「変わった名前じゃな……して、家名は何と？」
（家名！？苗字まで言えと！？あたしには聞かなかった癖によォ！）
ルリコは頭を抱えたくなった。
「家名ね……海野、いや、えーっと、何だっけな」
ルリコは関連性の有るものを一気に脳裏に浮かべる。海。イルカ。面白技の数々。
「……ぅ、み、ミナトミライ。ハイジロー・ミナトミライだから」
ルリコが適当な名前を作り終えると、カイリは顎に手を当てた。癖なのだろう。
「この辺りでは聞かんな。姓が長いので、略称はハイジ殿で宜しいか？」
（このあたしが、せっかく色々考えて男っぽい名前にしたのに、某アルプス少女の名前になんだよォ！）
「何でもイイよッ！殿は要らないのに～」
ルリコの葛藤を余所に、セタ――今日から人間時はハイジはヘラ

ヘラと笑った。
こめかみを抑えたままのルリコはある事に気付き、付け足した。
「あ、コイツも偽名だから」
「なんと！？」
ショックを受けるカイリを余所に、セタ――今から人間時はハイジ、は立ち上がった。
「じゃ姐御、もう行くね」
「ああ、あたしも風呂屋行くから一緒に行くけど」
「いいよッ！すぐ下だしね。またね姐御ッ！」
セタは片手を振りながら部屋を出ていった。ルリコも適当に手を振り返すと、荷物の開封に向かった。お菓子の入った紙袋をテーブルに並べると、ショックを受けて固まっているカイリに抱きつく。
「っな、何じゃルリコ！」
「正直に言いな。返事は？」
「と、とにかく分かった！分かったから、抱きつくでない！」
イロ母子の攻撃に態勢が付いたのか、暴れるカイリをルリコは力ずくで押さえ込む。カイリの耳元に唇を近づけ、低く囁いた。
「汗臭くない？」
「は？」
「だから、あたし汗臭くない？」
「は？はぁ、いや、あの……臭くはないと思うぞ」
「正直に言わないと潰す」
脅されたカイリは仕方なくルリコの首筋に顔を近付けたが、汗臭くはなかった。髪や肌から、淡く花や果実の香がする。
（む、むう……汗の匂いはせぬが……ルリコは何を必死になっているのだ？）
カイリはそう思ったが、今更に自分の体に当たるルリコの感触に慌てた。
「あ、汗臭くなどない！儂が保証する！だから離れるんじゃ！」
「……わかった」

ルリコがあっさり離れると、カイリは赤くなりながら小さく呟いた。
「いい若い娘が……無闇やたらに男に抱きつきおって」
「ふーん？カイリも、あんまり生意気なら女湯に入れっぞ。きっとおばさんお姉さん、おばあさんまで大歓迎だ」
変な気迫を持ったルリコがじろりと睨むと、カイリは震え上がり布団の中に隠れた。残念ながら、少年の心に深い傷（トラウマ）を残したようだ。
「お、女湯はイヤじゃあ！」
「遠慮するなよ。カイリも将来、スケベオヤジになったら血の涙を流して羨ましがるって」
「わ、儂は絶対にスケベオヤジになどならぬ！」
布団の中でブルブル震えるカイリを見て、ルリコはお風呂セットを用意し始めた。
「あたしちょっと風呂行って来るからさ、腹減ったらお菓子食べてて。すぐ戻ってくるけど昼メシはその後な」
テーブルの上に鍵を置き、キャビネットから布をバサバサと取り出していると、布団の隙間からカイリが顔を出した。
「……イロやキラは来ないか？」
「見つかんねェ様に行く。三回、続けて五回扉叩いた後に、扉の小窓開けて『海ブタ』って聞こえたら開けて。それ以外は寝たフリして開けなくていい」
「し、承知した」
紙製の手提げから出した水色の籠バッグに布や着替えや財布、風呂屋の木板やお風呂セットを詰め込み、ルリコはカイリを振り返った。
「内鍵忘れるなよ」
「うむ」
ルリコは部屋を出て左に出てガラスの扉を通り、トイレ方面でも水場方面でもなく、中庭に向かった。
中庭の中央には池があり、赤い金魚が泳いでいた。池の周りには

菖蒲か杜若のような紫の花が咲いている。
それらには目もくれず中庭を突っ切り、竹林に入った。奥に進むと生け垣があり、生け垣の隙間から素早く出る。生け垣の向こうは煉瓦の壁だったので飛び乗ろうとすると、新品の籠バッグが振動した。
「ああ、携帯入れといたんだっけな。アイにカイリとイルカ野郎の写メでも送るか。ついでにトリートメントの材料も調べて貰お」
ルリコはバッグから携帯を取出し、受信メールも見ずにメールを打つ。ややこしい内容にメールを二つに分ける事にすると、画像を添付し送信した。
ちなみに、ルリコのメール作成速度は一般女子高生並みに早い。
「時間食っちまったな。急ぐか」
ルリコは勢いを付け壁に飛び乗り、風呂屋に向けて走りだした。

十八話・妹を誰か止めてくださいと祈った

扉を三回、続けて五回ノックした後に、ルリコは金属板の下の窓を開け『海ブタァ！』と叫ぶと扉が開いた。紙袋を抱え白い布を被ったカイリが、キョロキョロ用心深く通路を見回す。

ルリコはカイリの脇を通り抜け、洗濯物を籠へ入れ、テーブルへメニューと籠バッグを置いた。

「ルリコ、そういえば何故“海ブタ”なんじゃ？」

「“女湯”の方が良い？」

「……まあ、何でも良いが。合言葉くらい」

カイリは戸を閉めて忘れずに内鍵をし、紙袋に手を突っ込みながら呻く。

「さ、コレがカイリの分。服は明後日あたりに買いに行くぞ」

テーブルを片付けがてら、カイリの方にある棚へ紙袋や麻袋を置いてゆく。

「こ、こんなにか……？わ」

「『悪い』とかは言うなよ？あたしの好意だ。男なら女の好意は素直に受け取っとけ」

（“好意”を“行為”と勘違いすると別問題になっけどな。カイリにはまだ早いけど）

カイリ分の荷物を片付けると、今度はルリコ分の荷物を片付け始めた。カイリがお菓子を齧りながら甘味メニューを見ている。ルリコはある事が気になり、紙袋を抱えながらカイリに聞いた。

「カイリ、下着ナニ履いてる？」

カイリはお菓子が気管にでも詰まったのか、咽ながら水を一気に飲み干した。

「い、いきなり何を聞くんじゃ！」

「半ズボンみたいの履いてたけどさ、ここじゃあふんどし主流みたいで。皆ふんどし。で、カイリもふんどしか？」

「言えるか！」
「じゃ脱がす」
お菓子を咀嚼しながらカイリはルリコを睨んだが、観念したようだ。顔を赤くして壁を向き、小さくつぶやく。
「……ふんどしじゃ」
「そう。ふんどし好き？」
「……す、好きなわけあるか！尻がほどんと出ておるし落ち着かん！」
八つ当たりなのか、空になった紙袋を荒々しく丸め、静かにゴミ箱に入れた。
「好きじゃねぇなら丁度いい。仕立て屋に頼んできたから、明日にはふんどし脱出できっぞ。喜びな」
「それは、助かったぞルリコ！」
カイリはルリコに向き直りに礼を言うが、からかわれた事に気付き、また怒り出した。
「何故儂に言わせるんじゃ！」
「ふんどしの着用感を聞こうと思って。あたしの下着もどんなのか、言ってあげようか？」
ルリコは流し目を作り口元を吊り上げると、カイリは枕をぼすぼす叩き始めた。
「い、いッ、要らんわ！全く、若い娘なんじゃから皆もっと慎みを持たぬか！」
（皆か……やっぱし色々されたんだな……）
哀れなカイリを見ながら、ルリコはテーブルに座りメニューを眺めた。
「カイリ何にする？ご飯もの食べれる？」
「ルリコは字が読めぬのではないか？」
「そうだけど、適当に頼むのも面白いかと思ってな。好き嫌いないし」
抱えていた枕を投げ、カイリはベッドから降りルリコの持つメニ

ューを覗き込むと、一番上の文を指差す。
「この文字は麺類を意味する。斜め線の後ろの文字が“辛い”じゃ。二つ以上で“激辛”となるので注意せよ。この料理には三つあるから、相当辛いな」
「え！昨日食べちったよ！」
「……苦手でなければ構わぬが」
ルリコは、カイリが辛いものが嫌いだと直感した。
「それじゃ魚の揚げ物ってどれよ？」
「三番目じゃ。先頭の文字が“魚”、線で繋がっている文が“白身”。種類は書いておらぬな。点で区切ってある文字が“揚げる”となる。斜め線のすぐ後ろの文字が“甘い”次が“酸っぱい”じゃ。最後の斜め線の後ろが、大方の味付けとなっておる」
「書かなくてもよくねぇ？」
「分かりやすいじゃろ。まあ群島文字は難解で、旅人は難儀するらしいがの」

昼食を無事終え、カイリに栄養剤を飲ますと眠ってしまった。ルリコは眠っている隙に紙袋からメモ帳を出した。
「ホントに今更だけど、ルーズリーフにすれば良かったよ」
文句を言いながらペンケースを出し、先程覚えた文字を思い出しながら書き綴る。
次にお風呂セットからトリートメントを取り出し、こちらに在りそうな材料を書き出してゆく。
「あ、アイからメール来てるかも」
バッグから携帯を取り出して見ると、メールが五件来ていた。妹がその内二件。着信も何件かあるが、出ないほうがいいだろう。
一応カイリに背を向けメールを確認すると、予想どおり、最初のアイのメールはかなり興奮した内容だった。

『お姉からのメール、アンノウン　ノーウェアってなってたからびっくりした！内容からお姉だと分かったけどね。
学校は多分だいじょぶ。警察行って、両親と大声で泣きまくって捜索届出してきたよ！ちょっと罪悪感残るけどね。でも税金払ってるから役にたって貰わないと！
栄蔵さんが凄い落ち込んでたよ。帰ったら慰めてやってね。マイさん、エリナさん、ユウさんも家に来てくれたよ。ユウさんなんか目真っ赤で泣き出しちゃって、結構可愛いからわたしゾクソクしちゃった。康志郎に飽きた訳じゃないけど、女の子もイイなって。
あ、話それちゃってゴメン！
お姉が拾った少年と部下の人ってイイ！！異世界っぽい！！次は美女と美少女と美中年とか欲しいな！獣耳のヒトとかいたらソレも欲しい！
また脱線しちゃってゴメンお姉。石鹸は葡萄と牛乳がいいな！葡萄カルピス美味しかったから。トリートメントは次のメールにするね。ネットで調べるからもうちょっと待ってて！』

ルリコはアイのメールを閉じ、深々とため息をついた後両手を前で組み、祈った。
「どうか、どうかユウが、妹の毒牙にかかりませんように……」
ユウ――ヤンキー仲間の無事を異世界から暫し祈ると、アイの次のメールを確認する。椿油、真珠エキス、小麦タンパクなど、かなりの数の文字がみっしり書いてあった。
「よく五分でコレだけ調べられるよな……。別に製品名とかも入れねぇでいいのに」
アイの能力に感心しながら、ルリコはこの世界にありそうな材料をつらつらと書き出していった。

「もうそろそろ日暮れか」
水牛の鞄に貰った服を詰めていたルリコは、軽く伸びをすると火打石を手に取った。立てたお香に向かい、何度か打ち付けるが、火はつかない。
「ふ、不便すぎんだけど！」
十回を超えた所でやっと火がつき、肩を回していると、カイリがもぞもそと動き出した。
「起きたー？」
ルリコが手近なランプに火を点しながら言うと、カイリは布団から顔を出した。まるでカタツムリならぬ布団つむりだ。
「むう、寝てしまったか……」
「病み上がりだからイイんだよ。寝ないと大きくなれねぇぞ。あ、髪、寝癖付いてる」
先程買った燕の螺鈿細工の櫛を取り出し、ルリコはカイリの髪を梳く。ルリコに髪を梳かれながら、カイリは気になったことを聞いた。
「随分、看病といい手馴れておるの？」
「ん？ああ、二つ下の妹がいてな。両親共に働いてたし色々世話は慣れてんだよ。従兄弟もほとんど、年下ばっかりだったかんな。よし直った」
髪を梳き終えると、ルリコはカイリの手に櫛を握らせた。
「男だって身だしなみ位整えねぇとモテねぇぞ。櫛くれぇ持っとけ」
「うむ……」
見事な螺鈿細工の櫛を見ながら、カイリは呟いた。
「儂はルリコに、何もしてやれん……」
「気にすんなって言ったろ？そんなに気にするなら文字を教えろ。さあ早く」
「……わかった」
櫛をベッドに置き、カイリはメモ帳やペンとインクを広げたルリ

コの元へ向かった。

「何故教える文字がこんなに偏っておる？」
「明日必要になるから。その次が一般常識系でヨロシク。さー次は“リンゴ酢”だ、どう書く？」
「む、まず“リンゴ”の文字の後ろに線を引き“発酵”の文字を書く。次に“酸”じゃ」
「“リンゴ”部分を“果実”に置き換えると“果実酢”？」
「そうじゃ」
「あー、単語覚えなきゃな。後で単語帳作るか。じゃ次は“王乳（ローヤルゼリー）”」
「聞いたことがないぞ？」
「そこからか。めんどいから後にする。次は……コレはありそう。“羊毛の根元の油分を集め精製した物”。読み方は“ラノリン”で」
「長いぞ！」
「頑張れ。美味しい甘味が待ってる」
ルリコはカイリを適当に励ましながら、カイリに文字を書かせ続けた。勿論、自分のメモ帳に教えてもらった文字を反復書き取りしながら。

「なあカイリ。なんでさ、文字の途中に○や□や△が出て来るワケ？」
「知らぬ。儂も知りたい。○は疑問形の時、●は疑問系の応答時に先頭に付ける。塗りつぶしと白く抜かれた文字では、反対の意味となっておる。四角は疑問系の未来を指す時。三角は同様に過去の時となる。因みに×もあるぞ。禁止の文の先頭に付けるのじゃ」
「うわー、いらねっての……」
ルリコも、異世界で難解と言われる文字を前に、単語帳用とメモ帳を切りながら、頭を抱えそうになっていた。

十九話・仕事が決まりそうです

「今日も快晴、いい朝だ……」
ルリコは起き抜けに一杯水を飲み、電源つけっぱなしの携帯を見た。
表示は、五月十八日の午後七時五十七分。
一日が三時間ほどしか経っていない。
「うわー、早く老けそー。早く手段、見っけなきゃな」
携帯の電源を切り、寝癖の付いた髪を手早く纏めると、風呂の用意を始めた。

ルリコは風呂後、久しぶりの筋トレを小声で始める。腹筋、背筋、腕立て伏せを終え、水を飲もうとするとカイリの方から声が聞こえた。
「……クロリー、儂の……せいで……」
寝言か、とルリコが不思議に思っていると、カイリはうっすらと目を開けた。
「おはよー」
「……おはよう、ルリコ」
目を擦っているカイリに顔洗い様の布を渡しながら、ルリコは尋ねた。
「何か寝言言ってたけど、変な夢でも見た？」
「……寝言、か？」
朝から強張った表情のカイリに、何か勘付いたルリコは誤魔化すことにした。
「ああ、『菓子でお腹一杯じゃ』とか」
「そ、そうなのか……なら良い」
どことなくショックを受けたカイリを、ルリコは目を細めて見つ

める。
「ルリコこそ早いな」
「ああ、癖でね。早朝の鍛錬してた」
「鍛錬？」
「そう。筋肉をつけるためのな」
言い切ったルリコに、カイリは首を傾げた。右側にある寝癖が可愛らしい。
「そこまでする必要あるのか？」
「大アリ。美容の為！腹が出ない為と乳を垂らさない為ッ！この腹を見よ！うっすら割れてるだろ！」
（美容っていう訳じゃねぇけどな！）
寝巻きにしている金魚柄作務衣の腹部分をめくると、カイリが目を見開く。
「……！ルリコ、その跡……！」
「あ、まだ治ってなかったんだっけ。大した事ねぇんだよ、こんなモン」
未だ消えない脇腹の打撲傷を忌々しげに見ると、ルリコは舌打ちした。
「とにかく起きたなら朝ご飯だな。洗濯物のついでに言って来るわ。顔洗っときな」
「う、うむ……」
元気よく出て行くルリコを見ながら、カイリは気まずそうに目を伏せていた。

「カイリさ、もう平気？」
ルリコがゆで卵の殻を剥きながら言う。
「平気じゃぞ。咳もくしゃみも鼻水も出ぬ」
「でも治りたてがぶり返しやすいか……。よし、午前中のみ出かけっぞ。カイリの服買わなきゃ」

カイリは、背中にヨダレを垂らしたパンダの刺繍の服を、普通に着ていた。海老柄も気にしなかったようだ。あまり服には頓着しないらしい。
「儂は別に要らんぞ」
「いや、気にしろ。女物しかねぇんだぞ？流石に女物はイヤだろ」
「……イヤじゃ」
カイリは、野菜の炒め煮を箸で突き刺した。
ルリコは『刺し箸！』と注意せず、にこやかに微笑む。
「だろー？じゃ買い物な。昼食べたらまた文字教えてくれ。昼寝しても良いけど」
「子供扱いするな！昼寝などせぬわ！」
両手で茶碗を抱え怒鳴るカイリを見ながら、ルリコはヌルく微笑み、サラダを咀嚼した。
（分かり安っ。からかうの面白いな～）
先程から笑みを張り付かせたままのルリコを睨みながら、カイリは小蟹のスープを啜った。

朝食を終え、二人は出かける準備をして部屋を出た。
カイリは背にヨダレの垂らしたパンダの刺繍が入った竹柄の作務衣と、黒いベルトに通したダイヤ柄の小さい斜めがけバッグに、白木に白い革のサンダル。
ルリコは左耳に金髪を一筋垂らし、右側で銀の簪を使い纏めていた。服は上が白、下に行くにつれて紫に染まった二部式浴衣を着ている。銀に輝く糸が編みこまれた薄い帯に、青いビーズが付いたサンダルを履いている。手には白いミニボストン。
「服装くらい揃えたいよな。いや微妙か」
「どうしたルリコ？」
見上げるカイリに、妹――アイと同じ位の身長に思わず銀髪を撫でまくった。

「な、なんじゃ？」
「いんや何でもない」
ルリコは鍵を確認すると、連れ立ってロビーに向かった。

「あらお出かけ？」
ロビー前のテーブルには、イロが宿帳を確認しながら何か書き物をしていた。
「うん、カイリの服を見に行こうと思って」
背後に目を向けると、カイリは必死に身を縮めてルリコの背後に隠れている。
「凄い怯えてるんだけど」
「あはは……ちょっと母さん姉さんと遊び過ぎちゃって」
（これでチョットかよ……）
ルリコは少し寒気を覚えながら、イロに鍵を預けた。
「お昼過ぎには帰ってくるから」
「はーい、カイリ君、また一緒にお風呂入ろうね～」
背後を向くと、青い顔でカイリが首を横に振っている。少々可哀想に思ったルリコは、絶対イロ母子にカイリを預けないように決めた。
「ヤだってさ。じゃカイリ行くよ」
「残念～じゃいってらっしゃい」
ルリコが歩き出すと、カイリも前面に回り、早足で宿を出た。

「怯えすぎ」
「わ、わかっておるのだが、どうも……」
カイリは未だ顔色悪く、裾を握り締めながら歩いている。その様子に苦笑し、ルリコは髪を撫でた。
「……あまり撫でるな」

「悪い悪りィ。妹と身長が同じ位だからさ」
ルリコが手を退け、視線を前方の海に移す。
「今は、妹いないからな……」
カイリは遠い目をしたルリコに気まずくなり、ルリコの裾を掴んだ。
「……済まぬ。悪いことを聞いた」
「ん？気にすんな。悪いと思うならもっと撫でさせろ」
「し、承知した」
先程よりも強く撫で回しても、カイリはされるがままだった。ルリコはカイリの“優しさ”に少々イラッとし、耳朶をつねった。
「ひょわ！」
「カイリ甘すぎ。それじゃ本当に痛い目見んぞ」
カイリは顔を赤くしながら、ルリコから離れ睨んだ。睨んでも、もともと少女めいた顔つきをしているので全く怖くない。
強面の集うヤンキーに見慣れたルリコにとって、尻尾を振ったポメラニアンにキャンキャン吠えられる様なものだ。
「メンチのキり方からなってねぇ……暇な時、みっちり仕込むか」
「し、しっ、し仕込む？」
「ダイジョウブ。ゼンゼンイタクナイヨー」
「なんだその胡散臭い言い方は！」
「お姉さまに口答えしない」
学習もせず噛み付いてくるカイリを適当にいなしながら、昨日見た服と装飾品の商店街に着いた。ルリコはカイリに教えてもらったトリートメント成分一覧を書いた紙を、バッグから取り出した。
「先に用事済ましに行くぞ。突き当たりの店だから。あ、動物好き？」
「突き当りの店か……何故動物なんじゃ？」
「それは、お・た・の・し・み」
二人は言い合いながら薔薇の門をくぐる。ルリコは赤い扉を開く前に「前行け」とカイリを押しやった。

前を歩かされたカイリは不思議がりながらも赤い扉を開け、赤い薄布を除け――
「ぬおわーー！」
ルリコはニヤニヤ笑いながら、固まっているカイリを横へ退けた。前に寝そべっている黒豹（仮）は、一度「なー」と鳴きルリコを見ると、足音も立てず奥へ進んでいった。
「謀りおったな…」
「カイリは猫が怖いんだ～」
「アレが猫の訳あるか！」と小声で文句を言うカイリをからかい、更に奥へと進むと、昨日とは少し装飾の違う赤いベールの女性が出迎えた。
「ようこそ“紅真珠”へ」
昨日よりも若干気だるげな決まり文句を聞くと、ルリコは握っている紙を渡した。
「コレ、昨日言っていた髪の手入れに使っているものです。種類によって分けときました」
赤いベールの女性は紙をちらりと見ると、目を細め首をかしげた。
「随分、珍しい物を使っているのね？」
「そ、そうですか？」
「そうよ。とっても……面白そうだわ」
ルリコがどう誤魔化すか悩んでいると、ベールの女性は口元を吊り上げた。綺麗だが、何故かゾワゾワと落ち着かない笑みにルリコは鳥肌がたった。端っこで寝そべっている黒豹を凝視していたカイリも、びくりと肩を竦ませる。
「ふふ、これから忙しくなりそう……」
ベールの女性は紙を丁寧に折りたたむと、ちらりとルリコを見た。ルリコも何故かびくびくしてしまう。
「な、何か……？」
「貴方にお礼、しなきゃね」
足元に寄って来た黒豹を避けながら、ベールの女性は後ろの棚か

ら白い小瓶を二つ取った。なにやら小さく赤い紙が貼ってある。
「これが、最新作の髪の手入れ剤よ。そこの子の分も含めて、あげるわ」
ベールの女性は小瓶を小さな紙の手提げに入れ、ルリコに手渡した。
「あ、ありがとう」
「いいのよ。コレが上手くいったら、また別のお礼をするわ。また来てね」
ルリコが書いた紙を振り、ベールの女性は
一層妖しく微笑んだ。
「わ、わかりました……また来ます」
「待ってるわ」
ルリコは黒豹に視線を向けたままのカイリを引き摺り、迅速に店を出た。

「驚いたわ……目を逸らしたら食われると思うたぞ」
若干顔色の悪いカイリは、未だ赤い扉の方を注視している。ルリコは昨日購入したハンカチで額の汗を拭いながら言った。
「大丈夫じゃん？大人しいって言ってたし、一応」
「大人しい……のか？」
「触りたかった？」
ルリコの問いに、カイリはぶんぶん首を横に振った。
「まあいいや。よし、隣行くぞ」
「ま、まま、また……いるのか？」
「いや、隣はネズミ？」
「なにゆえ疑問形なのじゃ！」
騒ぎ始めたカイリの腕をやや強引に引き摺り、ルリコはオレンジ色の扉を開ける。
オレンジ色の、よくみると白と斑のモルモットが六匹、わっと散

った。
「……」
無言のカイリを引き摺ったまま、ルリコがオレンジ色の薄布をくぐると「いらっしゃいませー」と、昨日と全く同じ調子の営業ボイスが聞こえてきた。
「“橙珊瑚”へようこそー！本日は何をお仕立てしましょうか？」
「昨日頼んだものを取りに来たのですが。控えはこれで」
ルリコがバックから出したオレンジの紙を、同じような橙色のアオザイを着た女性に手渡した。
「はい、ディープシー様。少々お待ちくださいー」
橙アオザイの女性は足元にある“八”というボタンを踏むと、上から紙袋が落ちてきた。
紙袋を無事に受け止めると、カイリが「おお！」と感嘆の声を上げる。
「男性用の下着七枚と、特注の女性用下着七枚で宜しかったでしょうか？」
「はい」
ルリコが財布を出そうとすると、橙アオザイの女性が止めた。
「あのですねー、ここからお客様にご相談がありまして」
橙アオザイの女性は引き出しから紙袋を出し、中身机にを広げた。
広げられたのは、三枚の紐パン。
「お客様の説明通り、わたくしも見本品を作り昨日“勝負”を仕掛けてみたのですがー、効果は絶大でした。通気性も良かったですよ。それに、あれ程“勝負に燃えた”のは新婚以来です……」
そこで、橙アオザイの女性はぽっと頬を染め、染まった頬に手を触れた。
（惚気（ノロケ）かよ……帰っていいかな）
ルリコが呆れていると、橙アオザイの女性は咳払いを一回して、再び話し出す。
「それでですねー、お客様の下着の図案を買い取らせて頂きたいと

思いまして。此方の店は近くの商店街に“萌黄月（モエギヅキ）”という、衣料品店も系列店として経営しております。そちら、で同形式の下着の販売を予定しております」
（もう決定事項なのか……）
カイリは紐パンが何か分からない様で、机の上の下着を見て首を傾げている。ルリコが「あたしが履いてる下着」とこっそり言うと、耳まで赤くして目を逸らした。
「いいですよ」
「感謝いたしますー」
橙アオザイの女性は深々と礼をした後、瞬時にルリコに向き直る。
「お客様は観光でこの島にいらっしゃったのですか？」
「まあ、はい」
「長期滞在する予定でしたら、当店で下着や服の図案を手がけてみませんか？勿論、参考品は差し上げますし、お給料も支払いいたしますー」
ルリコは目を瞬いた。橙アオザイの女性は更に続ける。
「このあたりでは全く見ない斬新な図案でしたので、きっとお客様は様々な引き出し――着想をお持ちと考えまして」
（これは……下着デザイナーとして働かないか？と誘われてんのか。いいのか？女子高生がエロ下着をデザインして）
ルリコは考えたが、なかなか魅力的な申し出だった。
イオシフからせしめた金も多少使い込み、未だ元の世界に帰る手段は、ない。帰る手段を見つけるのはカイリを島に送り届けてからだと思っているし、収入があるのは助かる。
カイリがチラチラとルリコを見ているのに気付き、一度目を閉じ、ん～、と考える仕草をした。
「少し考えさせてください。結論が出たらまた来ます」
「わかりましたー」
橙アオザイの女性は、素早く引き出しを開けた。
「では、図案の手付金として此方をどうぞ」

ルリコの前に出されたのは赤色の花の印刷がある紙幣二枚。
縦棒四本に横棒一本、二重丸は二つ。
五万円紙幣二枚で、十万円。
「え、えーと、こんなに良いんですか？」
「お気になさらずー。商品が大々的に売れれば、もっと儲かりますから。こういうのは早い者勝ちなのでー」
（さすが……商人の国。こうやって釣る訳か……姉妹揃って、恐ろしい）
ルリコは無言で紙幣を受けとった。
「あの、注文したものの代金は」
「女性用は見本品になりますので無料で結構です。ちなみに男性用のものは恐れ入りますが、手付金から差し引かせて頂きましたー」
「……わかりました」
ルリコが紙袋を持つと、トドメとばかりに「返事をお待ちしておりますー」
と背後から声がかかった。
カイリを連れ立って、ルリコは無言でオレンジの薄布をくぐる。すると、入り口付近に屯っていたモルモットが八匹、ぶわっと散った。
「何匹おるのかの……」
「わかんね」
カイリの疑問を聞き流し、疲れた二人は店を出た。

十九話・仕事が決まりそうです（後書き）

今回は此処までです。来週はパソコン部屋の工事があるので更新が遅れるかもしれません。

二十話・少年と子供の境界線（前書き）

前回、十九話が間違えて二十話になっていましたのでタイトル修正しました。今回が二十話です。
混乱させてしまい申し訳ありません。

二十話・少年と子供の境界線

「そ、そんなに悩むものか？」
「もちろん。黙ってじっとする」
服屋にて、カーキ色のシャツをカイリに当てながら、ルリコは反論した。近くにあった赤い星の付いたキャップに似た帽子も、被せてみる。
「人民服……いやなんでもない」
ルリコはキャップとシャツを元に戻すと、次に青い鳥の刺繍が入ったアオザイを手に取った。男性用と区別する為か、合わせが逆になっている。女性用と違い肌が透けないよう適度にも厚い。
「この鳥の良いな。一万円札と同じ。金運上がりそーじゃね？うお、カタツムリ柄！」
似合うとか色合いが映えるとか、全く考えずにルリコは服を決めてゆく。四着目を選び終えると、改めてじろじろとカイリを見回した。
「よし真面目にするか。肌の色含め、全体的に色が薄い……目の色を際立たせるには、色味のない黒白だよな、髪がちょっと青っぽいから青も良いけど。灰色じゃ地味になるし。でも黒はこの国じゃ暑苦しいか」
ルリコはぶつぶつ呟きながら、白い服を片っ端からカイリに当て、頷いたり首を傾げたり忙しない。
「カイリご飯こぼさない？」
「こ、子供扱いするなと言っておるだろう！」
二人のやり取りを、店員のおばちゃんは後方で微笑ましく見つめている。白い服二枚を選び終えると、ルリコは首を捻った。
「うーん、どうしても少年ぽいな。紺とか黒の方が大人っぽい？店員さんも思いません？」
ルリコが店員のおばちゃんに尋ねると、おばちゃんは素早くルリ

コの隣に来た。イロと同じくらい、素早い。
「そうですねー、濃い目の色のほうが、こう、大人っぽく見えますね。暗い赤とかもイイかもしれませんねー。濃い色ならば灰色でも宜しいかと」
「え、地味じゃないですか？」
「縁取りが鮮やかなものもありますよー、勿論、柄や刺繍入りもありますんで。黒系も充実してます。ささ此方ですよー」
目の前に出されては、当てられ引っ込められていく服をカイリは呆然と見つめていた。

黒い紋様の入った手提げ袋を持ち、元気なルリコとは対照的に、カイリはかなりお疲れの様子だった。
「まだ服見ただけじゃねぇか」
「疲れるものは、疲れるのじゃ……」
カイリは疲れが足元まできたのか、手提げの重さにフラフラし始めた。
（ご老体だから血糖値下がったのか？ま、病み上がりだから仕方ないか。黒豹にも驚いてたし）
ルリコは屋台街まで行こうと思ったが、カイリの体調を考え竹のトンネルの近くにある店に入った。昨日の勉強で“喫茶店”の文字は理解出来るようになっている。
「お二人様ですか、こちらどうぞ～」
ピンクの浴衣を着た店員が案内し、メニューを置いていった。開けた窓から、海風が吹き込み心地よい。
熱心にメニューを見ているカイリに「ご飯モノを食べろ」と釘を刺し、ルリコもメニューを見る。理解できる単語を拾いながら考えていたが、面倒になったので一番わからないメニューに決めた。

「カイリも決まった？」
「む。よし、決めた」
店員を呼ぶと食事を注文し、ルリコは冷えた茶を飲んだ。予想通り麦茶だった茶を飲み干し、近くにあった陶器のポットからお代わりを注ぐ。
「そういえばさ、本屋ってある？」
「本屋か？あると思うぞ。何か調べたいのか？」
カイリのコップにも麦茶を注いでやりながら、ルリコは目を伏せ呟く。
「あたし、この国に来て二人に“人魚”って言われたんだよね。最初わかんなかったけど、今は話題の人魚がどのくらい“人魚《性悪女》”なのか気になってて」
「“人魚”……そ、それは……」
「分からなかった時は、気にもしなかったのだけど、ね」
ルリコの、口元は吊り上げているが目は全く笑っていない笑みに、カイリは怖ろしい程の寒気を感じた。
「ま、まあ、一発程は殴ってやると良い。女性を侮辱するとは、ろくでもない輩に決まっておろう。遠慮してやる必要あるか」
「カイリ……あんた、いい男になるよ」
表情を一変させ慈母の様にふわりと微笑んだルリコに、カイリは酷く動揺していた。
近くにあった塩の瓶をひっくり返してしまう程に。
「うぉぉ！どした？やっぱ疲れた？」
「き、気にするでない！甘い物を食せば回復致すゆえ！」
零れた塩を布巾で必死に拭きながら、赤面したカイリは必死に誤魔化した。
「あー、塩ひっくり返すくらい誰でもやっから。そんな恥ずかしがんなよ」
ルリコはカイリの手から布巾を奪うと店員を呼び、謝りながら布巾を交換してもらった。

カイリも店員に謝ると赤面したまま俯き、頼んだ料理が来るまでじっとしていた。

ルリコが頼んだ料理は、無理矢理言うなら
“鶏と海老と茸を挟んだフレンチトースト
カレーソースがけ　旬の野菜を添えて”
であった。
（料理も幅が広すぎて良く分からねぇ。美味しいけど、異世界っぽくねー！）
ルリコはフレンチトーストを箸で苦労しながら千切ると、向かい側のカイリを見る。
カイリは魚のスープがけご飯を手早く平らげ、デザートのバナナパフェを嬉々として貪っている。
（大分元気出た様だな。低血糖だったのか。中身ジジィだから、あたしが気を付けねぇとブッ倒れんな。介護介護）
本人が聞いたら激怒しそうな事を考えながら、ルリコはフレンチトーストを口に入れた。

「無理に付き合わなくても。病み上がりだし」
「良い！儂も本を見たかったのじゃ」
「そう？じゃオヤツ買って帰ろうか」
「……頼む」
二人は並んで歩きながら、店員に教えてもらった本屋を目指す。喫茶店を出た後に、カイリは何故かルリコの荷物を持ちたがったので、好きに持たせた。
その様子を、女性や男性店員に微笑ましく見守られていた。
（子持ちと思われていませんように！）
ルリコは見当違いに念じながら、カイリと共に本屋を目指した。

暫く道なりに歩き、店員に教わった角を曲がると、窓に黒い布を被せた平屋が目を引いた。本の日焼け防止だろう。
「ここ本屋か～」
「隣の建物は診療所のようじゃ。ルリコも、脇腹の具合を見てもらったらどうか？」
「いらね。折れてる感じじゃねーし。ただ見た目が酷いだけ」
ルリコはうんざりした様子で言うと、本屋の扉を開けた。
（診療所であのエロ医者に、腹撫で回されんのはイヤすぎる！）
内心はそう思っていたが、口に出さなかった為にカイリが、
（医者にかかれないのは、何か傷に理由があるのか……儂とした事が、失念した）
と思い落込んでいたのには気付けなかった。
店内は縦に細長く、所々にガラスと金属製のランプがあるが、やや薄暗い。埃っぽさにくしゃみが出そうになるのを抑え、奥へと進んだ。
「で“人魚”の本は神話？世界の民話的なもの？」
先行するカイリは若干背伸びしなら、棚の文字を読み取ってゆく。
「神話であろう。人魚は海神の娘じゃからな」
「神話！？海神様の娘を“性悪女”なんて言っていいの？」
「……それについては諸説ある。しかし、定着してしまった以上仕方ないのではないか？」
「あっさりしてんな……」
（まあ、土地柄がアジアっぽいしルーズなのかもな）
ルリコは自己完結し、本棚を隅からガン見した。カイリは棚に書かれた文字を確認すると本を一冊取り、中身を確かめた。
「此処に神話系があるようじゃ。どうする？ルリコが選ぶか、儂が選ぶか？」
「一冊ずつ選ぶ。カイリとあたしでな。そんな内容も重複しねぇだ

ろ」
ルリコが何も考えず黒い背表紙の厚い本を取り、カイリは何冊か吟味した後、青灰色の本を取った。
「カイリも何か買うんだろ？ほれ」
カイリから本を受け取った後、財布から一万円札を取り出したルリコは、カイリのバッグに無造作に捻じ込む。
「バッグの中に財布も買ってあるから入れとけ。スられすんなよ？」
「……申し訳ない」
「謝んなって言ったろ。じゃ買い終わったら店出るか」
ルリコは本を二冊抱えたまま、別の書棚に向かった。カイリもしっかり財布に紙幣を仕舞ってから、本を探し始めた。

「“オ・ル・マリーヴェスタ群島諸国連合の歴史”と、“群島諸国の特色”でいっか。大陸含めて国ごとの民族性の違いの本とかも欲しいけど、まだ必要ないか？」
少しでもこの世界の知識を増やす為、ルリコは歴史と地理くらいは覚えておこうと思った。文字と一般常識は適当に手に入るが、歴史について人に根掘り葉掘り聞くのはどうかと思う。
（ま、カイリは老人だから聞くの嫌がんないと思うけど。風呂屋でも聞いてみっか）
目の前にあった“イスタヴェラ王国史”を開くと、物凄い量の埃が舞った。
「わ、げほっ、ごほ！今日はもうこの二冊でイイや。場所覚えたし」
開きかけた本を急いで元に戻し、ルリコは埃舞う一角から迅速に抜け出した。

レジと思われる場所で寝ていたお爺さんを揺さぶって起こし、購入した本を抱えて店を出る。本は高く、四冊で一万九千もした。
ルリコは何も買わずに店を出たカイリを探すと、日陰で野良猫を

かまっていた。
黒白鉢割れの猫は、ルリコを見ると怯えたように逃げ出す。
「買い終えたのか？」
「カイリこそ買わねぇのか？金足りなかった？もっとやろか？」
「いや！欲しい本が無かっただけじゃ。気にするでない」
カイリは名残惜しげに、塀の隙間に逃げてゆく野良猫を見ながら言う。
（やっぱ黒豹触りたかったのかねぇ？）
「次はオヤツ買いに行くか」
「昨日の焼き菓子は美味であったぞ。また食べたい！」
「新しい店の開拓じゃなくて？いいけどね」
二人は並んで、屋台街を目指して竹のトンネルをくぐった。
「あ、猫じゃ！」
「こら！カイリ！転ぶぞ！」
赤トラ柄の猫を追いかけて走るカイリを見て「子供（ガキ）だなあ」とルリコはしみじみ呟き、急いでカイリの後を追った。

二十話・少年と子供の境界線（後書き）

プチリフォームで変な照明を付けられたので画面が真っ赤に見えます。

私は母の嫌がらせと認識しました。

二十一話・埋蔵金は無いと思っている派（前書き）

今回は世界の神様等の説明みたいなものです。

二十一話・埋蔵金は無いと思っている派

海神は二人いる。
まず、海神ニエルド。
船や港、貿易、漁業を象徴する海神。足が綺麗な美丈夫。
山ノ神スカジアナと結婚するも離婚。
鯨や海亀を始め、沢山の子孫がいる。
群島連合各所で、大々的に祭られている海神である。特に、イスタヴェラ王国で夏に催される祭りは、最も盛大な物である。

もう一人は、海神エーギル。
外海の神で、波などの無慈悲な自然現象を司る白髪、白髭の海神。
妻は“溺死の網”の持ち主、ラーン。
娘は九人の悪名高い人魚、波の乙女。
群島連合では、各国が季節に一回ずつ、持ち回りで祭っている。

人魚とは、上半身が裸の女性、下腹部から下が魚の形状をしていると言われる。特に海神エーギルの娘の、九人の人魚《波の乙女》は、皆長身で輝く金髪を持っていたと言われている。
九人の人魚“波の乙女”の名前は、後世で付けられた物なので諸説有るが、一番有名なものを紹介する。

マリアンネ＝ヒミングレーヴァ
“天に輝くもの”という名を持つ人魚。
輝く美貌に策略を隠す、腹黒い人魚である。

カステヘルミ＝ドゥーヴァ
“沈める波”という名を持つ人魚。

目についたもの全てを海中に沈める、怠惰な人魚である。

アリッサ＝ブローズグハッタ
“血塗れの髪”という名を持つ人魚。
自らの長い髪を、生き物の血で染めるのが好きな嗜虐癖を持つ人魚である。

サリ＝ヘヴリング
“高くせりあがる波”の名を持つ人魚。
高波を起こし、人が慌てふためくさまを見るのが好きな、幼児性の残酷さを持った人魚である。

ティーア＝ウズ
“叩きつける波”の名を持つ人魚。
波を島や船に叩きつけ、自らの感情を統御できず喚く人魚である。

ヴィルヘミーナ＝フレン
“重なる波”の名を持つ人魚。
姉妹に言われるまま、波を幾つも重ねる傀儡めいた人魚である。

シル＝ビュルギャ
“取り囲む波”の名を持つ人魚。
人や生き物をじりじりと取り囲み、笑う妖艶な人魚である。

エルシー＝バーラ
“漂流者を弄ぶ大波”の名を持つ人魚。
漂流者を見つけては波で弄ぶ、自虐癖を持ち自らを卑下する人魚である。

リータ＝コールガ

“押し寄せる大波”の名を持つ人魚。
無差別に大波を起こす、気性荒く柄も悪い人魚である。

以上から、殆どの人魚は波を操る事が出来ると推測できる。

人魚は、海の世界で海神に次ぐ地位にあったので、海の生き物全てが人魚に怯えていたという。稀に人魚が陸に上がると、陸の生き物でさえ怯えていたとの記述も見受けられるが、定かではない。

尚、各書物において“人魚”は美女や美少女だと書かれている物もあるが、私を含め実際には見たことが無いので保障は出来ない。

因みに、神話時代に幾千万の船を沈め、多くの財宝を奪っていたと考えられる。

人魚も他の神々と同じく、巨人と神々の戦いの後に消えたと言われているが、“人魚の涙”と言われる極大粒の真珠が一定周期で出回っている為、今も生存しているという説も多くある。

「あたしこんなに性格悪くねぇつもりだけど」
青灰色の本を見ながら宿のベッドに寝そべりつつ、ルリコは呻いた。
カイリは少し前に、そばかすの従業員――タネクが風呂屋に行くというので、連れて行ってもらった。男同士なら安心だろう。
「にしても……あのツリ目、覚えてろよ……」
唸る様に低く呟くと、黒い本を開く。

「うわ、字ィ細かっ！」
目次の索引を見ても読める単語が少なく、流し読みしていくと、“人魚”の単語を見つけた。先程のカイリの講義を思い出しながらルリコは解読を続けた。

人魚の財宝について、エーギルの館にあるというのが一般的な考えだが、私の考えは異なっている。
幾千万の船を沈めたと言う事は、財宝もそれだけあると考えられる。勿論、一箇所とは限らない。
数々の書物と航海記録を照らし合わせ、独自の調査を行った私は、人魚が財宝を隠した場所を予想した。
中央なら、センタナ島近くの――の真ん中。
北なら、東からの海流と――がぶつかる――――海溝。
南なら、島の奥に――――海と繋がった――――のある島（名称は忘れてしまったが）。
西なら、――火山―山―に沿っている西大陸の――――半島に近い海底火山。
東なら、中央からの海流とぶつかる東南部分の――――島付近の――の礁湖付近。

私の調査では、人魚は少なくとも以上の財宝を持っていたと推測する。
母、ラーンの“溺死の網”
人魚姫（メロウ）の涙で作った真珠の耳飾り
金亀・銀亀の甲羅の簪
強力の腕輪
虹色珊瑚の腕輪
賢者（クヴァシル）の血のボトル
女神（イドゥン）の林檎の砂糖漬け

どんな髪型にもなれる、魔法のカツラ
小さな指輪

小さな指輪については、私の友人の叔父の親戚の男の母の遠縁の娘の勤め先の商人が持っていた物で、いらいらしなくなる効果があるという。

「地名は流石に読めないな……。まあでも、徳川埋蔵金みたいなモンか」
ルリコは本をなぞり、指輪の記述がやけに詳しいのに疑問を感じた。
「しかしなんで“小さな指輪”の事だけ熱心に書いてるのかね。ホントに他人じゃねえか。それに、いらいらしなくなるって……指輪に頼らずカルシウム取れよ」
ゴロゴロとベッドの上に居るのも飽きたので、ルリコは立ち上がりスクワットを始めた。

「おー、おかえり」
「ななな、何をしている！」
ルリコがブリッジの体勢で風呂から帰ってきたカイリを迎えると、そのままゆっくりと起き上がった。
「鍛錬。やってみる？」
「い、いや、いい。……新種の祈祷かと思ったぞ……」
カイリは謎の行動に少し怯えながら洗濯物を籠に入れると、近寄って来たルリコに髪を撫で回された。
「のわっ！」
「うっわ、髪スベサラ！すっげー」
すべすべでさらさら、略してスベサラとなったカイリの髪を掻き

回すと抵抗し始めた為、ルリコはカイリを抱きかかえた。
「ケチんなよ。触らせろ」
「く、首ッ！し、締まってるそ！」
「ん？ああ、悪ィ」
「はっ、離せと言っておる！むむ、む、胸が」
「気にすんな」
カイリは必殺手段か、ルリコの顔を狙い始めたので渋々離してやった。
「全く……」
撫で回された髪を手櫛で整え、赤い顔でカイリは睨んだ。ルリコは首を傾げてカイリを見つめる。
「それじゃあ怖くねぇよ。睨むって言うのは、こうっ！」
一瞬で阿修羅像に似た容貌に変化させたルリコに、カイリは怯え衝立の後ろに隠れた。
「どう？」
「……別人にかと思ったぞ」
カイリが恐る恐る衝立から出てくると、ルリコは荷物を引き出し風呂の用意を始めた。
「やり方教えてやるよ。コレでナめられねぇ、と思う。まー保障できねぇけどな」
「考えておこう……眠い」
ぐったりしたカイリはお菓子袋を抱えベッドに横たわり、ボーっとし始めた。
「ちょ、まだ寝るな！せめて風呂の用意し終わってから！」
ルリコがかつて無い速度で風呂の用意を整えると、カイリを揺さぶり起こした。
「……まだ、だいじょぶだぁぁ」
（し、志村●んみてぇになってる……！）
眠気に負け変な人状態のカイリに、ルリコはとっても不安を感じたが、カイリを信じる事にした。

「ちゃんと内鍵掛けるんだぞ！ゆっくり風呂入るから腹減ったら何か頼んどけよ！」
カイリを引き摺り扉の脇で待機させ、少し待ち扉を押すと動かなかったので、ルリコは安心したが、ある事が気になった。
（まさか床で寝てねぇだろな……風邪ひくぞ）
やはり不安は消えなかったが、取り合えず風呂屋行ってから考える事に決めた。ルリコは不安を打ち消すように、通路を早歩きで歩いた。

傾き始めた太陽を背に、風呂屋に到着すると珍しく若い女性が五人ほど居た。
（一応、一般調査しとくか）
番台のお婆さんに札を見せ、ルリコは自然に見える様若い女性達を凝視し、服を脱ぐ。
勿論、ルリコも花も恥らう（かは人による）女子高生なのだが。

女性達の下着は皆、色とりどりのカボチャパンツだった。
（お姉さん方！あんた達損してるよォォ！）
ルリコは表情を変えないまま盛大に嘆き、お風呂セットを抱え風呂に入った。

手桶でお湯を掬い、石鹸をモアモア泡立てていると、女性グループにいきなり話しかけられた。
「ねぇ、あなたの石鹸すっごいいい匂いするけどどこで買ったの？私達、今日この島着たばかりなの。教えて？」
「あ、これは服と装飾品が売ってる通り……えっと、宿で聞けば地図貰えますよ。その通りの、突き当たりの薔薇の門をくぐった先に

ある赤い扉の店です。でっかい猫いるから分かりやすいです。石鹸も沢山種類あるし」
「猫？あたし猫大好き！カワイイ？」
「……ま、大人しい黒ネコ？です」
「黒ネコ！あたし黒猫一番好き！」
「ありがとー、宿で聞けばいいのね。明日あたり行ってみるわ」
「いいお土産教えてもらっちゃったねー」
（猫って言っちゃったけど、腰抜かしませんように……しかも宣伝しちまったよ）
うっすら後悔しながら、気合を入れてルリコは体を洗い始めた。

二十二話・異世界にて、技を磨く

風呂屋の布でルリコは髪の水分を拭いながら、貰った手入れ剤の効果に戦慄を覚えた。
「これは……現代のトリートメントとタメ張れんな。いや、多分石油系のもの使ってないだけ、こっちが上か？」
ぶつぶつ呟きながら簡単に髪を簪で留めると、オレンジの夕日を浴び金髪が赤みを帯びていた。しかし根元は茶色のまま。
「あー、脱色剤、いや染色剤とか無いか聞いてみよ」
服装を整え、果実水を二杯ほど飲みルリコは風呂屋を出た。西日が眩しかったので目を閉じると、いきなり肩を掴まれた。
西日に眉を寄せながら、掴まれた肩に顔を向けると、サワヤカに青年が笑っていた。
「キミ良かったら、一緒に食事――」
「断る」
ルリコは瞬時に肩を振り払い、前に進む。しかし、何故かお兄さんたちの集団が邪魔をする。
「じゃ俺と！」
「オレが先」
「てめぇ抜け駆けすんなよ！」
青年達は無駄に言い争っているが、全くルリコは興味が無い。前髪を掻き上げ、ふう、と息を吸い込み、ヤンキー仕込みの気迫を滲ませる。
「ウゼェ。散れ」
先程より低い声を出し、青年達を睨み回すと散り散りに去っていった。ルリコは肩をゴキゴキ回すと、男湯から出てきた少年と目が合った。
薄茶の髪に青灰色の瞳をした、カイリとタイプは違うが負けず劣らずの、きりりとした美少年だった。

「あ、あの、また会いましたね！」
ルリコは記憶をざっと洗ってみたが、該当する人物が見当たらず、首を傾げた。
「何処かで会った？」
「覚えてないんですか？」
（ナンパの常套句だけど、この少年は違うよな……カイリと、見た目同じくらいだし）
考えを打ち消したルリコは、もう一度少年をじっと見た。
「悪いけど、記憶に無いね」
「そうですか。それならいいです」
少年は一度深呼吸をした後、ルリコをまっすぐ見つめた。
「あの、良かったら僕と一緒にお食事でもどうですか？」
ルリコは二回瞬きした後、少し考え込んだ。
（断るのは簡単。だけど、色々聞きたいこともあるしな。あんまり下心ないみたいだし、扱い易いかも）
薄茶の髪の少年を、頭からつま先まで見た後、ルリコは頷く。
「この島と国のこと詳しい？」
「はい。僕、宿屋の従業員なので」
ふーんと唸りもう一度頷き、少年を見つめ返した後、笑った。
「いいよ。食事だけなら」
「本当ですか！？」
「うん。だけど店は指定させてもらうよ。緑竹でいい？」
「はい！どこでも構いません！」
少年は嬉しそうにルリコの横に並んだ。笑い顔もやはり、カイリとは違う系統の少女顔だった。
「僕はソロンです。お姉さんの名前、聞いてもいいですか？」
「ああ、あたしは――ルリコ」
ルリコは目に入りそうになった前髪を触りながら、少年に向かい微笑んだ。

ルリコはソロンと共に緑竹に着き店内に入ると、やはりアジアチックだった。内装はこげ茶と黒と唐竹色で、ランプは竹を模している。テーブルに置かれた緑色のマットが一際目立っていた。

店員に半個室席かテーブル席か聞かれたので、薄茶の髪の少年――ソロンに聞いてみるが「テーブルでいいです」と答えた。

（半個室でもイイのに。一人ならどうとでも出来るしな。武術の達人とかじゃないだろうし）

テーブルに案内されると薄茶の髪の少年――ソロンはメニューを広げ「何にします？」

と明るく聞いてきた。

「へー、じゃホントに変わってるんだ？」

「そうです！徹底した実力主義なんですよね！」

ルリコは春巻きみたいな揚げ物を摘みながら言った。ソロンは上機嫌で厚揚げの炒め物（ただし激辛印五つ）を食べている。話を聞きながら笑顔で「すっごーい！良く知ってるね～（棒読み）」と褒めるのも忘れない。

（何であたし、異世界来てコンパ技磨かなきゃならねェんだ……）

笑顔のまま自分の行動にげんなりしつつ、ルリコはサラダを咀嚼した。同時に聞き出したことを整理する。

この島、テキルダ島とイスタヴェラ王国一大きな島であり港、イスタンヴェストとを結ぶ砂浜で、よく貝が取れること。

イスタヴェラ王国を象徴する花は椿ということ。

この国では商人は稼ぐほど税金が高くなり、生産者は生産するほ

ど税金が安くなること。
イスタヴェラ王国の住民票は、簡単に購入できること。住民票を買うと同時に、国立両替所の手続きが出来、住民票を持っていれば王国内で他通貨の両替や、お金が自由に預け払いできること。但し、借りる時には住所確認が必要であり、利子は二十日で一割ほど取られること。
因みに、他の国での住民票は、三年以上の滞在と住所登録、職業の表記と登録金として十万ほど必要となること。
テキルダ島では、旅行者向けの宿屋のほかに、長期滞在者向けの貸し宿・貸し家もあり
住所登録が出来ること。

イスタヴェラ王国には、三人の王子と二人の王女がいること。
一番年少の王子、もしくが王女が十六歳になるのと同時に、次の王国継承者の選定試練が始まること。
選定試練の内容は、各自十万円から始め、二月後に一番所持金が増えた者を次の継承者にすると言うこと。尚、選定試練の間は王国の宮殿があるユトラ島には立ち入りが禁止されること。

「あと、ウチの国は重婚も認められてるんですよ」
「へえ。他の国では禁止されてるの？」
「はい！群島連合が祭る“海神ニエルド”は離婚している神様なので、離婚には寛容なんですが、重婚はウチの国だけですね」
「変わってるんだ？」
「はい！結婚を申し込む方が女性で初婚の場合、男性は基本的に断れないんです。申込んでから二月の間が婚約期間で、申し込んだ方

が全ての結婚資金を出さないといけないんです。性別が反対でも同じですよ。二回目以降の結婚は、申し込まれた方の奥さん、若しくは旦那さんと相談した後に決めます。但し、重婚同士の結婚は禁止されてますよ」
ルリコは、昼ドラのようにドロドロした愛憎劇が頭の中をよぎった。お茶を一口飲んでから、半眼でソロンに聞いてみる。
「……重婚の相談て、修羅場じゃね？」
「修羅場ですよ」
ソロンはさらりと言い放ち、イカの揚げ物を摘んだ。
「まあでも、上手くいってる所もありますが。偶に、心中事件とかになったりしますけど」
「やっぱ憧れる？」
「友人は言ってますが、僕は全く。刺されたくは無いです」
普通に食事を続けるソロンを見て、ルリコは感心した。
（カイリも、ソロンと同じ位しっかりしてたら……）
多分宿で幸せそうに寝ているカイリを思うと、ルリコはちょっと悲しくなった。
「あ、ソロン君。何か変わったもの売ってる所知らない？」
「変わったもの、ですか？」
「そう」
ソロンはすり身の揚げ物を、じっと見た後に言った。
「この島はそんなに無いですよ。所詮、イスタンヴェストの付属物みたいなものですから。イスタンヴェストの倉庫街の裏か……」
揚げ物を口に運びながら、ソロンはちらりとルリコに探るような目つきを向けた。
「ルリコさん一人だと危ないですから、その辺かと」
ソロンの視線が気になったルリコは、顔を近づけてソロンの顔を覗き込んだ。
「危ないところ有るの？」
黒い瞳に見つめられ、ソロンは視線を彷徨わせた後、溜息混じり

に話し出した。
「……危険ですよ？」
「平気。あたしも商人目指してるからなるべく色々知りたいの。ダメ？」
ルリコは上目遣いでソロンを見上げ、トドメとばかりに首を傾げてみせる。
（キモッ！あたしキメェ！胃がアツイ！！）
内心、自分のキモさに胃酸が滲み出るのを感じたが、ソロンは頬を赤くして「仕方ないですね」と視線を逸らした。どうやら有効だったらしい。
「……あまり言いたくないんですけど、イスタンヴェストの港からほんの少し離れた場所に“解放区（クリスチャニエ）”と言う一角があります。昼間は静かですが、夜間は麻薬・奴隷など違法品を扱う市場になっています。この一角は“どこの国にも所属しない”という扱いになるので、犯罪などの巣窟になっています。海上警備団、王国検察局も入ることが出来ないので危険ですよ！」
ルリコはガラスのコップに入った果実水を回した。
「ふーん、国が認めた無法地帯、か」
「そうですね。本当に女性一人は危ないですよ。あの場所じゃ殺されたりしても罪にはなりませんからね……僕の叔父さんも商人なので、解放区（クリスチャニエ）で二年近く店を出してたんですが、店を壊されたのが五回、売り上げ盗まれたのが八回、暴行を受けたのが二十三回、その上両足を怪我して立てなくなってしまいました」
ソロンは目を伏せ、残っている激辛料理を片付け始めた。
「ごめんね、変なこと聞いちゃって」
「いえ……気にしないで下さい」
気にするなと言ったが、雰囲気が何か暗くなってしまった。黙々と食事をしながら、ルリコは明るくなる話題を探す。
「あ、そうだ。この辺で釣具の貸し出ししてる所って知ってる？」
激辛ソースがけの温野菜を食べながら、ソロンは考え込んだ。

「釣具、ですか……潮干狩り用の道具は大体宿で貸し出ししてますけど、釣具は宿を選びますね。観光協会の広報誌で見れますけど」
「ん～、そっか」
「ルリコさんは釣りが好きなんですか？」
「うん、叔母夫婦が漁師で。小さい頃は良く船に乗せて貰ってた」
「珍しいですね」
女性の漁師は、やはりこの島でも珍しいのか。
確かに早朝からの体力勝負であり、電力で網や釣り糸を引き上げるモーターが無いと女性にはキツイ仕事であろう。
そんなことを考えながらサラダを咀嚼していると、少し離れたところから「ソロンじゃねぇか！」と男の声がした。ルリコはソロンを見ると、眉を顰めて舌打ちをしていた。
「よー、こんなトコでどうしたよ？……ん、お！これまた美人ネェさんと一緒じゃねぇか！？ミナスに報告しなきゃならんな～」
男はソロンの隣に来ると、酔っているらしく赤い顔でバンバンとソロンの背中を叩いた。ソロンは如何にも鬱陶しそうに手を払いのけると、もう一度舌打ちをした。
「ミナスにはやめて下さい。鬱陶しいですから」
「友達がいの無ェヤツだな～」
男はげらげら笑いながらソロンの頭を撫で回した。ソロンは男を睨みつけ、手を払いのけてからため息を付くと、ルリコに向き直った。
「すみませんが、面倒な人に見つかったので失礼してもいいですか？本当にすみません」
「ああ、そんな気にしなくても。話聞かせてくれてありがと」
ルリコが笑いながらソロンに手を振ると、ソロンは一度目を伏せてから、ルリコの手を掴んだ。ルリコが目を瞬くと、ソロンはルリコの目を見つめながら真剣に言った。
「あ、あのッ！またお誘いしてもいいですか？」
「……いいけど。食事したり買い物したり位なら付き合ってあげる

よ」
（アレ？なんか男女逆じゃね？）
慣れない台詞にルリコは少し首を傾げたが、ソロンは顔をやや紅潮させて何度も頷いた。
「は、はい！有難うございます！」
そんなソロンを微笑ましく見ていると、男がソロンの肩に腕を回してニヤニヤ笑った。
「ヘッヘヘッ、ソロンよォ、上手く約束したなァー」
「黙ってください。さ、帰りますよ」
ぴしゃりと言い放つと、財布を取り出したソロンにルリコは「待った」と声をかけた。
「あたしが払うよ。色々聞かせてもらったしね、まだ食べるし」
ソロンは戸惑いつつ、男の腰から素早く財布を抜き取ると首を振った。
「いえ！女性に払わせる訳にはいきません！」
「いいから。お姉様に甘えときなさい」
ルリコがニヤリと笑うと、ソロンは渋々引き下がった。男の財布の中身を確認してから、ルリコを見つめた。
「……それなら、次は僕が払います！約束、忘れないでくださいね！」
「覚えとくよ。ソロン君」
「あのッ、ありがとうございました！」
ソロンは何度もルリコに礼をすると、男を引き摺りつつ店内を出た。ルリコがサラダを突付いていると、隣に人が来た。
ナンパか？と睨みながら見上げると、お盆を抱えたイラがニヤニヤ笑っていた。
「ルリコさんの年下殺しー」
ルリコは言いがかりを付けられた。

青竹亭に戻り、部屋の扉を叩くと目を擦ったカイリが扉を開けた。
「今起きた？目やに付いてる」
「そ、そんなことはないぞ！」
カイリは目を隠しながら慌てて顔を洗いに行くと、ルリコは肩をゴキゴキと回してベッドに座った。
カイリが布を持って戻ってくると、ルリコはストレッチを止めて紙袋を渡した。
「ご飯食べたか？揚げパン買ってきたけど」
揚げパン、と言ったが具がみっしり入っているので、何に近いかと言われるとピロシキに近い。
「菓子は食べたぞ。これで良い」
カイリは早速揚げパンに齧り付くと、濡れた布を籠に入れた。
「菓子？そんなんじゃ身長伸びねぇよ？」
身長、を強調して言うとカイリは恨めしそうにルリコを見た。それなりに気にしているらしい。
「よーし、明日早朝から泳ぎに行くからイイもの買ってくる」
机の上に置きっぱなしの地図をチラリと見る。ソロンの話では、船で風が良ければ二十分程で酪農を主にしている島に着くらしい。
（泳いで一時間もかからねぇだろ。人魚形態なら、直ぐに着く筈。なり方分からんけど。あのイルカどもに色々聞くしかねぇか。暇だろうし）
勝手に決め付けて足首を回していると、もう一つの事を片付けようと、カイリに話しかけた。
「あー、後、明日夜出かけるから。多分帰りは朝」
ルリコの言葉にカイリは目を見開いた。目を彷徨わせ唇を噛んでから、慎重に話し出す。
「……誰かと、何処かに行くのか？」
目を細めたルリコは頬杖を付きながら、意地悪そうに口元を吊り上げた。

「子供には教えられねーなぁ」
「儂は子供ではないぞ！ルリコの方が子供ではないか！」
顔を真っ赤にして反論するカイリを見て、ルリコは笑みを深めた。何処と無く妖艶な笑みにカイリはびくりと目を逸らす。
「面白いくらい反応すんな～。ま、只の売買だから気にすんなよ。夜に賑わう店らしくて」
「そ、そうか……」
カイリは顔を赤くして、空になった紙袋を丸めた。まだ顔の赤いカイリを見て、ルリコはまたニヤニヤ笑い始めた。
「エロい事想像したんだろ？」
「えろ……？」
顔を赤くしたまま見上げてくるカイリに、ルリコは一瞬素の顔の戻ったがまたニヤニヤ笑いはじめた。
（やっぱ通じないか。話の流れで分かりそうだけど。“お子様”なんだな）
「あたしの……えー、隣の隣の国あたりの神様で愛の神様だな。愛の神様エロス。大体会話で出てくる時は性愛を表すけど。性愛って、解る？」
「せっ……！」
耳まで真っ赤にしたカイリを満足そうに見て、ルリコは頷いた。
「性愛くらいは解るみてぇだな？」
カイリは布団を被って隙間からルリコを睨んだ。ルリコが楽しそうに「お子様」と言うと、衝立を引き隠してしまった。
（虐め過ぎたか。でも楽しいんだよな～。癖にならねぇ様に気をつけないと）
ルリコは少し反省しながら荷物を開け始めた。化粧道具と水着やゴーグルを確認し、タオルに包んだままの金色の真珠を見つめる。
（変装用にすんごく派手な服買うか。すぐ処分するから古着でもいいし。極妻っぽくしてぇなー。草履もあったし）
真珠をタオルで軽く磨いていると、カイリの寝息が聞こえてきた

ので苦笑した。
「……ホントよく寝るよな」
真珠をタオルに包み荷物の奥にねじ込むと、カイリのベッドに行き衝立を畳んだ。
穏やかな寝息を立てながら、カイリは寝ていた。右足がベッドからはみ出でいる。
右足をベッドの中に戻し、ルリコが布団を直していると、カイリが少し身じろぎした。起きた様子では無いのでカイリの方のランプを消すと、衝立を元に戻した。
（詮索する気はそんなに無ぇが、カイリも人身売買で連れて来られたクチだろ。何で海にいたかはわかんねぇが。服も栄養状態も悪くは無かった。が、枷付きだもんな。あたしに凄い懐いてるし、多分）
ルリコは自分のベッドに座ると、髪を解いて頭を振った。金髪がさらりと広がる。
「今考えても仕方ない、か。明日考えるか」
手早く寝巻きに着替えると、ルリコは布袋と厚めの布を持った。
「やべ、カイリに歯磨けって言うのを忘れてた。明日『甘いもの禁止！』って脅かしてやろ」
眠っているカイリの方を見ながら、ルリコは歯を磨きに水場に向かった。

二十三話・優しい海のお友達

早朝、日が昇る前にルリコが起床すると携帯がチカチカ光っていた。
「げ、電源切っとくのわすった……」
薄明るい中で携帯のディスプレイを見ると妹からメールが二件来ていた。
一つは学校のこと。意外と学校の皆にルリコは心配されていたらしい。
もう一つは、妹からの質問だった。
国の風習はどんなの、食べ物は変わらないの、ケモノミミが生えた人はいないの、等。　何より気になったのがこの一言だった。
『お姉はそっちで暴れたりしないの？』
「……アイは何か勘違いしてんな」
ルリコとて、好きで問題を起こしてるわけではない。日本人らしく“平和が一番”と思っている。
「ま、ヒト殴ったり蹴ったりしないのはいい事だな。拳も爪先も靴も痛まないし」
どこかズレたことを言いながらルリコは水着に着替えた。

青竹亭の裏にある階段を下り、ルリコは小声で呼んだ。
「セター、イルカどもー、いるー？」
暫くすると、イルカ六匹が右手から現れた。
＞……おはようございます＜
＞姐御、朝早ぇっ！＜
＞出かけるんですか？＜
＞おーはーよー。姐御ー＜
＞おッはよーーございますッ！＜

＞俺ら、何処でも付いてきまスぜッ！＜
「一気に言われると誰が誰だかわかんねぇよ。とりあえず、おはよ」
ルリコはイルカ六匹の前でしゃがむと、腹を見せている傷だらけの灰色イルカをつついた。
「息絶えた？」
＞……生きてるー。いきてるよー＜
灰色のイルカ――セタはゆっくり回転するとルリコに顔を見せた。顔面はイルカなので判別不能だが、声？がとにかく眠そうだ。
「イルカの癖に朝弱ぇのかよ」
＞イルカはー、関係ないよー＜
五匹のイルカは楽しそうに、船着場に乗り上げたり周りをぐるぐる泳いでいるのに、セタだけぴくりとも動かない。
因みにルリコは、この世界に来て常に七時間睡眠の為、毎日朝早く起きている。
「まあいいや。なあ、どうやったら人魚になる？風呂で泳いでも変態しなかったんでな」
＞あまり変態って言葉は使わない方が良いですよ。姐御＜
黒っぽいイルカが話しかけてきたが、黒いイルカは向こうでぐるぐる泳いでいる。違いは物凄く微妙だが。
「そういえばセタの名前しか知らないや。あんたらの名前、何？」
＞はっ、ご紹介が遅れて申し訳ないです。私はハンです＜
＞俺はゴリっス！＜
＞ボク、テホって言います！＜
＞オレはイル。よろしくな！＜
＞……ヤムだ＜
微妙に喋り方、いや、超音波の出し方に違いを見出したが、太陽がまだ昇らない薄明かりの中では色の違いは判別しがたい。辛うじてわかるのは白いイルカ（多分イル）のみ。
＞あー、姐御さァ、なんか買ってきてくれればコイツらに付けるよ？ヒトにとって色の違いは微妙だしねー＜

セタは腹を見せたまま話し出した。
（イルカって、上の穴からの肺呼吸じゃなかったっけ？まあ、とんでもイルカだからいいけど）
「んー、じゃ何か考えとく。で、どうやったら人魚になる？南東の島行きたいんだけど。無理なら普通に泳いでいくけど」
＞……結構ありますが＜
（多分）ヤムが言ったが、ルリコ不敵適に笑って腕を組んだ。
「往復十キロ位ならヨユー。よく寝たし沢山食べてるから」
＞さすが姐御でさァ！＜
＞姐御！カッコイイ！＜
（恐らく）イルとテホが騒ぐが、知っていると思うセタはぴくりとも動かない。見かねた（何となく）ハンが、セタの脇腹あたりにタックルした。セタの体がくるくる回って顔部分が見えた。
＞……ゴリー、テメ、覚えてろよ＜
予想が外れてルリコはちょびっと悔しかったが、大人しくセタの言葉を待った。
＞わかんなーい＜
「……何だって？」
＞だから、わかんない。足を戻すのだって人魚がやってたの見ただけだし。そーいうのはさ、自分の意識が大事なんじゃないー？＜
投げやりなセタの言葉に、ルリコは無言でサンダルを脱ぐと、セタの頭部を思いっきり叩いた。
セタは何も言わず、叩かれた後くるくる回り沈んでいった。
「良く考えれば、テメェのような海豚（ウミブタ）野郎を当てにする事が間違ってたな」
ルリコはサンダルと上着を脱ぎ捨てると、ジップロックに入った財布等を置き、軽く準備運動をして海中に入った。少し冷たい海水に体が震えるが、すぐに馴染む。思い切って潜水をすると、自分の服装が目に入る。
予備で鞄の中に入っていたタンキニの上に、小さい貝殻の描かれ

た巻きスカート。
（真珠換金したら、水着作ってもらお）
海底近くから目を閉じたままゆっくり浮き上がる。あの足の感覚を思い出すように念じると、巻きスカートが解けるのを感じた。
目を開けると、薄く光が揺れる海面が見える。巻きスカートが海中に漂っていた。
足は、いつの間にか魚の下半身に変わっていた。足先は透ける青い尾鰭に変化している。
（この、感覚か。人前でならんよう注意しねぇとな）
巻きスカートを掴み海面に出ると、少し息苦しく、慌ててジップロックを取ると海中に戻った。感覚的に深呼吸すると、首の下と脇腹に変な感触がした。触れてみると、何やら切れ目が入っているようだった。
「エラ、か。本格的に人間やめてるなー……」
ルリコが呟き、ジップロックとサンダル、上着を巻きスカートで包むと海面に出て方向を確認した。
＞姐御、上手くいったみたいですね。どちらに行くんですか？＜
（今度こそ）ハンが尋ねると、ルリコは南東方向を指差した。
「タムジャ島。こっちだっけ？」
＞ん、大体あってんじゃん？＜
＞……そうもいかんだろ＜
＞姐御！ボクたち案内します！＜
「いいの？」
ルリコがイルカ達に尋ねると、五匹がキュイキュイと鳴いた。
＞兄貴役に立たないんじゃ申し訳ないッス！＜
＞場所も多分、合ってる、ハズ？＜
＞間違ってはいない筈です。行きましょう＜
イルカ達は前に二匹、後ろに三匹に並ぶとゆっくり泳ぎだした。ルリコもスピードを上げないように付いていく。

このあたりは透明度が高い様で、うっすらと刺して来た日の光が海底近くまで照らしていた。稀に、ジュゴンやウミガメが出てきて、
＞うぉお！人魚じゃ！＜
＞ギィャーー！人魚おる！＜
＞げ！マジ！？オイラ殴られたくねぇわ！＜
と散り散りに逃げていった。
ルリコも「あ〝あ！？」と柄悪く睨んでしまったのも有る、かもしれない。
＞姐御ー！もうすぐだよ！＜
テホ（の気がする）が声をかけると、海の底が近くなってきた。岩が多かったが、細かい石になり、砂になってゆく。
「ここまでいいや。ありがとな」
＞帰りも付き合うよ！姐御！＜
＞兄貴の代わりでさァ！＜
＞どちらにしろ戻らねばなりませんから＜
＞……遠慮するな＜
＞オレ、まだ飛ばし足らねーよ！＜
イルカ達はルリコの真上で旋回している。
「わかった。ありがと。昼メシ奢る」
＞オレ！海老がイイっす！＜
＞貝柱も美味しいですよ＜
＞肉を忘れるな＜
「あー、後で希望聞くから。じゃちょっと待っててくれよ？」
ルリコは海面に上がり、深く深呼吸すると上に登れそうな場所を探した。先に牧場の様な低い建物がある。モーモーとも、聞こえる。
「乳牛だといいけど」
右手に登れそうな場所を見つけたので、慎重に近づいていった。

「おはよーございまーす」
牧場の従業員と思われる飼葉を抱えたおじさんは、ルリコを見て慌てた。
「ど、どどどうした嬢ちゃん？ずぶ濡れじゃねぇか！？」
「あはは、泳いできましたから」
ルリコは布で髪を拭いながら笑った。おじさんは目を見開き、ルリコを見つめた。
「お？お、おおおお泳いで！？どっからよ！？」
「テキルダ島からです」
「はーーーー」
おじさんは口を半開きにしたままルリコをじろじろ見た。暫く見ると、若い娘の濡れた姿を見るのは失礼、と思ったらしく顔を引き締めた。
「まー嬢ちゃんが泳ぎが得意なのはわかった。で、ウチに何か用か？」
「あのですね、牛乳を売って貰おうと思いまして」
「牛乳……？ん。確かに、季節柄テキルダ方面には送れんなあ。よしわかった、すぐ用意しちゃる」
「帰りも泳いでくので密封して下さい」
「おっしゃ、待っとれ」
おじさんは飼葉を抱えたまま威勢良く奥に走って行った。

ルリコが陸に上がった場所に戻ると、イルカが五匹、鳴きながら集まってきた。
「待たせたな。じゃ帰るか」
昔懐かしい、革紐の付いたアルミの牛乳容器を抱え、ルリコは海面に飛び込んだ。

サンダルを軽く洗い、上着を畳み包むと潜水しようとしたが、テホ（推測）が鼻先でルリコを突付いた。
＞姐御、泳がなくてもイイよー＜
「なんで？」
いつの間にか、イルカと会話することが普通になってしまい（どんな不思議チャンだよ……）と少し落込んだが、全く表情には出さなかった。
＞疲れたと思われますから、乗って下さい＜
＞……話し合いの結果、イルに決まった＜
＞俺らも援護するんで、さぁドゾー！＜
＞さ、さ、姐御ッ！早く行こうぜ！＜
白いイルカ、イル（認識済）がルリコの股の間に潜り、背鰭の後ろにルリコを乗せた。
（ちょ！あたしパンツ履いてない！）
ルリコは一瞬慌てたが、相手は海洋哺乳類なので気にしない事にした。イルカと言っても、皆三メートル程はある。ルリコ一人位は軽いのだろう。
＞姐御。意外と重いな＜
ルリコは容赦なく、背鰭の根元を親指でグリグリと押した。
＞痛！痛い痛い痛い痛いッ！＜
「どんな生き物でも、女性にそれは禁句。よく覚えとけ」
＞……は、ハイ＜
イルは神妙に返事をした後、ゆっくり動き出した。後の四匹も続いて泳ぎだす。
＞姐御！背鰭にしっかり掴まってくれよ？ハン、隊列どうする？＜
＞本来なら波鳥の陣を押したいですが、どうせ飛ばしたいんでしょう？姐御、荷物を私にかけて下さい＜
＞じゃ矢の陣でイイんだな？姐御早く早く！＜
「おま、急かすなよ！」
ルリコは急いで目の前のハンに牛乳容器を巻きつけた。体ごと巻

きつけるようにしたので、体がツルツルしていても平気だろう。
＞終わった？終わった？じゃ、いくぜー！＜
イルは、アクセルを踏み込んだスポーツカーの様な急加速で泳ぎだした。
あまりの速さに濡れた水着が冷たく感じるが、輝きを増した太陽光線が背を暖めるので不快ではない。
「自分で泳ぐのもいいけど、これも悪くない」
＞だろー？もっと飛ばすぜ！＜
イルは機嫌良さそうに速度を上げてゆくが、ふとルリコが背後を見ると四匹の先頭のヤム（憶測）がかなり後方にいた。
「イル、飛ばしすぎじゃね？」
＞いいっての。あと少しだし！普段こんな飛ばさねぇから！な！＜
イルは速度を上げ続けながら、瞬時に漁船の脇を通り抜けた。
網を持ったマッチョなオッサン達が、呆然とイルカに乗ったルリコを見ていた。
＞ヘッ！オッサン等ぼけっとしてら！＜
ルリコはオッサン達の呆然としていた顔を見ながら、三月にあった家族カラオケを思い出した。
母――知恵（ともえ）が歌った歌手は、イルカ。
（いや！もっと何か……）
また漁船の脇を通ると、呆然としたオッサンに混じり、若い坊主頭の兄さんがルリコに手を振っていた。
しかしルリコは思い出すのに必死なので気付かない。それ以前に、船ですれ違った人々に、例え子供であろうが、手を振り返すほどノリは良くない。
（そうだ！イルカに乗った……！）
完璧に思い出すと、ルリコはいきなり恥ずかしくなった。しかも、先程から思い切り目立っている。漁師の皆さんがびっくりだ。
「は、恥ずかしい……」
顔を下に向け、イルのツルツルした体表を見ていると、イルが驚

いた様に叫んだ。
＞お、姐御。花束流れてきた＜
「取るな！絶対取るなよ！」
赤い顔のルリコが必死に叫ぶと、イルは驚いて反論した。
＞取らねぇよ！多分海で亡くなった人用だし！おっ、カモメ集まってきた～＜
「やっやめてくれ！散れ！散ってくれ！」
＞どした姐御？なんか変＜
集まってきたカモメを散らすように、激しく手を振るルリコにイルは不審がった。
「何でもない……何でもねぇよ」
ルリコは首を振りイルの背鰭に抱きつくと、いきなり力いっぱい叫んだ。
「財布と上着忘れたーー！」
＞あ〝＜
イルは急ぎ旋回し泳いだが、後から追いついてきた先頭のヤム（憶測のまま）が上着の包みをくわえていた。
＞姐御、不注意だ……＜
「ありがとう、そして、ごめんなさい」
ついでにルリコはヤムだと確認した。

＞あ！皆して何処行ってたの？オレだけ仲間はずれッ！？酷いよ！＜
太陽が昇り、すっかり覚醒したセタが喚いていると、ルリコと五匹のイルカは横を通り過ぎ自然に無視した。
＞姐御！気持ちよかった！？＜
「気持いいってのは……ちっと語弊があるけど楽しかったよ。人に見られるし目立って恥ずかしいけどな」
＞だから姐御、顔赤かったんだー！＜

＞深夜や早朝なら良いと思いますよ？場所外せば漁船もいませんし＜
＞……長距離でも平気だ＜
＞皆で今度は夜の海に行きましょうぜ！＜
　一人と五匹が賑やかに話していると、取り残されたセタが固まっていた。ギギギ、とゆっくり旋回して賑やかな皆さんを見た。
＞な、なんで無視すんのッ！オレ泣いちゃうよッ！姐御！イルッ！ヤムッ！ゴリッ！ハンッ！テホッ！＜
「っせぇ。海豚野郎（ウミブタ）」
＞姐御酷いッ！せめて視界に入れてよッ！＜
「テメェの豆粒大の目なんか見えねぇ」
＞兄貴、自業自得です＜
＞昼飯抜きでやんの兄貴ー！へへッ！＜
　ルリコは笑うイルの上から身軽に降りると、上着を着てスカートの裾を直し、ハンから牛乳容器を受け取った。
「皆、ありがと、助かった。昼は希望のモノ持ってくからな」
＞やった！ありがとー姐御！＜
＞塩は少なめでお願いします＜
＞……同じく＜
＞俺、大きいのをお願いしやすッ！＜
＞じゃな。また泳ごーぜ姐御！＜
　五匹は仲良く並び、ルリコを見送った。
＞……えっと、姐御？オレのは？＜
　セタが恐る恐るルリコに問いかけると、ルリコは冷たく言い放った。
「海豚野郎（ウミブタ）に食わせるメシは無い」
　セタは大げさに嘆きながら海に沈んでいった。

二十三話・優しい海のお友達（後書き）

来週からは二話ずつの更新になりそうです。
その分文字数は増える、かもしれません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9708g/

人魚になったヤンキー

2010年10月15日01時05分発行